

329
157



始



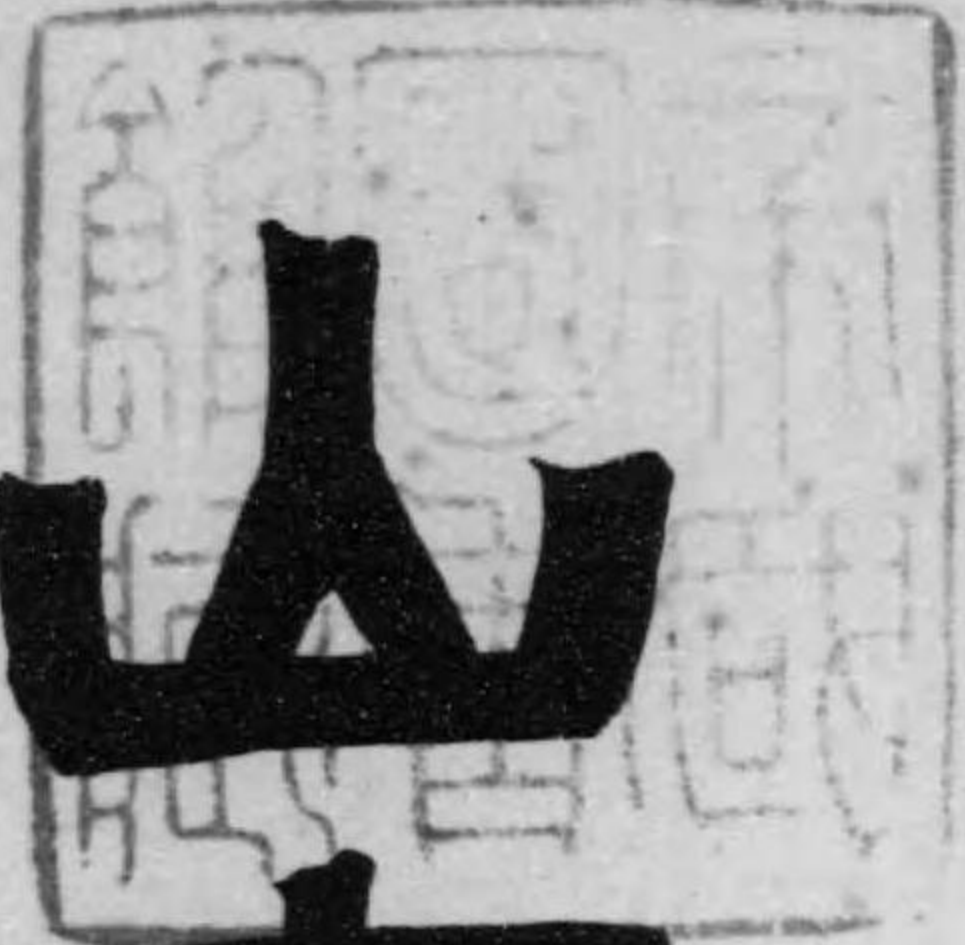
329
154

碧瑠璃園著

山鹿素行



山鹿素行



六五
1.12.16.
内交

山鹿先生之賢任義久遠某 尊伯遂令畫工寫其形神因請
賢不難門人水陸王並 丁三歲夏育中繪日科謹題

大哉文武本世攝師
教人不倦愛物無私
胸襟在甲志在旌麾
名實相合古今博知
常談以道正坐有儀
高山仰止舍是其誰
存則請見履後致思
第任榮達子孫善法



素行

山鹿先生
素行

心學如何微乎素行善門
如何希賢希聖也
得論勉承事即先賢
可為人師也投儀道化
較善也德是德表內
証中聖德今在玉後如
值人無競德恭謹乞瑞
莊靜正不在他求是在
子孫 孫家爵伯浦松

(松浦伯爵家藏) 山鹿素行肖像

遠くはるかにありて又も此の筆才の中へ
 筆の如くありて又も此の筆才の中へ
 人を知るは筆の如くありて又も此の筆才の中へ
 友を知るは筆の如くありて又も此の筆才の中へ
 天の命を知るは筆の如くありて又も此の筆才の中へ
 一に筆の如くありて又も此の筆才の中へ
 一に筆の如くありて又も此の筆才の中へ
 一に筆の如くありて又も此の筆才の中へ

(松浦伯爵家蔵)

山鹿素行目次

目次	目
第一章	山鹿家
一、二、三、四、五。	一
第二章	大人らしき子供
一、二、三、四、五。	一五
第三章	林家入門
一、二、三、四、五。	三〇
第四章	跡目相續
一、二、三、四、五。	四五
第五章	麒麟兒
一、二、三、四、五、六、七、八。	五九
第六章	昔語
一、二、三、四、五。	八五
第七章	教訓
一、二、三、四、五、六。	九八

山 鹿 素 行 目 次 畢

第八章	武士の胤	一、二、三、四。	一一九
第九章	熊夜叉	一、二、三、四、五、六、七、八。	一三〇
第十章	元服	一、二、三、四、五。	一五七
第十一章	戀か劍か	一、二、三、四。	一六九
第十二章	小供自慢	一、二、三、四。	一八一
第十三章	武士道の芽	一、二、三、四、五、六、七、八。	一九二
第十四章	奇しき病家	一、二、三、四。	二二三

山 鹿 素 行

第一章 山 鹿 家

碧 瑠 璃 園

『一』

秋の最中の月は光り清く小田山の森を照せど御濠の柳凋れ落ちて、三つ五つ風に散る葉の上にも、憐れの露を宿さぬぞなき、まこと此の城には因縁浅からぬ野州公（松平下野守忠郷朝臣の事、忠郷は蒲生飛騨守秀行の嫡子にして、氏郷の孫なり、大御所家康の外孫なれば將軍家の御覚え愛たく、秀忠公より御諱一字を給はり、松平の姓をも許されたるが、氏郷の没後事ありて宇都宮に歸され、徳川氏一統の後、秀行をして、再び舊封の中六十萬石を繼ぎたりき）逝去あらせて後は、七重の天主臺に黒き雲掩ひ重りて、お花畑に咲く花も香り無くお庭に繁る松の

翠も、例にはあらず褪せて見えたるが、果せるかな御舎弟たる侍從兼中務大輔忠知朝臣、伊豫松山に所替へすべき旨御沙汰蒙らせしより、會津の城下は一時に秋風荒みて、常磐木の葉木にも、野山の裾に亂れ咲く千草の露にも、淋しき色漲り見えぬ、それも御加増、御進級の沙汰ありて、芽出度く封を轉へさせられしならば、土地の百姓町人も、多少慰む所あらんを、六十萬石は削られて二十萬石となり、今まで召使はれし御家人も、多くは永の暇となりて、昨日まで住み馴れ見馴れ聞き馴れたる、城、家、山河、松風、鐘の音、鳥の聲にも別れを告げ、道中の行装のみ、大祖父郷が知行せし百萬石の名残を見せて、表面は春風、裡面は秋霜の心淋しく、新知行所へ旅立たせし、その御心中察すること、心なき女童も袂の頭を絞らぬはあざさりき。

されば御暇となりし家人の面々、皆それづくに便宜を求めて、奉公口探し求むる中に、家老の筆頭と立てられて、二萬石の大祿を戴き居たる町野長門守は、格別の家柄なるに由り、新に將軍家お召し出し、知行五千石を下されて、百人組の組頭を勤むべき御沙汰ありき。
山鹿六右衛門高道はこの長門守の客分なりき、屋敷は城外の河原町にあり、杉の生垣荒れ見えて、一もと楓紅葉する間を、渡り鳥鳴き渡る、六右衛門は老僕の利平とて、心利きたる

を供に伴れ、今屋敷へ歸りたり。

『お父様、お歸り遊ばせ』

年齢は六歳、眼の色清しく、瞳孔黒く、髪の色澤極めて好きが、立關次の間へ駆け來りて、姿凛々しく手を支きぬ。

『お、佐太郎か喃、父が在らぬ間、柔和しう留守してあつたかな』

六右衛門は四十の上を五つ六も越えたらんと思はる、年輩、眼光尋常ならず、眉太く、鼻筋通りて、廣き額に向ふ疵二ヶ所、當年の武勇を語る如く怪しく残る、身丈六尺に餘るべし、淺黄絹の小袖に、あらしき縦縞の袴着けて、蠟色鞘の一刀を腰に佩し、一刀を左の手に携へたるが、領主没落の憐れなる様を見來りたる目の中、流石に曇りを帯びて見えき、佐太郎は奥書院に通る父の後を逐ひ掛けながら、

『お上御容體、什麼やうにござりまするな』

六歳の子供には老せたる間なり、六右衛門はまづ座に着く。

『お父様々々』と佐太郎は呼び續け『お上は何とござります』

息づかひ、詞つき、への字形に結びたる口元、大人も及ぶまじき構へなりき。

『三』

六右衛門歸り來りしと聞きて、惣領の惣左衛門も出て來る、後に次ぎて、年紀は三十を多くは出てまじき姥櫻の憐れなるが、天目茶碗に茶の香り好きを入れて運び出づ、然も皆な面上に雲を帯ばぬはあらざりき。

『お上什麼とござります』

惣左衛門の間も又佐太郎と同じなりき、彼等が指してお上と云ふは、云ふまでもなく町野長門守の事なり。

『まづ御無事ぢや』と六右衛門は云ひ切りて、徐に茶碗を取り上げぬ、姥櫻の狀態憐れなるは、次の間に淋しう坐りて、風に傷む姿、されど尙散りもせぬ風情痛々し。

この姥櫻は名を多具と云ふ、城下より程遠からぬ多具郷に産れたれば、取りて名に呼べるならん、多具の御とも、多具の方とも、人々の心々に呼び做せるなり。

『まづは重疊、嬉しいこととござります』

お多具はほつと吐く息の下より云ふ、佐太郎は兩手を膝に支きたるまゝ、

『御發足は何時とござります』

『早や明日に迫らする、老公(長門守の父、左近の事)は侍従様御供に立たせられて、松山へ赴かせたまひたる御歸り途、江戸に止りおはしませば、お上は御家門御家人衆伴はせて、明日未明當所お立ちと御決定、その旨御家中一統へ觸れさせた』

『さらば當所も、今日を限り見納めとござりまする喃』

お多具は一語ごとに露を持ちて、六右衛門の真心に身を憑する如く云ふ。

『思へば一炊の夢、甲斐ないは人の上ぢや、當城もとは黒川の城と呼ばれて、葦名彈正眞盛築きあつたを、文祿元年參議様(氏郷のこと)に下されてより、若松の御城とは命けさせられた、その後も幾多の變遷、あア其後も幾多桑葦の變に遭うて、一度は上杉殿御所領ともなつてあつたが、江戸將軍家思召し淺からず、飛騨守様(秀行の事)宇都宮に世を狭められて、十二萬石の御所領、有るか無いかに過させられたを、慶長六年上杉殿米澤に所替あらせらるゝと諸共、再び舊縁の地を下されて、こゝへ御歸城なさせたるから、御代は萬歳、お家の基礎、大盤石と動ぎなきやう、御城下の人々腹鼓打ちて、御壽申し上げたは、まだ昨日のやうに聞くを、飛騨守様御逝去、下野守様(忠郷の事)御相續、續いて世を早う失せたまひたる後は、御家の光り漸う薄れて、慶長六年より、今年寛永四年まで、僅か二十七年を榮華の夢、東國の果

から四國の果へ移されたまふ、我等舊恩の方とは無いも、長州公御扶持に生きる間、やはり頭に戴く月日ちや、御心中推量り参らすること、この腸をす々に裂く如く思ふぞ」と云ひさして目を屢叩く。

『まことに武門の生涯ほど、憐れに果敢ないはござりませぬ』とお多具は一言、秋草をすり箔せし素絹の袖を打掩ふ。

『なれと過ぎ去つた事返りませぬ、一たん枝を離れた花元へ還りませぬ、昨日よりは明日、今よりは後の用意、當家を什麼と御處刑なされます喃』

二十を過ぎたる兄惣左衛門も黙して云はず、生の腹のお多具さへ、泣くより外に分別もなき中、六歳の佐太郎只獨り一家前途の事に氣付く、さすがの六右衛門も、末頼母しく空恐ろしきまで利潑なる我子の間に思はずも膝を向けて、

『善い事を問ふ、佐太郎は子供でも、その心は大人ぢやの』

【三】

惣左衛門も亦惘れたるやうに佐太郎を見返りて、

『弟には先を越さるゝ、此方心付かない事も、彼の小さい胸に心付いて、針よりも鋭う問ひ

掛ける、過ぎ去つた事はさて置き、後々御處分、家の規模何様御立てあらせらるべき、最も肝要の儀、父上お覺悟ござりまするか喃』

『さ、其處ぢや、當お城は加藤左馬之助嘉明殿に給はらせて、近々御移らせもあらずる氣、我等長州殿御恩の下に生きながら、阿容々々と退きおかれて、人に面を見らるゝは本意でない、その事長州公も同情らせ、碌々老人、これと手柄も無く、覺えもない身を、百人組與方に御推舉、二百五十俵下さる旨御沙汰、今日伺候の席において、涙催さるゝほど、御懇の御意を下された、今に始めぬ御恩情、惣左衛門も忘れるな、佐太郎も幼心に、よく覺え置かねばならぬ』

『さらば、さらば』と佐太郎は心の満ちたる臂を張りて『父様やはりお上組下の與力衆に爲らせらるゝてござりまする喃』

『いや』と六右衛門は頭を掉る『ちと存じ寄りの次第もあるで、乃公は参らぬ』

『え』とお多具は濕りたる顔を擡げぬ『お上思召しを、無になさるでござりまするか』

『お情は無にせぬ、乃公も今年は四十六、假しお組下に参らうとも、いつまで御奉公爲り難ぬる、骸骨に鎧着せて、先陣に立たすは、正しい武士のせぬことぢや、代りには惣左衛門がなる、惣左衛門は家の惣領、然も二十二、御奉公の命が長い』

「お、」と佐太郎は歡びの聲を擧げ「兄上御仕官ござりまする喃」
「乃公の心は長州公よく知らせちや、乃公の覺悟は長州公御胸に響いてある、惣左衛門出仕の事、長州公御同意、明日發足の供に加へ、江戸へ同道するとの御意、何とも有難い、惣左衛門よく爲やうの」

「父上御意に背くこと致しませぬ」

「きつと致すか」

「家名を繼ぐは、惣領に生れた身の務め、一命を捧げて、御奉公致しまする」

「それで安堵、それで山鹿の家は立つ、まことに芽出度い」

「而てお父様は喃」

佐太郎は再び問ふ。

「乃公は隠居ぢや」

「御隠居とは」とお多具は心に關ることある如く「惣左衛門様御同道」江戸お屋敷へ移らせられるてござりまするか」

「まだ命が残つてある、まだ佐太郎が残つてある、まだ其方が残つてある、二百五十俵御扶持

の中を、彼方此方囓り取るは慈悲で無い、乃公は乃公で道を求める」

「さらば父上、私御同道は下さりませぬ喃」

惣左衛門は不満の聲。

「そなたは天下直參、歴としたお主がある、身の勤めは只一つ、忠義の道即ちこれぢや」

「は、なれど……」

惣左衛門が何事をか云はんとするを、六右衛門は押へ付け、

「まづ聞け、佐太郎は次男、乃公に従くから浪人の子、身の勤めは只一つ、孝行の道、即ちこれぢや」

「は、なれど……」

「其處で乃公ぢや、浮世の上も飽き果て、武士の境遇も爲盡した、身の勤めは只一つ、天に盡す道、やがて是ぢや」

「天に盡さする道と申すは……」

惣左衛門と佐太郎とは左右より問ひ掛けぬ。

「今見する、待て」

徐に刀の小柄を脱きて、つくつく焼刃を見つめて居たが、

『これぢや〜』

云ふより早く警をふつと切る、ばらりと亂る、胡麻鹽の髪、左手に残る小き鬘。

『や、や、や』

お多具と惣左衛門とは後に倒る、如き驚き。

『四』

佐太郎は眼を睨りたるのみ詞無かりき。

『これ、武士の勤めは爲らぬ、忠義の眞を他に移して、今から仁の道に就く、仁の術は即ち醫、六右衛門高道の名を天に還して、玄の又玄、深く醫道に立ち入る心をもて、玄庵と改むる、左様心得』

『え、え』とお多具は吃る如く云ふ、心の驚愕容易に鎮まるまじく見えぬ。

『お父様御剃髪、その身を何れに置かせます喃』

佐太郎は沈着いたる様。

『そなたとお多具とを伴れて、江戸へ移り住む心ぢや』

『さらば兄上と同じやうに、江戸の住居を致すのでござります喃』

『兄上は天下直參、そなたは町醫者の倅、同じ江戸に住居しても、同居は勿論協はぬ』

『同居は協ひませずとも、同じ土地に住みてあらば、時々お目に掛る便宜ござりまする、只一方のお兄様、遠く距りあるを好みませぬ』

『佐太郎殿、よく云うてたもつた、その心は私も同じぢや、同じ江戸にあるから、明暮に往來もせう、御奉公は私一人でするも、孝行は和御前一人に任せぬ、私の爲めにもお父様、半を分けてたもるわの』

『皆が辨へ、それでこそ乃公の子ぢや、孝行の半を分けて、兄弟同じ道に盡すといふ、その健氣な心を見ては、家の事語り聞かすも故障無い、乃公が過去打ち開くるも後學の補足にならう、よく聞け』

六右衛門は形を正す、惣左衛門と佐太郎とは行儀よく前に居並ぶ、次の間にはお多具、淋しげに黙居たり。

『今までは云はてあつたが、今日を限り武士の道廢つるから、武士であつた昔譚、長州公御父子御恩の次第、悉くを語り聞かする、一は懺悔、一は惣左衛門後日の心得、大切事ぢや』

外には繡眼兒頬白のちと鳴く聲長閑に聞こえ、内には六右衛門が懺悔物語、憐れに勇ましさを交へて響く。

「乃公はもと伊勢國龜山の御城主であつた關一政様に仕へたものぢや、その時はかすく武功を思召されて、三百六十石を頂戴、番頭の一員にも擧げられ申した、同役に數野金左衛門とて、心曲つた者があつた、年輩は乃公より三歳弱う、武邊の嗜みよりは、巧言を取柄とする、忠義の誠を披くよりは、阿諛辯舌を前にして、御前お心に取り入りあつた、その金左衛門がさ、惣左衛門の母に懸想して、語るも忌はしき艶書ども送り参つた、母は物堅い生れ、手にだも取らず突き返したを根に持ち、さまざま、讒言、さまざま、悪口、乃公の面上に泥を塗る仕方、一度二度は勘忍も爲申した、三度五度は燃え立つ怒りも鎮め申した、なれど度重つては怒し難く、早やこれまでと覺悟して、母は離縁、召使の誰彼へは紀念の品々残りなく、傳來の一刀を用意して、金左衛門の退出を大手御門のお濠際に待ち受けた、忘れもせぬ、それが慶長十八年の三月十日、櫻の花咲き亂るゝ土手下に、潔く名乗りかけ、年來の遺恨、この一刀を受けて見と大音に迫り申す、彼方はこれに驚いて、辯解がましよう一言二言云ひながら、刀すらりと引き抜く間も無く、打ちおろした刃の冴えに、金左衛門は肩胛を切り下げられ、一支へもなく寂滅し

た、おぼろに照る月、血に塗れた骸を射てその上に花の散る、彼時の心快さは、五十年來二度と覺えぬ、されど私の遺恨に由つて、君の重役を切り殺した罪過、免れんに道なく、そのまゝ伊勢國を退轉、君の御恩も、世の義理も、顧みるに違無く、當國へ馳せ下つて、老公御袖の頭に絶つた、惣左衛門はその時八歳、老黨家人數多き中、只一人忠義を思ひて、此國まで供し参つたのは、皆が記憶せ、今も家の大黒柱と、一家中に賞めらるゝ利平老爺ぢや」

【五】

惣左衛門は云ひかけて、懷舊の情に堪へぬが如く慨然たり。

「老公とは少しばかり縁もあれど、申さば他人同様ぢや、それも名譽の武功ども帯んで参らば、御目掛けさする餘裕もあれど、同役衆を切り殺して、故郷を逐天した不忠漢、御門前より逐ひ立てらるゝも是非あるまじき境涯を、殊の外憐ませて、御家人と云ふにもあらず、客分同様のお取り扱ひ、この河原町に屋敷を下され、二百五十石の御宛ひ、朝夕不自由なく暮らしあるを、尙足らぬほどに思召し、八年以前奥方お側近う仕へあつた、それのお多具を使はされ

た、御恩のほど語るとも盡されぬ、すれば佐太郎は老公御授けと云うても憚らぬ、家命の親、殊には佐太郎此方の親、假へ天地覆るゝとも、この大恩滅する時ない、惣左衛門忘るるな、別しては佐太郎、老公御情を忘れてならぬ、きつと骨に彫みてあれ」

佐太郎はつくづく聞き終りて、

「先刻よりお物語皆承はり、今さらの様君父御情の厚きに感じてござります、取り分て利平の忠義、まだ八歳の幼き身が、伊勢國より遙々参つたは、正しう爺の助けとも心得まするで、恐れながら一期お願ひ、彼の忠義漢、私に屬させ下さりませ」

「利平は家の實、身を以て免れ参つたれば、傳來の重器何も添はぬ、なれど只一口の五郎正宗、これに御先祖御靈魂罩もありある、次には利平、この二品を譲り傳へる」

「辱き御意、正宗の寶刀曇りなきやう、利平の忠義を神と崇めて、一圖御奉公を盡すてござります」と惣左衛門は潔かりき。

「諾し、さらば……」

六右衛門は床の間の刀架にかけありし白鞘の一刀を取りて、

「正宗ぢや、長く子孫に傳へ」

「有難く頂戴、魂と致しまする」

「おゝ」と六右衛門は機嫌好く「佐太郎には取らすものない、何とせう」

「私に要りませぬ、私はお父様御勇武の御氣象を傳へまする」

「乃公の氣象を……」

「家の實、此の外にござりませぬ」

「ほゝ」と溢るゝばかりに笑みて「所望とあれば遣る、然し乃公の氣象は玉でない、手では取れぬ」

「心で取りまする、魂で相續致しまする」

「健氣な奴、さらば取つて見、ちと重いぞ」

からりと笑ふ聲、諏訪明神の森の松風に和して高し。

第二章 大人らしき子供

「一」

玄庵は江戸に出でき、佐太郎が文三郎と名を改めたるは、彼が八丁堀に町醫師を開業したる

後なりき。

當時戦國の後を享けて、江戸の市にも醫師の數少かりし爲め、玄庵の玄關は相應に繁昌しぬ、殊に彼が儒學を根柢として、誠意誠心事に從へる結果は、藥の力以外に患者の苦惱を助くること少からざりき、藥湯の力には限りあれど、誠の力には涯りなくて、如何な難病も玄庵の敷居を跨ぐものは、大體本復の悦びを見るに極まれるが如く云ひ囉し、遠きは王子品川葛飾あたりより來る者ありて、生活も困難ならざりき、二百五十石の身上にて、會津の家老に客分となりし時より、其の實收は饒なりき、同時に文三郎の教育も思ふまゝに行はれき。會津に在りたる時、文三郎は早學問の階梯を得てありき、父の口より授けらるゝ孝經大學は、皆其文章を誦記したりき、江戸は會津の田舎と異りて、梅櫻咲き匂ひ、芝居見世物數多く、從ひて近所に同じ年輩の子供連多くありしが、文三郎は町人の兒を友に持つを好まざりき、朝起きてお父様お母様に御挨拶申し上げ、朝の御飯を戴きたる後は、一圖に學問讀書したりき、後庭の廣場へ出て弓引き、木刀撲つを務めたりき、玄庵が強て命令くるにはあらで、彼は自然にこの熱き性情を持てるなりき。

『山鹿の子息はちとも外で遊ばぬのう、家のみ引き込んで、青表紙と首引きしてゐる、ちと病

身であるまいかのう』

近所の人々に、斯う異み云はるゝほど、文三郎は内氣なりき。

近所合壁に病身兒と輕蔑まれし彼は、江戸へ出て、まだ二三年ならぬに、四書五經七書詩文の大方を讀み覺えき、まこと彼の精力には父の玄庵も膽を潰すことあり、時に朝餐を終りて机に對ひたるまゝ、日の暮るゝまで讀書に耽ること少からず、夕餉を終りて讀書にかゝりては、翌の朝まで目も放たぬこと多くありき、さすがの玄庵も、その爲に身心を勞することあるまじきかを氣遣ひ、

『讀書も可い加減に致し置け、その爲め病氣など引き起しては、折角押し上げた車を、又麓まで戻さねば相成らぬ』と氣を注ぐるに至りたりき。

されど文三郎はその爲めに讀書を廢することをせず、父の前にびたりと坐りて、

『お父様お脈を御覽下さりませ、お父様顔の色をお検め下さりませ、身體に障るほど出精致すには此上餘ほど勉めねば爲りませぬ』

彼はその心鐵の如く堅きのみならず、その體軀亦鐵の如く強かりき。

寛永七年の春淺く、梅の唇固く鎖されて、鶯の小々鳴く聲、まだ十分の調ひを見ぬ折な

りき、文三郎は後裏より入りて前裁の枝折戸を押し開くる、とたんに耳の根を打ちたるは、懐しく思ふ利平の聲なりき。

『奥様、心配はこれ、旦那御容體、普通でござりませぬ』
利平が旦那と云ふは、兄の惣左衛門を指すなりき、文三郎は驚いて耳を澄ます。

【三】

『爾うであつたかのう』と次にはお多具が吐息と共に云ふ聲聞こえ『その様に悪いかのう』

『何を申すも急變、昨日お知らせ申し上げる暇も無いでござりました』

『何の様に悪いかのう』

『お癪氣と覺えます、一時はお身内も冷切り、お顔の色も青ざめさせて、今にも絆切れ給ふかと、老の胸を痛めたてござりましたが、奥様御介抱御同役衆お力添へ、何や彼やお蔭を以て、今朝は餘程の御快氣、すやくと休ませらるゝ、その隙に一走り、此事お知らせ申します』と

利平は吐息の中に云ふ。

『さほどの大病醫師を家業になさせる、當家へは知らさいて、御同役御厄介に相成るは、心得違ひともないか』とお多具は叱るやうに云ひつゝ、『旦那様聞かせられれば、お叱言もあらせう、

年齢にも似ず、そなた氣付き無かつたのう』

『餘りの急變、老人の心惑ひ、一日を後れたは恐れ多い事、御當家様お叱りは覺悟の前、然しお命は取り止め、只今の處まづ大丈夫と極りござります、恐れながら旦那様へお執次の儀願ひ上げます』

『申し上げずには在られぬ、ちやが只今はお客來。何かとお物語もあらせられ、其處へ惣左衛門大病と御披露するも、場所柄を存せぬ仕方、暫く休息、溢茶ども參れ、やがて何かとお指圖もあらせられう』

お多具は云ひ捨て、奥へ入る、廣敷の對立に、冷たけれど東風は吹きて、釜の湯に松風の音颯々たり、文三郎は木刀投げ捨て、座敷の縁より廊下傳ひ、利平の腰掛け居れる廣敷へ立ち出てぬ。

『爺、来たか喃』

『お、佐太郎様、暫く見ぬ間に、甚う御成人、お九歳にはお身體も大きう、立派にお成りなされました』と利平は懐しげに『承る處、御學問御出精、早七書まで讀ませられた氣ござります』

「兄様、御大病とある、什麼様ぢや」

「さ、其事、只今奥様へ言上、心配の胸を抱き居るでござります、最も今朝御容體は、さほど御危篤とも見えませぬが、昨日お退出から夜へ掛けては、今にも大事あらせられうかと、幾度立ち騒いだか分りませぬ」

「捨て置かれぬ、今からお見舞ひ申し上げう」

と文三郎は性急なり。

「佐太郎様お見舞ひ、紫雪龍膽よりも效驗あらうと存じ、利平御同道、早速お供申します、なれど旦那様お許可ござりませいでば、自ま、お越しも協はせられまい、暫時待たせござりませ、奥様御挨拶あらせられる筈ござります」

「左様にはして居かれぬ、兄上御一大事、私がお許可を受けて参る」

文三郎は大人の如き態度、悠然と立ち上る、其處へ身軽く出て来りしは立庵なり。

【三】

「お父様、好い處へお越し、只今利平より傳聞、兄上御大病とござりまするで、これよりお見舞ひに参らうと心得まする、お許可ござりませうか」

文三郎はきつとしたる聲なりき、坐り直りて兩手を支く、

「惣左衛門病氣と云ふ、意外の事」と立庵は立ちたるま、
「然し文三郎は醫道を心得ぬ、駆け付け参るとも甲斐はあるまい」

「醫道は心得ござりませぬも、兄上御大患とあるを、聞き捨てするは道にてもござりませぬと……」

「いや、待て」と立庵は抑へるやうに「お身には大切用があるで、見舞には乃公が行く」

「お父様はお父様、私は私、義理に厚薄ござりませぬ、肉身の情に深淺ござりませぬ、さらば御同道——」

「それが爲らぬ」と例の底光りする目に表の方見遣りて「彼へ塚田老人來せられある」

「塚田様とは」と文三郎は不審氣に「奎助様ござりまするか」

「いかに、稲葉丹後守殿御内塚田奎助殿存じあらう、いつか参られ、殊の外酩酊、仕舞して見ると、折敷二三枚を踏み破られた——彼の仁ぢや」

「塚田様來らせられうと、兄上御病氣を捨て置きはなりませぬ」

「勿論の事、惣左衛門は乃公が尋ねる、お身は塚田殿同道、林大學頭屋敷へ参るぢや」

「は、私……」と文三郎は我身を信じ難ぬる如く驚きぬ。

「お身にはまだ委細を語らざつた、不審あらう、實は喃」と玄庵は云ひかけて、對立の邊近く座を占めぬ、文三郎は黒腫勝の目を走らせて、子供らしき風もなき双膝を進ます。「塚田殿と乃公とは詩の友ちや、去年の春から親しう交はる」

「其儀承知ござります。」

「處が折々の集會の席に、お身の噂ども爲させられ、幼少に似ず學問出精、且は武藝にも心掛け、腕白盛りを居間にのみ閉ぢ籠りて、懸命に修業すること、誰に聞かせらるゝともなく聞かせ、將來に見込ある、大切に養育なさせと、眞を籠めてお心添下された、然るに彼の仁、丹後守様御前に於て、當年九歳の子供、四書、五經、七書まで讀み覚え、詩文など嗜む事、不圖お噂申した氣喃」

「恐れ入つたことござります。」

「乃公も爾うは存じたが、塚田殿お身を最負、丹後守様御前に於て、御披露申し上げた上是非に及ばぬ、數多き大名衆御内でも、丹後守様は學問御好ませ、月の中五六日は林道春、弟永喜をれれを召させられて、經書講義を聞かせられる、まこと篤學の御方ちや、その丹後守様、

お身の事を聞かせられ、世にも珍らしき童、町醫者の家に朽ちさするは可惜者ちや、然るべき學問の師につけ、勉強修業の功を積まば、やがてお上の御用に立つ棟梁の材とならうと、二三日前道春候の序を以て、お身を門人の數に加へ、熱心指導致すやう、くれぐれ御頼みあらせられたと申すことちや」

文三郎の眉の間は、朝日に梅の匂ふが如く、晴々と且つ美はしき光満ちぬ、玄庵は隙あるごと、文三郎を膝下近く招きて、絶えず句讀を授くれど、玄庵は流行る、世の交際は忙し、思ふまゝ、教授する暇もなければ、十中の七八まで文三郎は自個の發明、將た自己單獨の學問なりき、されど良き師を求むるほど深き餘裕あるにはあらず、殊に町人の子弟を集めて、習字讀書を授くる者に、これと頼むべき師も無ければ、彼は只當時の學問界に、林大學頭兄弟あるを聞きて、とても見ることも協ふまじき深山の花、縦ひ目には見る時ありとも、高が町醫師の倅、玄庵の端へも行かれまじく、いつまでも高嶺の松、仰いでその亭々たる氣高さを見て終らんと思ひたるが、圖りなくも望み協ひて、誰あらう、天下御老中の員にも列りたまふ稻葉丹後守殿御口添、大學頭へ入門の儀を御頼み下されしと云へば、格別の關係、町醫師の倅とて疎略には扱ふまじ、すれば此が登龍の門、出世の道に分け入るべき第一歩と、右の耳には兄の大患を聞き

たる悲しみ、左の耳にはこの嬉しきを聞きたる歡び、文三郎は異しきまでに胸の躁ぐを感じたりき。

【四】

玄庵は又語を繼ぐ、對立の彼方には、利平茫然と腰掛けて、この物語を聞き居たり。

「丹後守様お口添は、月日の如く光り輝いて、お身の噂をつくく聞き、幼少の身を以て學問出精致す事奇特至極、門人の數に加へ學問傳授致し遣はすござりませうと、早速承引致しくれた氣、空助意外の歡び、何はさて置き、御息出世の緒口、一刻も早く道春屋敷へ同道、師弟の約束致せたいと申し、態々迎ひに参りくれた、志の芳しさ、庭面に薰る梅も物かは、早々用意、丹後守様お袖に絶り、誠學問の道につくべき首途をせねばならぬ、母上にも申し上げ、早速衣服を改むるぢや」

「心得てござります、されど兄上……」

「惣左衛門見舞には、我等参る、詰らぬ義理に心牽かれ、空助志を反古にするは、人間の道にあるまじき事、そればかりか一生涯出世の道を塞がる、疾く参れ」

廣敷の上り口に控へ居たる利平は、玄庵のこの詞を聞き「詰らぬ義理と仰せ、兄弟御間の眞

情を詰まらぬ義理と仰せ、旦那様御心中、さて……」と繰返し呟きたれど、玄庵にも文三郎もその聲は聞こえざりき。

「疾く用意、塚田姓お待たせぢや」

文三郎が心得て再び座を起たんとする時、

「ちよと待たせ、私は故障申すぞ」

云ふ聲襖の陰に聞こえて、曇りたる面を出すはお多具なり。

「故障と云うた、理聞かう」と玄庵は目を睨りぬ。

「文三郎出世よりも、惣左衛門殿一命が大切、大學頭様御入門、今日に限ることござりませぬ、塚田様へは私お断り申しますで、それは後日、利平も参り居ります、取り敢ず文三郎を見舞ひにお遣はしなされませ、私のお願ひでござります」とお多具は聲を絞りに云ふ、惣左衛門は爲さぬ間、文三郎は血を分けたる實子、それと此との義理に挿まりて、彼女は日ごと泣くなりき。

「何を申すかと思へば、愚にも付かぬ口上、人の親切は日て無いぞ、何日も變らず同じ場所を照らしあるとは限らぬ、惣左衛門大病とはあるも内輪の事、塚田殿は他人、殊には稻葉丹後守

様御口上も添うてある、文三郎が出世の首途、不吉ぢや、泣くな」

「いえ」とお多具は身を揺ぶりて「兄弟義理を缺いてまで、文三郎に出世させたいござりませぬ」

「要らざる遠慮、文三郎参るとも惣左衛門大病が快くはならぬ、萬一氣澄み致さねば、大學頭屋敷より歸つた後、下谷屋敷へ参るとも義理は立つ、早や用意、表座敷に塚田姓お待ち下さる」

と玄庵は敦圀き、「早く衣服を出し遣らぬか」

「文三郎に不義理の名は取らせたいござりませぬ、こればかりは思ひ止まりなさせませ」

「まだ云ふか、さて」惣物、惣左衛門見舞ひには、乃公が行くと申すてないか」

「あなたはあなた、私には私の義理ござります、町野御前後日御聞かせ、文三郎の出世を前に、惣左衛門大病を後にしたなど、思召しござりましては、私國許へ面目もござりませぬで……」と後は續かず、さめくと泣き入りたり。

【五】

「恰で狂氣同様、斯様な者に關ひはない、武士は義理を命とする、早や立て」と玄庵は聲を厲

まし「長州公御不審あらば、我等出て御返答、そなたには迷惑かけぬ、國許の奴原など、念に置くことかは、左様なことに氣を揉むより、文三郎爲めを思ひ、彼是とお世話下さる塚田殿に茶でも進らせ」

「お父様の仰せ聞きはならぬ」とお多具は文三郎をきつと見て「私が命令くる、この母が命令くるぞ」

「言語道斷、左様な教訓致すものが、世の中に二人とあるか、母の詞は聞くに及ばぬ、乃公の命令ぢや、早や立て」

「いえ爲らぬぞ、強ても爲らぬぞ」とお多具は袖を控へたり。

「立てと云へば立たぬか、お身も武士の子でないか、將來學問出精して、天下に名を成さう望み持つてないか、高が婦人の云ふことに牽かるゝな、男の魂に貴いは、斷の一字ぢや、未練を斷て、事情を斷て、ふつゝりと情を斷て、自分の思ふ處へ進め」

「爲りませぬぞ」とお多具は沈着き「義理のある兄上を見捨て、お母様を世の笑ひ者にしたもるなよ」

「母などが什麼とならうと、お身の將來に關係は無い、一たんの義理に縛まれて、一生の幸福

を捨つるは、心ある者のせぬ事ぢや、孝道の要は、父母の名を揚ぐるにある、義理は大きい方より執る、これが工夫ぢや」と玄庵は文三郎の態度に目も放たず「左右何れとも、此上はお身の選む所に任する」

お多具は惣左衛門を思ふこと深かりき、婦人の常、繼母としての義理の上より、世間に對する毀貶を恐るゝこと深かりき、惣左衛門大病とあるを聞きながら、文三郎を見舞ひにだも遣らず、塚田奎助に託して、大學頭に入門させるが、いかにしても義理に缺くことと思ひ煩ふなりき、假令文三郎の出世は後、とも、世間の義理を全うしたる上、徐に修業の道を開くとも、遅きことあるまじと思ふなりき。

「私の云ふことを聞いてたもれ、お父様は男、私は女、女は狭いものぢやてのう」

まことに文三郎は廣き父の心と、狭き母の思ひとに挟まれて、左右何れかに決せねばなるまじき運命に際したりき、小さき彼は大人の如く手を携きて考へぬ、對立の牡丹の繪に、障子漏る朝日の光照り渡りて、一室は水を打ちたる如くなりき、暫くして、

「お母さま」と文三郎は顔を擡げぬ。

「お、思案ついたかの」

「お父様」

「什麼とぢや、これほどの分別付かずば、學問しても用は爲さぬぞ」

「私、思ひ決しござります」

お多具はずつと膝を進む、我子の器をこの一語に見極めんとする、玄庵の目はきらりと閃く。

「お母さまには濟みませぬ、兄上への義理と、塚田様御芳志と、何れを疎略になりませぬが、川と海との違ひ、星と月との相違、私は塚田様お志に従きまする」

「爲たり〜」と玄庵は膝を拍つ。

「さらば兄上義理を捨て、喃」

「捨てるは拾ふてござります、林様入門のこと、お土産にしてお見舞ひ申せば、お兄様さとお力付きござります」

盤上に轉ぶ玉の如く、圓く光ある答へなりき、大人らしき子供の智慧は、二人の親に二の筋をつぐべき裕餘だに與へぬまで輝きありき。

第三章 林家入門

『一』

繼子の義理に掛りて泣くお多具の涙は、遂に甲斐無く振り捨てられて、文三郎は身装凛々しく、塚田奎助同道、林大學頭(道春)宿所に赴きぬ、當時の道春は學問の棟梁にして、天下將軍家の師範、勢力をさへ大名を凌ぐ程なれば、町醫師の倅たる文三郎が、假し稻葉殿お聲掛りありし爲めとは云へ、直々目通りを許さるゝは、一代の面目將た一代の光榮なりき。

文三郎が幼少にて學問に志したる事、深く道春の心をや動かしかん、待つ間程無く對面の座間へ通されき、案内は年若き門弟なりき、南向の座敷、上段の間に道服着けたる道春泰然と坐りて、炯々と人を射る眼に此方を見る、年齢は五十に近からん、眉太く、鼻筋通りて、一文字に結びたる口、細く流るゝが如き吽、宛然に人の心を引き付ける力あり、この間に東向きて座を占めたるが、舍弟の永喜(東舟と號す)らし、同じ様に道服着けて、同じやうに光る眼色を文三郎の上に注ぐ。

奎助は稽きながら、三之間の敷居際まで進み出てぬ、文三郎は童子心に臆したる様もなく、

その後に従ひぬ、永喜まづ口を開きて、

「塚田姓、大儀ござつた、丹後守殿お噂の子供、同道の夫でござるか」と腮の頭にしやくる如く云ふ。

「中々の事、山鹿玄庵倅文三郎、當年九歳、四書五經誦致す氣ござります」と奎助は我子にても賞むる如き口氣なりき。

「うむ」と永喜は頷き、「文三郎お身か」

文三郎は子供にして大人らしき顔を擡げぬ、二つの瞳孔を持てる彼の眼は、鳩の如く優しくして且つ星の如く鮮かなりき。

「眼色尋常ならず見ゆる、稀代の子供ぢや」と永喜は舌を巻く如に云ひつゝ、「お詞給はりませう」

道春は莞爾と笑みて、

「山鹿文三郎、幼少ながら學問の心掛け厚き由、稻葉殿お詞に由つて承知、よく參つた、書物讀むか」と繼々に問ひ掛けぬ。

「習うたいけを讀みまする」

判然と、且つ句切り善き返答、初めて長者の前に出づる時は、自然羞恥を含むが例なれど、文三郎は毫悪びれたる態度無かりき。

「誰に習うた」

「お父様、句讀の師でござります」

「論語讀むか」

「讀みまする」

「さらば」と道春は側らの書棚に在りしを取り上げ「これを読み見て見」

一冊の論語を永喜に渡す、永喜は受けて、文三郎の前に出しき、其頃奇しき唐本なり。

「無點ぢや、讀むか」

「讀んで見ます」と家に覆る如く沈着きて、恭く押戴く。

「無點は何とござりませうか」と奎助は却つて危みて「何の章を讀みまするか喃」

「八佾第三、その邊り可からうぞ」と永喜は文三郎に目も放たず見てありき。

「八佾第三の章を讀んで見るぢや、此方善く爲るか」

「御聞かせござりませ、誤謬あらば御心付なさせませ」

文三郎は何の場合にも大人らしき子供なりき、徐に巻を押し開きて、憶したる様も無く讀み出す。

道春も耳を傾けき、永喜も耳を傾けき、奎助はその身の伴ひ來りたるが、萬一仕損じ、讀み損ずる事あるまじきかを懸念、腋の下冷汗を瀧と流して、瞬きもせず文三郎を見詰めたり、春の日は長く暮れんとして暮れず、夕陽に戦ぐ寒竹の一枝二枝、娑婆たる影を窓に描きて、雀の鳴く音物靜かに、文三郎が讀書の聲、座の中を壓し來る。

【二】

「もう可いさ」と道春は聲を掛けぬ。

文三郎は「孔子謂季子」の始めより「子曰居上不寬、爲禮不敬、臨喪不哀、吾何以觀之哉」の終りまで、一點の淀みもなく讀誦しき、その聲雛鶴の朝日に鳴くが如く、やがて九阜に響くべき酌見えき。

「此歳で此ほどに讀み得るは奇特ぢや、殊に不思議ぢや、感服の外無い」と永喜の眼には驚嘆の色動くを見たりき。

奎助は如何にと危みたる獨木橋を、無事に渡り得たる嬉しさにも比ぶべき歡びを面に見せ

て、思はずも吐息しぬ、文三郎は読みさしたる巻を掩ひて、膝の上に両手支きたるのみ、や、得意氣に控へたり、白羽二重の如き美しく清き頬に、一點の紅潮、梅の蕾の今綻びんとする風情なり。

「ちやが田舎學問の影がさす、點に悪い處あるは夫ちや、研かば珠玉となるを、可惜者ちや」と永喜は獨語つ様に云ふ、文三郎の慢氣を挫く心仄見えぬ。

「永喜申しの條、我等意を得つる、最も珠玉の質研かば自然に光り見やうて、心長く修業爲いと道春も感に堪へたる聲。

奎助は危き獨木橋を渡り終りて、急に美しき花の香に包まれたる心地なりき。

「お賞めに預かり、當人面目、奎助も満足、此儀承り及ば、親玄庵もさぞ恭悦仕るござりませう、此上ながら好きに御指南、將來は兩先生片腕とも爲ります様お力添へを願ひ上げるござります」

「時折參れ、書物は無點物を讀むに限る、心付の廉々指南、點の悪き處など改め得さする」と永喜最も乘氣なりき。

「御懇御意、高が町醫者倅へ、直々御詞下さるさへあるに、御門人中へさし加へ給はらうとあ

る、願うてもあるまじき幸福、得と御禮申し上げぬか」

「有難うござります」と文三郎は疊に額を擦り付けぬ。

「嫩葉で傷むことあつては爲らぬ、大切に育て遣はせ」

道春も亦文三郎の才を頼もしく思ふ様、引き續き懇に諭し勵まし云ひ聞けて、隨意退出差し支へ無き旨を告げぬ、實に文三郎は身に餘る光榮なり、案内者として此の大人らしき子供を伴ひたる奎助は、螢火の陰に光る草葉の上の露なりき。

「何とも有難き仕合せ、何とも辱き御意、この御恩忘れは致さぬ」

執次の門人に案内せられて、長き廊下を退る間、奎助は口の中に此の詞を絶たざりき、輕くヒヨコ〜と歩く足は、幾度敷居に躓きたるかも知れず、餘りの嬉しさに眼も眩みて、踏む足はしどろもどろなりしが、小き文三郎は悠然と身を構へて、一步ごとに沈着きを見する歩み振りなりき、奎助が前に立ちて、足並も亂れ勝に見ゆる背後より、文三郎は小山の搖ぐ如く重き態度、且つ自然禮儀に協ひたる舉止、奎助が敷居に躓きて倒れんとするを、背後より抱き止めて、

「お危うござります」と氣を注げぬ。

されど奎助は耳に止めず、

『何とも有難き仕合せ、何とも辱なき御意、この御恩忘れは致さぬ』

案内に立ちたる門人は思はずも失笑しぬ、夕暮近き庭の中に、鶯の小鳴く聲微に聞こゆ。

『三』

『これさ、文三』と奎助は林家の門を出づると共に見返り『何とも有難い仕合せでは無いかさ、大學頭様直々の御誕、幼少の學問、奇特に存ずるとさ、時折参れ、心付きの廉々、指南し遣はさうとさ、御前お口添あつたにしても、上も無い首尾、忘れは爲らぬさ』

『叔父様、同じ言を繰返しての御意、御門人衆お笑ひの様見えてござります』

『嬉しさが溢るゝわざ、そなた無點の書物を読みも無く讀まれた時、此の胸がすつと透いた、其又前の心配がさ』

『御苦勞を掛けて澄みませぬ』

『御前もさぞお悦び、そなた丹後守様存じあるまい』

『一向心得ませぬ』

『追てお目通り協ふ時節もあらう、今日の御恩忘れる喃』

『命のある限り忘れませぬ』

『玄庵老、雀躍も致さうぞ、此もそなた修業の光ちや』と奎助は云ひかけ『餘りの嬉しさに、とつと失念、惣左衛門病氣とあつた氣、覚えあるか』

『忘れては在りませぬ』

『覚えて居たか、はゝゝ』と自らを嘲るやうに

『乃公よりはちと利巧ちや』

『兄様御病氣、お見舞ひ申さねばなりませぬ』

『此の足で喃』

『途中でお別れ申さねばなりませぬ』

『何がさ、それには及ばぬわさ、惣左衛門殿我等も存じ、序ながらお尋ね申す、土産には何を進ぜう』と奎助は歩きながら考へぬ『好物があらせられう喃、汝存じか』

『お詞も自由ならぬ御大病と申します、御好物持参致しても、お歡びあるまいと存じまするで、文三郎より参らせの土産は、今日大學頭様御前の首尾お物語り申し上げる、此一條の他にござりませぬ』

「成る程な、汝氣付き、老人の智慧に及ばぬこと多いわさ、如何やう考へても、乃公よりはちと利巧ぢや」

「一片の赤誠、此に越した名薬はござりませぬ」

「佳い事を申す、赤誠の發する處、金石も亦徹すと云ふ、乃公よりは餘程利巧ぢや、玄庵殿もお越しあらう」

「父も参り居るでござります」

「すると、八丁堀宅へ参るに及ばず、乃公も足の勞が省けるさ」と天にきら／＼美しく照る日を視上げて「今日ほど愉快に感じた事無い、これも皆な汝の蔭さ」

二人は語りながら歩む、初咲の梅が香、生垣の間より聞こえて、奎助を前に、文三郎を後に、山鹿惣左衛門の屋敷、下谷御徒士町まで、何日の間に歩み來りしとも知らざりき。

「早や彼ぢや、彼方に赤松の大きいが見ゆる、惣左衛門殿お屋敷ぢや」

「主人は大病に惱みござりましても、松の色は變り無く榮えござります」

「實にさ」と奎助は門前に立ち止まりて「見やれお庭に梅も咲いてある」

「やがて兄の心開く時もござります」

「其機の一日も早く到來するを待つ、さ」と一步を譲りて「まづ入りやれ」

「いや、主公様から…」

「さらば怨せさ」と奎助はずつと入りて「醫者も参り在る氣、見舞ひの人も多く見ゆる、其う悪いてあるまいか喃」

文三郎は心配氣に従ひき。

【四】

實に惣左衛門の病氣は容易ならざりき。玄庵は町醫ながら名譽の者、外に主人町野長門守より使はされたる典醫半井ト元は、脈を一診したるのみにて、生死を明かにするまで云ひ囃されたる古今の大醫、他に主治醫二人まで詰め切りて、診察投薬有らん限りの力を盡せど、さて其病名を下すものさへ無くて、一同御心配の眉を顰むるのみ、玄庵は疝卒中の類ならんと云ひ、ト元は内臓に痛み生きて、熱氣直に心を衝きたるなりと云ふ、此の争ひ尙決する處無き時、奎助と文三郎とは、靜かに病室の襖を開きぬ。

次の間には惣左衛門と同じく、百人組の與力を勤むる神崎次郎八を始めとし、近所合壁の者、皆な思ひ掛けぬ當家の大事に詰切りて、時々刻々危険に傾き行く主人の病氣を氣遣ひ居たりき。

『塚田姓か』と玄庵は元氣好く『御苦勞ござつた、而て御前の首尾は』

日本一の御芽出度、流石の大學殿も、文三郎殿御發明には舌を巻いて、幼少にて學問致すと、此上もなく奇特、向後直々門人たるべしとお詞ござつた、その歡びに引きかへ、惣左衛門殿御大患と申す、御心配の程推察申す』

『いやさ、咲くも花、枯るゝも花、人間の力で致し様もないは此の運命ぢや』と玄庵は深く諦めたる様に『文三郎、兄上にお藥參らせ』

病室の片隅に涼爐置きて、藥を煎じ居たる妻のお谷は、女々しく片袖を顔に當て、挨拶も爲し得ず崩折れ居たりき、文三郎はズツと入りて、

『兄上、兄上』と、搔卷の襟の間に、その青白き顔を仰向けて、乾きたる唇に、心の苦痛を漾へたる惣左衛門を視入りつ、『文三郎でござります、お心を確かに持たせられ』

惣左衛門は夢現の境を辨へざりき、くわツと眼は開きたれど、其處に懐しき我弟の來り居れるか無きかをさへ覺らざりき。

『兄上、兄上』と文三郎は續けさまに呼び『好い土産參らせませする、御聞かせござりませ、文三郎事御縁あつて、林大學頭様へ入門の儀協ひござりまする』

平生より弟を思ふこと、海の深きよりも尙深き惣左衛門は、熱氣に閉ぢられたる耳の底に此聲僅かに響きたりと覺しく、何物かを覓むる如く、鈍き眼に彼方此方を見廻したるが、やがて文三郎をちツと見て、何事か云ひたげに唇を動かしたれど、聲は元より出でず、一日一夜の中に削る如く瘦せ見えたる頬の上に、淋しき笑の痕を彫みて、弟の榮を領とする如く、暫くして又目を閉ぢき。

『兄上、お解りござりましたか、文三郎の參らせたる土産、御受けなされござりましたか、兄上、兄上』と絶り付く如く呼びたれど、惣左衛門は早や枯木の如くなりき、再び眼を開くこともなく、又唇を動かす事もなかりき、『も、も』と咽びながら『お詞はござりませぬ』

『惣左衛門は大病ぢや』と玄庵は手を又みたるま、『されど今その面に笑を見せた、私が呼んでも、お谷が呼んでも、些も應ずる氣色無かつた惣左衛門、汝の聲に眼を開いて、淋しさうに笑を見せた、よく懐しう思ふと見ゆる、嫁女、歡んで遣はせ喃、文三郎の呼ぶ聲に、惣左衛門笑を見せたわ喃』

『このお手から』とお谷は涙の顔を向けぬ。

『其のお手からお藥遣はされたりや、きと納まるでござりませう、文三郎様お手數を願ひます』

る

「姉上にまだ御挨拶致しませぬ」と文三郎は改まりて「意外御大病、御心痛あらせませう」

「昨夕より頻つてお薬参らせると、一向に納まりませぬ、日頃から御舎弟思ひ、朝に夕に、文三郎様お噂のみ爲されまゝ、そのお方より参らせあらば、格別の奇瑞あらせられるかも知れませぬ」とお谷は薬茶碗に香り好きを浪々注ぎて、文三郎の前にさし置きぬ。

「畏りござります」と文三郎は手に取りて、片手に搔卷の襟をはね「兄上、お薬湯を参らせ

まする」

されど惣左衛門は答へなかりき。

「兄上、文三郎でござりまする、御目を開かせられ、お薬湯を参らせるとござりまする」

文三郎の詞には、懐しき響き籠りぬ、懐しく且つ真心ある床しき調子溢れて聞こえぬ、枯木の如き惣左衛門にも誠の情は春風より軟かく障りて、病に鎖されし胸の底へ、温き思ひしみ渡りけん、細々と目を開きて、

「お、」と一言。

「お薬湯を参らせまゝ、召し喫りませ」

惣左衛門の口の傍へ、薬茶碗はさし付けられぬ、薬の香り紛々として鼻を衝くと共に、惣左衛門の唇は弟が呉れる誠の露を享けるが如く開かれき。

「お薬を召させませ、お薬召して一口も早う御全快なさせられませ」

不思議や文三郎の注ぎ入る、薬湯、乾きたる土の雨を吸ふが如くに嘸み下しぬ。

「あア」とお谷は嬉し涙にくれ「お薬が納まりました、嬉しやお薬が納まりました」

「先刻までは一雫も受け付け難ねたが、今は悉く納まつた、半井先生御一覽あらせつらう」

「兄弟相思ふ情、現はれたものと見ゆる喃」とト元も不審の様。

「此がさ、これが其誠の動作と申すでござります」と全助は得意なりき。

「真成の」とト元も感に堪へて「拙老もこの不思議初めて見申した」

お谷も亦此奇異の現象に驚きて、

「文三郎様御呼ばせの時、お、とお答へなされました、お胸の悶へが下りたと見えまする」

「彼の聲、異様に聞いた、文三郎参らずとも、我等見舞へば同事と云ひ募つたを、今になつて懺悔する、病人は薬より心切が利く様ぢや、半井先生お方劑も受け付けいでば験が見えぬ」と玄庵は深く考へて「こりや好い學問致いたぞ」

「夫がさ、誠の力と云ふちやわさ」と奎助は力を得たる様に「百人の頭数より、一人の誠に重味があるさ、文三郎殿幼少で發明、大學頭様舌を卷かする智慧あるも、つまり誠さ、誠の力は火も水にする」

「文三郎様、御介抱を願ひまする、私共夜の目も寝いで、命懸の看護するより、文三郎様只一言のお詞、苦痛を助けさせるてござります」とお谷は頼みの綱を得たる如き聲なりき。

【五】

文三郎は當日より兄の枕許に付き切りて、一生懸命に介抱しぬ、薬の驗は見えずとも、一心の誠を傾けて、兄の本復を見んと心掛けぬ、玄庵は原より、同役にして親友たる神崎次郎八は日ごとに來りて、様々に手を盡したれど、遂に全快には至らざりき。

お谷の貞實、利平の忠義、祈らぬ神も無く、頼まぬ佛も無く、茶斷ち鹽斷ち、火の物斷ちして、惣左衛門の病氣本復を願ひたるが、庭の梅が香日に淡れ、門前の赤松翠落ち、春は櫻の枝に轉りて、花美しく開く頃となりたれど、惣左衛門の口は開かざりき、身體は幸ひに健全に復し行けど、舌頭纏れて言ふこと自由ならざりき。

縦し此ま、快癒せんとも、啞子に均しき者、お上お役は勤まるまじ、町野左近の配慮、同役

中の協議、夫婦の間に一子なければ、文三郎殿を準養子にして、二百五十俵の家を繼がせ、やがて家名を全うせば、惣左衛門殿も喜悅、玄庵老も満足、自他ともに幸福ならんとの議、家の内外に區々なりき。

第四章 跡目相續

【一】

文三郎を準養子にして、惣左衛門の家を繼がせんとの事は、第一にお谷同意なりき、第二に組頭たる町野左近同意なりき、第三に親友同僚同意なりき、病中の惣左衛門も、次郎八より此相談を享けたる時、窶れたる眼に笑を見せて、さも満足らしき點頭を與へたりき。

櫻の花も散り勝となりし春の末、玄庵の見舞ひに來るを待ち、次郎八お谷列座の上、此相談を云ひ掛ぬ、微々たる町醫者の株を繼がするよりは、小身ながら天下直參の家の相續者と定むる方、文三郎身に取りて如何に利益なるかも知れず、又いかに一家繁昌の基なるかも知れず、殊に文三郎の發明穎智を以てすれば、今こそ二百五十俵の御家人なれど、將來幾萬石の大名に出世するかも知れじ。

「此儀什麼とござらう喃」と次郎八は玄庵の返答なきをもどかしがりて、促すやうに斯く云ひぬ、されど玄庵は無言なりき。

「お父様、御承知あらせられござりませぬか、神崎様は申し上げるに及びませぬ、町野の御前、御同役の皆様、別しては病氣中の惣左衛門殿、満足の體ござります、お父様御納得あらば、すぐにお頭へ届け出て、表面御披露も致す筈、手順は皆な調うてござります」とお谷は次郎八の詞足らぬを補ひ云ふ、されど玄庵は尙無言なりき。

「山鹿殿、御返答ないは御承知か、改めて相談するに及ばず、勿論爾うあるべし事、我等念の入り過ぎあるを御笑はせか、假し夫にしても確としたお詞聞かぬ間、奥方も御安堵なるまい、應ならば應、萬事存じの上ならば存じの上、具に申し聞けござらしめ」

左右より迫り問ふを、玄庵は馬の耳に春風吹く程にも感ぜざりしが、やがて吃として

「文三郎進養子の事、玄庵は不承知ござる」と事も無げに云ひ切りき。

「え」とお谷は驚きて「お父様、お聞き入れござりませぬ喃」

「おいの」

「こりや意外、我等木に竹を接がうとは云はぬ、惣左衛門殿文三郎殿、何れも貴老御子息、惣

左衛門殿重病に由て退役、家名を御舍弟に譲らせうとある、準養子は天下の大法、誰が聞いても不祥は無い、然も親御お口から、この談合に非を打たる、事、如何にしても合點參らぬ、それとも相續爲り難ぬ仔細ござるか、惣左衛門殿身上に御不足ござるか、御返答の模様により、御親父とて座は立たせぬ、きり／＼仰せ、什麼とござる」

次郎八は堪へぬ氣象、茜染の羽織の袖巻き上げて、抜き上げた額際に汗しどろなり。

「仰せぢや」と玄庵はいよ／＼沈着き「杉も常盤木、松も常盤木、同じ翠の色は持つが、松の枝に杉は接がれぬ、文三郎は幼年ぢやが、その心は大人を凌ぐ、彼奴は見處あるて、此處の接木はさせ難ねる、平に御免ぢや」

「お詞とはござりまするが、當主病死、相續人の決定無い時、家名忽ち斷絶するは、改め申すまでござりませぬ」とお谷は岳父の心恨めしく、小袖の襟を合せながら「今にも惣左衛門息絶ゆれば、家名相續の者、お届け申さずは協ひませぬ」

「無い袖は振られぬ、無い者は届けられぬ、捨て置く分さ」

「さらばお父様、當家斷絶の悲みを餘所に見さするてござりまする喃」

「此も是非ない、一升鍋に一斗樽の蓋は爲きぬて、身に適はぬ儀と諦めるさ」と玄庵は氣にも

止めず「高が二百五十俵、取り潰しても惜うはござらぬ」

二二

「言語同断」と次郎八は惘れ果てたる眼を光らせ「怪しからぬお詞、我等二百五十俵が惜うて申さぬ、山鹿御家名を惜みて申す」

「町醫師を致しても、山鹿の苗字は續きござる、二百五十俵に放れても、山鹿の血は流れござると」玄庵は何を云ひても空吹く風なり。

「お父様、お父様」とお谷は岳父ながら餘りの詞に腹立ちて云ふ聲も激しかりき「當家は如何様相成りても、文三郎殿さへ善くば、それで好いとの思召しござりまする喃」

「破鍋には綴蓋が相應ぢや、二百五十俵には二百五十俵の養子あらうぞ」
「愈よ其意を得ぬ」と次郎八は玄庵の膝に支きたる手を引き握み引き寄せ、憎さげに翫す唇を引き裂きても心の恨み晴れまじく思ふ様「貴老お目に御當家が破鍋と見えてござる喃」

「まづ左様、兩刀挿せば千石以上、百姓すれば大地主、學問に身を委ぬれば、林大學頭を脚下に踏まへる身にならねばならぬ、それが能きずば藪醫者、愚夫愚婦の脈見るか、形ばかりの庵室に、浮世の外の月花見るか、人間の願望只これぢや」

「お、お、お」と次郎八は陰る様に叫びつゝ「さらば文三郎を何になさるゝ」

「さらば喃」と玄庵は笑を見せ「まづ乞丐か」

「や、乞丐……」

「で無くば學者か」

「や、學者……」

「夫にも爲らば愚老跡を繼がするか、山寺の和尚にするか」

「や和尚……斯程御器量持たせらるゝ文三郎殿を、山寺の和尚など……」

「水は同じ處を流れぬ、人の身の幸福は付られぬ、乞丐にもならず、和尚にもならず、醫者も學者も身に適はずば、依然武士に……」

「それ御覽ぜ、瓜の蔓に茄子は生らぬ、武士の胤は武士に限る、詮ずる處當家の跡目、奥方も

お望みぢや、御承知あらせ」

「路傍に咲く樺も花、吉野初瀬の櫻も花、同じ花にも高下あり、同じ武士にも品がござる」

「又しても左様お詞、さらば我等お組の者、武士の中で無いと仰せか」

「兩刀を挿して在らす、お武家には相違ない、然し御家人、お旗本衆で在りない」

『旗本は大名ぢや』

『大名も武士ぢや、旗本衆とは云はぬ、何十萬石の御主も、刀は三本挿させられぬ』

『うむ』とばかり次郎八は答へに究りて、目を白う黒うするのみ。

『同じ物なら花は櫻、人は眞の武士になりたい、さりとて萬石とも望めまいで、文三郎は千石以下では主取させぬ』

『え、千石…』

『千石と二百五十俵、大分の差別がある、は、』と玄庵はお谷の酌んで出す瀝茶に咽喉を濕はして、『眞平ぢや』

『千石は容易で無い、然も太平の代、武士の手柄を現はすに機が無いで、文三郎殿御器量は大きうても、此の望みは満足なるまい、長州公お引き立ての御當家、無いを有るには致し難いが、二百五十俵でも土臺あれば、これから次第に手が伸ばせる、立身は伎倆次第、兎も角も當家御相續、空の月を捉らうとして手を延す猿猴よりは、手近の柿に満足して腹を充たす小猿が勝ちや、子供の足に十里の道はなるまい、千石との御所望、ちと御無理あるまいか、悪いことは申さぬ、天下大法は曲げられぬ、准養子なさせられ』

『千石取らずば、町醫者で果てさする、お志は嬉しう受けるが、二百五十俵の扶持欲しさ、金を鉛には使ひ難ねる、恕さしめ』

玄庵は小き御家人の株を見ること、まことに破鍋敵履なりき、彼は意味無く活きんよりも、意味在る最後を願へる達人なりき。

『三』

次郎八今五七年若くば、玄庵を此儘には濟ますまじき氣色なりき、一時は顔の色も蒼ざめ、膝に置きたる手頸も慄ひ、血走る目を襖の陰の脇差に注ぎたる事、幾度なるかを知らねど、前には親しき友の大病、背後にはその妻の涙、年齢の功は石よりも重く、燃え立つ怒りを沈と抑へぬ。

『奥方聞かせられる通りぢや、此儀斷然思ひ切らせ、文三郎殿小さい池の魚では無いとちや』

『是非がござりませぬ』とお谷も恨みある聲に諦めて『千石のお望み持たせて、二百五十俵の小身は繼がせられぬ、こりや御有理でござります』

『當家跡目は、お仲間中からても養子、惣左衛門の子に養へ、御家人の二三男、行き場もなく困り居るが、組屋敷に幾十人あるかも知れぬぞ』

「文三郎殿はお立派ぢや、將來は千石取の大身とも爲らせう、同じ御子息と申しながら惣左衛門殿に比べては、天地ほどの相違、母御あらせられぬお子供ほど、世に無慘なものはござらぬ」
「これもお母様お指金でござります、惣左衛門眞實の母様の味知らぬが、返すくも不憫さうでござります」

針の如く痛き詞を聞きながら、玄庵は氣に止めたる事もなく平氣なり。

「雀燕はよく囀つても、大鵬の心は知らぬ、大鵬どころでは無い、鳶鷹の心も知らぬ、何となりと申せ」と冷かに云ひ切り「さて惣左衛門容體ぢや」

「どうせ數に入らぬ身でござります、何の様になりませうとも、一代限り果てる家でござります」とお谷は食ひ入る程の聲なりき。

「今日診た處、さのみ變つたことも無い、此分ではちと長びかう、全快にはなるまいも、二二年の後は、起居に不自由なくて終まう、その間に相續の養子、探すもよし、探さぬもよし、二百五十俵の家、立つも潰るも、將軍家に輕重無い、神の目から水の漚も同様ぢや、惣左衛門を貶し云ふではないが、二百五十俵限りの器量、死ぬも活きるも世の損益に關係ない、萬事はお谷心任せ、別しては神崎殿御助言、始末味好う付く様のお捌きを願ひ上げる、愚老は御承知

の家業、他ならぬ人命を預かり居るで、思ふやうに手も引かれぬ、惣左衛門は不幸兒、幼少より諸所を流浪、人に優れて艱難も致し居るで、文三郎よりは可愛く思ふ、されど夫れは芥子よりも小さい私事、斯様な大病に打たれては、再び世間に立つこともなるまい、申さば落花、假し來年の春に遭うても、再び枝に還る道無い廢物同様の物、見捨て置く外は無いて、他にもう少し大きな仕事——と申すは文三郎教育ぢや、彼奴幸ひに健康兒、道春永喜に舌を卷かするほど讀書もする、劍術も一手二手教へ試みるに、其方の才もある氣、惣左衛門廢物同様の身とならば、己れ二人前の働きて、父兄の名も揚げねばならぬ、見事一流の奥に入つて、御國の爲めに後々の範も垂れねばならぬ、千石ならで主取をさせぬと云ふも、知行に戀々致すでない、武士もそれだけの器量なくては、世に功は立てられぬ、何處へ出しても、千石で通用する男ならば、學問武藝何れの道でもお役に立つ、當家へ薄う致すのは此の理ぢや、神崎殿御芳情を反古にして、我意を立て抜くも此の理ぢや、悪う思召し下さるな、お谷も心僻んではならぬ、何れとも好い様に始末致せ」

玄庵の心は海の如く廣かりき、一圖我子の愛情に縛らるゝことなく、大きく眼を御國御爲めに注げるなり、文三郎を二百五十俵の准養子にするよりは、手許に置きて文武を授け、やがて

大器を成させんとの心、その中に慈愛ありき、その中に大主義ありき。

一たんは岳父の心の冷かなるを恨みたるお谷も、玄庵のこの詞には泣かされて、狭き路次より廣々せる野の中に投げ出されたる感ありき、次郎八も同じ思ひなり。

『さて早や、感じ入つた御主意ぢや、一家の興廢、御國の上からは些々たる事、それよりは神器の養成、さすがに文三郎殿御親父ほどあつて、お目の注げ處がてんと違ふ、先刻よりの不禮、悪氣あつて申したのではない、幾重にも恕させられ、御當家跡目は、他家より養子、お頭へは拙者からお届け申す』

『何かとお肝煎、玄庵改めてお禮申す、お谷も心得、萬事に如才あるまいが、人よりは家が大、家よりは主人が大事、主人よりは將軍家大事、將軍家よりは天道様大切、人は小を捨て、大を活す動作が第一ぢや、女として同じ人間、此儀をしかと心得あらうぞ』

お谷は唯畏まる他なかりき、外には老鶯の溢りながらに鳴く音聞こえて、次の間に藥煎る烟、庭に外に若葉の匂ひ、惣左衛門はばちくと凹みたる目を開きて、此場の談合、いかに果つるかを氣に懸ける様なりき。

四

『旦那様、もし旦那様』

玄庵が手水終りて、竹縁傳ひ奥の間へ入らんとする時、庭の杜鵑花の繁る下より呼びて、枯木の如く老いたる身を起したるは利平なりき。

『利平か』

『へえ』と砦石の側に蹲りぬ。

『何事ぢや』

『お恨み申します』

『ほ』と立ちたるま、『委細を聞いたか』

『詳しくお聞き申してござります』と利平は片手に涙を拭ひて『文三郎様ばかりがお子様で、御當家旦那様はお子様ぢやござりませぬか喃』

『此方とは古いのう、伊勢以來ぢや』

『何故片手打のお捌きを爲されます』

『當家は乃公が立てる筈、その家名を惣左衛門に立てさせた、憎うてはならぬ事ぢや』

『文三郎様准御養子、當然有るべき筈でござります、それを旦那様御不承知、他家よりお迎へ

取り遊ばさう思召しと承り、下郎一圓合點參らぬてござります
『富士の山を一時に見は爲らぬ、お身達の存ぜぬ事ぢや』

『爾うは爲りませぬ、そのお詞嘸み込みませぬ』と利平は臆したるさまもなく身を進めぬ『伊勢國御退轉の砌、若様を脊に負うて、何百里の山川を奥州までお供した下郎でござります、御當家旦那様のお身の内には、恐れながら下郎の脊の温みも添うてござります、身は枯木同様に朽ち果て、若様御出世、一かどお武家にならせられれば、世に思ひ置くこと無いと、かねて深く思ひあつたてござります、それが此度の御大病、旦那様のお不幸ばかりでなく、下郎め不幸、頼みの綱切れ果て、は、千尋の谷底へ眞逆に落ちるより他ござりませぬ、此の心不惑とも思召さば、奥様お望みを協へさせられ、文三郎様を准御養子に……』
『利平々々』と玄庵は口早く『お身の忠義は天道様御存じぢや、お身は忠義の誠を盡いて、人の人たる道を全うした人間、現世の務めは立派に果した、死ぬるも思ひ置くことない身體ぢや、が乃公はまだ其處へ至らぬ、乃公は若氣の至り、同僚を手に掛けた、然も主恩を後にして武士らしいもなく逐天した、其の事存じあるはお身ばかりぢや、お身ばかりで無い天道様御存じ、乃公の心も熱く知つてゐる、萬一此のまゝ病死ども致して見、彼の大罪償ふ時無く、魂魄長く』

宙宇に迷うて、末代子孫の祟りとならう』

『とは在しませうも、只今それを仰せられて、什麼の甲斐もござりませぬ、すりや尙の事、御家名御大切——』

『ま、聞け』と玄庵は舊き昔を追ひ懐ふが如く、『何日まで経ても、一度犯した罪は消えぬ、償ひを致さぬ間、乃公の頭には黒い雲が掛つてある、苦勞は此處ぢや、乃公も以前の身では無い、惣左衛門病氣、明日をも知れぬ容體、文三郎養子さすれば、山鹿の家名細々立たう、祖先代々への義理も立たう、されどそれは私一家の幸福、乃公の作つた罪は消えぬ、惣左衛門に家を譲り、乃公は分家、頭顱を圓め、文三郎引き伴れ、町醫者に成り下つた眞意、お身ばかりに打ち開ける、惣領に家を立てさせ、次男を一かど物にして、乃公の大罪を償はさせう了見ぢや、相手方子孫のもの、今も彼地に残りあらば、當の敵、下手人は在下と名乗りかけ、立派に打たる、法もあれど、一家斷絶とあるからは協はぬ、切ては文三郎を御國お役に立て、それに由つて乃公の罪科に棒を引かれう心で居る、この望み満足、文三郎忠義に由つて、假へ爪の尖頭ほども御國御用の端とならば、天道様寛容、乃公の大罪免さるゝてあらうと察する、當家を疎略に致すのは、偶々子孫の爲めを思ふからぢや、お身達の目に、乃公の仕方冷たう見ゆるは、偶』

偶後悔の念映るのちや、お身とはちがうて乃公はまだ人の人たる道を竭さぬ、自ら犯した罪科の償ひだも致さぬ、此の心を推量、當分は何も云ふな、文三郎利發に生れ、人より兎や角云はるゝは、天道乃公を捨てたまはぬちや」と云ひかけてほつと息、事に頓着する處なき如見ゆる人の胸には、熱き火焰と燃ゆるものなり。

『分りました』と利平は大地に額を付け『よく分りました、年老ては御主人のお心を見る目さへ曇ります、一尺後れて歩く者は、いつまで経つても、追ひ越すことはなりません、お主の智慧と下郎の智慧とは、天と地でござります、山と川でござります、然し旦那様、下郎は御當家旦那様がお不憫うござります』

『弱い者は憐れちや、美しい花は早う散る』と玄庵も悵然として『花には爲りたくない、やがては棟梁となる常磐木にはなりたいものちや』

『世には下郎見るやうに、一生涯を下草で朽ちる者ござります』

【五】

文三郎は遂に惣左衛門の家を繼がざりき。

これには惣左衛門の同僚、及び玄庵の意志を熟く知らぬ人々の非難抗撃ありしのみならず、

惣左衛門には義理深き繼母お多具の故障ありき、文三郎を准養子にせんとするを拒むは、お多具の繼しき心よりならんと云はるゝが辛ければ、枉てもお谷の請を許して、山鹿の家を立てさせられたしと願ひ望みたれど、玄庵は耳を傾けざりき。

『千石以上ならでは文三郎に主取させぬ』

これ彼が唯一の返答なりき。

文三郎は山鹿家跡目相續の事に由りて、家庭に湧くが如き風波を見ながら、他事もなく學問に出精しき、最初は「田舎修業」と卑しめ貶したる道春永喜も、この進歩の著しきに舌を巻きて、末頼母しく思ひたりき、平凡無爲の門弟子三千人を鞠育つるよりは、文三郎一人を教へ導くに力籠りき。

惣左衛門の家へは次郎八の盡力に由りて、同僚何がしより好き養子迎へられき、これその年秋の事なりき。

第五章 麒 麟 兒

【一】

「八丁堀に麒麟兒が現れた、九歳で林大學頭を驚かせた、將來は何れ程立派な者にならうかな」
 江戸の諸家中は至る處に此の沙汰なりき、醫師、僧侶、儒家、寺子屋、假初にも文字を解する者は皆文三郎の噂せぬもあらざりき、年齒は若く名の老せたるを驚き褒めぬはあらざりき。
 寛永九年の春立ち初めて、御濠の柳に淺翠、參差たり麒麟兒は師家へ對する年頭の祝儀を終りて、今家へ歸り來りぬ、年齒は十一、九歳の時塚田奎助に伴はれて、林道春の門へ入りたるより、早くも足掛け三年の月日を送りぬ、他の兒童が三年の修業よりも、文三郎が一年の修業が效驗多かりき、文三郎が足掛三年の勉學は、他の兒童が十年の勉學よりも、學問の上に著しき進歩はありき。
 入門の當時は、道春永喜をして『田舎學問の者を師となしたる故、句點に惡き點あり』と嘆ぜしめたるも痕跡なく消え、例へば塵に染みたる素絹を大川の水に晒して、原の純白となりし如き様ありき、彼が無點の書物に由りて、熱心に讀み直したる結果は、幼少ながら廣き江戸中に名を馳するまでとなりき、道春も永喜も、都の學問の早く彼の腸に滲み渡りたるを歡ぶならん。

『若様お歸りてござります』

供に立ちたる若黨は、山鹿の門を入ると齊しく斯く叫びぬ、町醫者ながら大名旗本の招きにも應じ、原は蒲生忠郷の老臣町野長門守の客分たりし見識を捨てず、家庭に在りては總て以前の習慣を守りたりき、玄庵は旦那、文三郎は若様、お多具は奥様と他に呼ばせて、道服着けたる身も、心の底は武士なりき、銀の匙を握れる手に、いざ事あらば傳來の一刀取りて起つべき氣概胸に充ち渡りき。

『お父様只今、お母様只今』

童ながら底力のある聲、谷川の水岩洞の間に鳴りて、清しさ自然に現はるゝが如し、玄庵は机に凭りて、日頃好める論語雍也の篇を讀みてありき、お多具は火鉢に掛けたる鐵瓶を下へおろして。

『途中は寒くあつたらうに、これへ來て手を温り召せ』と温情まづ唇を漏れ來る。

『寒うは思ひませぬ、身にお母様のお情を着てござります』と文三郎は膝に兩手を支きたるまななりき。

『お師匠様はお變りも無いか、御無事でお年を取らせられたか』

『兩先生とも一入御機嫌に渡らせ、年と共に御齡を加へさせござりまするが、至つて御健祥、

御氣色も優れさせござります

『何よりも重疊ぢや、そなた首尾は何とあつたぞ』

『日本一でござりました、孔子様御像の前で、御盃を下し置かれ、身に餘る御懇の御意、その上、歳旦の作詩を見せよとのお詞でござりました』

今まで餘念も無く讀書に目を晒し居たる玄庵は、此時きつと此方を向きて、

『お目に掛けたか』

『何も修業と存じ、昨日作りしを御覽に入れてござります』

『ほ』と玄庵は微笑して『道春一覽あらせられたか』

『兩先生御一覽、幼少の述作分けて感じ入る旨のお詞、只一字御改作なさせられたばかり、序文をも加へさせてござります』

『幸福致したの、どれ』と玄庵は嬉しげに『草稿見やう』

『これにござります』と懐中したるを取り出で、

『大先生御和韻もござります』

『愈幸福ぢや』と満足氣に披き見る、文三郎作の七言絶句、字句は幼けれど文字の間に、や

がて宇宙の大を呑むべき氣象現はれ、道春が和韻の一作、宛ら梅に添ふ竹の如く愛たかりき。

三

玄庵はつく／＼見て、年齢にも似ぬ我兒の才學に感じながら、

『願うてもあるまじき幸福致した、ぢやが乃公の眼からは瑕だらけぢや、道春公よく御最負あらせられたと見え、斯様にお褒め下された、これで高慢の心起しては爲らぬぞ』と表面には噛んで吐き出したる口上なりき。

『心得ござります』と文三郎はきつと云ひ『一合目はまだ山の名が附きませぬ』

『その心忘れねば珍重ぢや、五合目六合目に至つて、初めて下界を瞰ることが爲き、脚を幾萬尺の高きに立て、天地を達觀し得た時、漸く人間の界から超脱するのぢや、其處で詩作ぢやが……そなたなどまだ二十字二十八字を順序可く並べるといふばかりで、眞の詩の味が無い、詩は志ぢや、志を言ふものぢや、文字は何れほど彫琢されても、字句は何れほど鍛錬されても、詩とは云つて志とは云はぬ、要は字句の間に現はれる精神——文字以外にはのめく魂——これが専ぢや、この元旦の詩、文字に於て讀むに足るが、心に於いて取る處少い、斯様な物は誇りとするに足らぬ、句を摘み章を拾ふは、抑文章の末伎としてある』

玄庵は子を育つるに極めて厳格なりき、少くも文三郎を珠と研くに、一步だも假す處なく厳格なりき、彼は文三郎を日本一の學者、武士、もしくは兵學家劍道者として、祖先の名を揚げたしと願へりき、その身は處世の道を誤りて、今は陋巷に隠れたれど、切ては兄弟二人の中、一人だけを日本に二人となき大人物に仕立てんと願へりき、然も彼は深く見る處ありて、惣左衛門に家の名を繼がせ、文三郎に其身の志を承繼させんと思ひ立ちき、千里を行く駒は、それだけの物を飼はざるべからず、それだけの鞭を與へざるべからず、名馬を御して遠きに志す伯樂は、麒麟兒を養ひて日本一の大達者と爲さんとする父の心と同じなりき。

『御來客でござります』

玄關番の一門人は、恭く執次ぎぬ、玄庵は脊伸する様に見て、

『誰方ぢや』

『堀尾山城守様御内楯取伊豆殿でござります』

楯取伊豆は識れる武士なり、彼の妻が産後に惱める時、玄庵の下したる處方、危き命を取り止めたるより、伊豆一家は玄庵を神の如く敬ひぬ、江戸市中に醫者の數は多けれど、玄庵に上越す者はあるまじ、玄庵は藥方に因りて患者を治くすと云ふよりも、誠心氣合をもて衰へたる

精神を活すと云ふに近し、彼の手には必ず不老不死の術もあらん、主家幸にこの良醫を獲ば、まさかの時如何ほど爲になるかも知れじとの主意に由りて、屢次仕官を薦めたれど、玄庵は曾て耳をだに傾げざりき、一人の大名に抱へられて、狭き御家中に典醫と立てらるゝより、廣く江戸市中を相手にして、病苦疾患に惱める者を、少しにても多く救ふ方望みなり、將た自己の天職なり。

玄庵は心に斯く覺悟するが故、小き利祿に迷ふ處なかりき、小き名譽に縛らるゝ事なかりき、其身もし一大名に縛らるゝ事あらば、遂に文三郎も我名跡を繼ぐに至らん、我は文三郎を愛するが爲に仕官せず、我は文三郎を教育したきが故に一生を町醫者に終る、これ玄庵の主意なりき。

『伊豆どの又お入來か、例の事御勸誘と思はれる、お目に掛る要もないが、切角のお志を無にするも如何ぢや、殊に初春、年酒にてもさし上げたい、これへと申せ』

執次の門人は心得て引き退る。

『楯取殿御入來、私部屋へ退ります』

文三郎は改め云ひぬ。

「いや、夫に居れ、そなたまだ伊豆どのに對面すまい、好い折柄ぢや、お目に掛り置け」
お多具は年酒の用意すべく座を立ちぬ、引き違へて入り来るは四十八九の武士、赤銅色の顔、淺黄紬の衣服、同じ羽織、松枝平の袴、大小は次の間の襖の蔭に置きて、無刀のまゝ、設けの席に着く、これ楯取伊豆なりき。

三

「其後は不沙汰、まづ初春の御慶を申す」と伊豆は飾り氣の無き口上なりき。
「お變らせ無う、芽出度く年を加へさせられ、お互に祝着、御内實も追々御快癒か」
「お蔭を以て障りも無く、今年の雜糞を祝ひ申した、これ皆貴老の賜物ぢや、家内も歡び罷りある」

「重ね々、芽出度い、就ては……」と其處に頷き居れる文三郎を見返りて「伴にお詞下さるまいか、毎度お噂申し上げる文三郎ぢや」

「御息喃、初めて御意得る」と伊豆は此方を振り向き「拙者は伊豆ぢや、お見知り置かせられ」

「文三郎でござります、以後を御懇意に仰せ付け下さりませ」

十一の小童、五十近き老人に對して、その口上對等なりき。

「お幾歳ぢや」

「十一歳に爲ります」と玄庵は得意の色面に現はれぬ。

「十一とは見えぬ、立派な御軀ぢや」と伊豆は飽く様もなく視入つて「林大學殿へ御入門といふ、學問御出精であらせられるな」

「只今も林家から歸り、元旦の作詩をお目に掛け、殊の外賞美せられたとて、甚う自慢の様に申すて、叱り付けあつた所ぢや、詩と云ふほどの物ではないが子供の細工には出來て居る、御一覽下され」

玄庵は卑下の中に自慢ありき、机の上に置きたる文三郎の詩稿を取りて、伊豆の前へさし出しき、伊豆はまづ眼鏡を掛け手に取りて展き視る。

「ほ、」と忽ち感じて「これが御息のお作かの」

「お目に掛けるほどの物ではござらぬ」

「文三郎殿お一人の力か、それとも御老人御加筆あらせられたか」

「愚老詩作を致さぬ、平仄も心得申さぬ」と玄庵はその身の詩道に心掛けぬを誇るやうに「伴

の自力、愚老の目からは讀むに足らぬ物とも思ふが、道春は殊の外氣に入つて、序文まで加へ呉れた、學者の目は別に見える」

『和約まで致しある、林家學者の棟梁として、門弟子の數ばかりでも、幾千人と數知れぬが、文三郎どの如きはあるまい、さぞ寵愛致しあらう』

『十三神童、二十で阿呆、古から相場が極つてござる、は、は、』と玄庵は大笑ひして『まだ芽を生いたばかりぢや、伸びるか枯れるか、後々の運命は知れぬでござる』

伊豆は文三郎の詩を幾度も繰返して、十一の小さき胸に、いかにして此の豊富の想の浮び出でしかを怪く思ひぬ、玄庵は折柄運び來れる盃臺を手に取りて、

『まづ一獻、これではお口に適ふ物もあるまいが、年頭の祝儀、お受け召せ』

『こりや早や思はぬ長座、御雜作を掛けて濟まぬ、さらば：』と朱塗に松竹梅を詩繪せる大盃を取り上げ『芽出度く頂戴致すかな』

『澤山に飲ませられ、文三郎酌仕る』

文三郎はすり寄りて浪々酌ぐ、玄庵と伊豆との間に、三五度も盃の獻酬ありたる後、伊豆は容を改めて、

『時に玄庵老、前日以來度々申し上げ、さぞ厭煩くも思召さうが、主人山城守、貴老の噂を聞かせられて、熱心に御所望ぢや、御隨意勤めて仔細ない、お目見得下さるまいか』

『黄金の綱あつても、愚老の身を縛りはならぬ、野末に咲く草花が、お庭の土に適ふ筈は無いで、此のまゝにして置かせ、天高く鳴く雲雀は、籠に飼はるゝを嬉しく思はぬ、愚老も同様ぢや』

『年は改つても、貴老のお心は改まらぬ、やはりお否か』

『然し御芳志は無に致さぬ、何百石の御知行を下されても、他家へ奉公仕らぬ、これが貴所への報恩でござる』と玄庵は詞強く云ふ。

庭には鶯の小鳴き、内には酒の香深く罩もりて、床に生けたる白梅一枝、宛らに笑を見せぬ。

【四】

『こゝに一つ御相談申し上げる事がある』

伊豆は暫くして云ひ出でぬ、多くは好まぬ酒を強られて、ほんのりと色づきたる眼を文三郎に向けたりき。

「何事の御相談でござるかな」

「貴老御仕官ないと云ふ、これも止むを得ぬ事情、此上勸めは致さぬが、御子息は何でござる、お年齒は十一と承はるも、お心は成年の者も及ばぬ、殊に林大學頭、これほどに推奨、學問界の珍と致すから、將來見所あるに極つた、主人山城守へお目見得下し置かれぬか喃」

「深く玄庵を慕ふあまり、切てその子息にても、主家へ推薦したと云ふ、彼の熱情は詞の末に溢れたり。」

「文三郎思案もあらう、伊豆どの、お詞を什麼と聞いた」

「玄庵はきつと問ひぬ、文三郎は目をだも動かさず。」

「只お父様お心に任せまする」

「堀尾城州公は音に聞えた明君ぢや、その御家老の楫取殿、我等を御最負なさせられる、父に代つてお目見得申すに、故障あらうとも存ぜぬ、仰せに従ふか」

「何時にても參上、お目通り致します」

「大名も人、町人も人、大名は大名たる天分を盡し、町人は町人たる天職に就く、身分に高下はあつても、魂に高下は無い、その心を忘れるな、尾籠の振舞して先祖の名を穢すことあら

ば、末代まで勘當ぢや」

「心得ござります」

「伊豆殿、何日御同道下さる喃」

「今日只今から 諺にも善は急げと申す、君侯お側へ麒麟兒を御推舉申す、この上の善事は無い、早速の御承知、辱く存ずる」と伊豆は満足の體なりき。

「町醫者の伴なれど心は武士、武士の魂をもて拜調爲い」と玄庵は同じ意味を繰返しつゝ「鯉は小池に育つても、大河の心を失はぬ」

「御教訓を忘れませぬ」と文三郎は憎きほど沈着きつ、

「さらば母上に願ひ衣服を着替へ、暫時は伊豆どのお待ち下さらうぞ」

「緩々と爲させられ、何時までもお待ち申す」

「お多具は我兒が大名にお目通りすると聞きて、嬉しき譬へんに物なかりき、まだ下枝をも飛び難ぬるやう思ひ居たる雛鳥が、早くも高き梢に昇りて、鳴く音美しく春風に羽叩きせば、親鳥いかに満足せん、お多具は實に此心なりき、お多具は實に此の歡びなりき。」

文三郎が今日の曠着は、新たに仕立てたる熨斗目の振袖なりき、周囲を短き垂髪にして、中

「何事の御相談でござるかな」

央を小さく可愛らしき鬚に取り上げたる風俗、蕾の花の何處やらに薫りて見え、腰には傳來の一刀、例の沈着きたる態度、伊豆は見るごとに、これが十一歳の童かと驚かる、事のみなりき。

「お父様、行つて参ります、楯取様御雑作に相成りまする」

「随分氣を付け、疎忽ないやう致せ、大名の疊は滑るぞ、大名の廊下は長いぞ」
これ玄庵が我兒登龍門の首途に餞する口上なりき。

【五】

堀尾山城守は名を忠晴、小字を小太郎と呼びて、出雲松江二十四萬石の主なりき、文三郎が初めてお目見得申し上げたる寛永九年は、年三十八歳（一説に三十四歳）なりき、豊太閤のお側衆として勇名天下を歴したる堀尾茂助吉晴はその父、美貌にして力強く、幼きより二代將軍秀忠公に寵愛せられたる信濃守忠氏はその兄、當時諸侯の中にありても、文武兩道に志厚く、一方の雄と稱せられありき。

文三郎が楯取伊豆に伴はれて、半藏門外の上屋敷に赴きたるは、その日未刻過なりき。

伊豆は文三郎をその身の詰所に待たせ置きて、一伍一什を城州公御前に披露しぬ、城州は今

しもお表の御用果て、奥の間に入らんとしたる時なりしが、伊豆の口より「八丁堀の麒麟兒」を伴ひ來りたる由聞かせて、直に目通りを許す旨沙汰せられぬ、伊豆を信じ給ふこと渥きに由れど、今まで例なき事なりき、學を好みたまふ深きを知るべし。

「すぐお目通りを許させられる、案外の事、まづ此方へ來ませ」

伊豆は文三郎を促して、對面の間へ伴ひぬ、大石の如く沈着きたる文三郎は、玄庵の心付け呉れたる長き廊下にも躓かず、廣き疊にも滑らず、案内に任せて、その間の敷居越しに座を占めたり、身分に高下あれど、魂に高下なしと信じたる彼は、近習衆、お側役、用人、家老の二列に並び居れる間に坐りて、毫も怯める色なかりき。

待つ間程なく山城守出席ありき、家臣の面々はツと其場に平伏す、文三郎も又敷居に額を付けたりき、執次の役人聲を張りて、

「山鹿文三郎お目通り致しまする」

文三郎は僅に顔を擧げて、山城守を視上げたり、山城守はきツと見下し、

「まだ幼弱と見ゆる、これで左様に本を讀むか」

「林大學頭祕藏の門人にござりまする氣」と伊豆は紹介の役目なりき。

「大坂冬の御陣は、予が十六歳の時であつた、手の者引き具し、鶴野口を攻めた事を思ひ出す、伊豆も一所であつたのう」

文三郎が幼うして學問に盛名あるを聞かせ、山城守はその身初陣の勇ましかりし二十年前を想ひ起し給へるなりき。

「伊豆は、御馬の口に引き添うてござりました、折柄上杉殿御手、同じ攻口にあらせられて、先を争うたを記憶しござります」

「予は十六歳で初陣、文三郎は十一歳で神童の名を博する、及ばぬ、文武両面同じ道ちや、將來出世せねばならぬ」

文三郎は平伏したるまゝなりき。

「武士の太刀を使ふごとく、文三郎は巧に書物を読みまする、御試しなさせられませ」

「一興ちや、これにて聞く」

「御意ちや、一條御講釋申し上げ」と伊豆は文三郎に對ひて云ひぬ。

「お望みに任せまする、四書五經の中何にてもお選みなさせませ」

口は小さけれどその口上は大きかりき。

〔六〕

文三郎は山城守所望に由りて、こゝに孝經を講義する事となりぬ、一座は耳を立て、聞く、彼は特に「諸侯章第三」を擇みたりき。

悠然たる態度、泰然たる沈着、梅の蕾見る如き唇を徐に開きて、

「諸侯章第三の條を申し上げます」と披露、一語自ら千斤の重味ありき。

「子曰居上而不驕高而不危」とござります。驕ると申すは自慢して人を蔑り輕んずると、

こゝにての心は尊きに居て、下様を卑しむ輕んずることに當てござります、己れ富んで貧しき

ものを蔑み、己に才智ありとて、人を妬み嫉む類を申します、大名はその國、その領土の最も

上にあらする方ゆるゑ、その位も又高うござります、高い者は下を本とする、下がなくて高きに

居る事は協ひませぬ、民は國の本、故に高きにありといへども、常に身と行爲とを慎み、恭謙

を旨として驕ること無ければ、高きに居ても危くはないとの意を説かせられたものでござりま

す、次に「制節謹度満而不溢」と説かれてござります、節と申すは竹の節の事で、節根節度

と續き、物を程よく限る事に譬へてござります、故にこゝに節を制すとあるは、取も直さず節

用の事、國の收入が此ほどであるから、支出も此だけにせねばならぬといふ、限りを立てた事

に當ります、大名方は一國の御主君でござりまするゆゑ、恩恵を施さねばなりません、恩恵を施すには、常用を節しなければなりません、平生の用を節せず致しては、遂に御家來衆へ御扶持を遣はされることも能きぬやうになります、第一によく慎まねばなりません、度は度量でござります、一合一斗一石と定むる處を取つて法度とせねばなりません、身に應じて節を制し、分に由つて法度を守り、慎んで其身に行ひ、聊かでも法度の外へ出ぬやうに致す、足ることを知ると申します、斯くして諸人からの年貢を積めば、即てお蔵に充滿する、充滿しても溢れることはないとの意を説かせられたのでござりまする』
文三郎の辯舌は宛ら堅板に水を流すが如く、些の淀みもあらざりき、燃ゆるが如き紅き唇を漏れ出る瘰とせる聲は、聖人の血を分けてその心を抽き出すやうに貴かりき、紅梅の花蕾解けて、中より香露の流れ出るかと疑ふ程に潔かりき、山城守殿を初め一座皆耳を傾けて聞く。

『高而不危所以長守貴也、滿而不溢所以長守富也』とは、身の行ひを謹んで善き方のみ志せば、長く富貴を失ふことあるまじとの心ござります、聖人は驕を憎み、天道は盈るを缺く、上に居て驕る事なければ、高しといへども危からず、然もその高位の貴きを長久に守

り行くことが能るのでござります、富貴不離其身、然後能保其社稷、而和其民人、蓋諸侯之孝也とは、其徳あれば其位あり、其位あれば其國を保ち得る、これ富貴がその身を放れぬからでござります、國あれば社稷があり民人がござります、社は土神でござります、國を保つ人はその國の土神を祀らねばなりません、稷は農業を司るもの、五穀を總名して稷と申す義に取り、その神を稷と名けます、故に大名から庶民の末まで、その神を祀らぬ者はござりませぬ、社稷はみな土壇、大名衆の社稷は宮殿の西にござります、社壇は東、稷壇は西、相併べて北向に建てるのが古の法でござります、州社民社はその州里に建てます、大名が始めて國に封ぜられた時は、その方邑の土を給はります、これを國につき込めて、社稷の壇を作ります、大名は必ず國を重んずべきものゆゑ、國を守るを社稷を保つと云ふのでござります、食は民の命ゆゑ、これを薦むるが根本の務めとあります、大名衆孝道の法、大略はまづ斯くの通りでござります、詩云戰々兢々如臨淵、淵如履薄氷、詩は小雅小旻の章、この詩を引いてこの章を結びます、戰々は慎む意、兢々は恐る意、深き淵に臨んでは落ち溺れんことを恐れ、薄き氷を履んでは落ち溺れんことを怖れる、常に自ら安からぬさまを云つたのであります、孝道を行ふも又同じ事、自ら危きを知るものはよく其位を安んじ、常に悪しきを憂ふる者

はよく其存を保ち、地に居て亂を恐るゝものは、皆その治を保つ、故に君子は常に戦々兢兢として、安きに居つゝも危きを忘れず、存すれども亡を忘れず、治に居て亂を忘れざるが故、身も安く國家も又安く、幸運なる生涯を得るのでござります。』
十一歳の學者は、多くの老人大人を前に置いて、滔々たる辯舌、例へば河水の低きに就きて、油然と流れ行くが如く、諸侯章を講義し終りぬ、言辭は重く、意義は明かに、然も一言の滯も無かりき、一かどの學者兵法者にも、二十餘萬石の太守に召されて、初めて講義の席に出でんもの、自然言辭に淀み見えてすら、講義を説くもの稀なるべきに、文三郎の蓄の口は、諸侯の踐むべき孝道を説きて、一絲亂るゝ事すら無かりき。
楯取伊豆は云ふまで無く、山城守を初めとして、一座死らに酔へるが如し。

『七』

『什麼とも不思議ぢや』と山城守は感激の聲を絶たず『十一の小供、四十近い大人を驚かす、今の講義振、全くの大人ぢや、道春の講座に參るも此以上の事はあるまい』
『まことに人間業とは思はれませぬ』と伊豆は推舉の效ありしを歡びて『天が下の小供の智慧を文三郎一人占めに致したと見えござります』

『春也も十一歳ぢやの』

山城守はその身の背後に、太刀持ちて伺候せる小々姓を見返らせぬ、春也は花の如く愛らしき童なりき、詞は無く恥しげにさし垂頭く。

『春也も十一歳、伊豆の伴も十一歳、同じ様に目口鼻あつて、智慧に上下の區別あるは、不思議といふも思ござります』

『春也も出精致さねばならぬのう』と山城守は彼の才を惜むが如く『文三郎も目が三個あるてない、同じ玉ぢや、磨けば光る』

『身の甲斐なさを恥ぢ入ります、同じやうに生を受けて、同じやうに成長せぬ不幸を恨みます』と春也は絞り出すやうに云ふ。

『梅の枝葉に異り無うて、咲く花に異りあると同様、人の身に異り無うて、人の智慧にも異りあると見えます』

伊豆は一言云ふことに、感嘆の心を漏らしき、況して山城守は文三郎の才の尋常ならぬを惜む餘り、一家中小童の龜鑑として、寵愛措く能はざりし春也の光りの薄らぎ行くを感じたりき、春也は物頭河原淺右衛門の次男、七歳の時考經を暗んじ、九歳の時柳生流の劍客出淵何が

しと試合ひ、美事の勝利を得たるに由りて、神童の名一家中に囂しかりき、少年の才を愛したまふこと、取り分け他に超えたる山城守は、浅右衛門に沙汰して、強て近侍に召したまひぬ、同役大名衆の參會あるごと、常に春也の力量の勝れたるを物語りて、自慢の二に數へられしが、今日文三郎を見るに及びて、急に月の前の星を見る如き心起りき、一尺に咲くも花、一丈に咲くも花、櫻も花、木槿も花、春也も神童、文三郎も又神童の心起りぬ、彼の殿は如何にもして文三郎を手に属けたしと思ひたまひぬ、春也もし壁ならば——磨きて光る壁ならば——一雙の美玉を我家の寶にしたしと願ひたまへりき。

『文三郎御苦勞であつた喃』

『不束の講座、御耳の穢れともござりませう、盲目は蛇に怯ること致しませぬ、不禮は御容謝ござりませ』

此の口上早や小供の聲にはあらざりき。

『盃呉るゝ、受けませ』

『辱うござります』

伊豆は三寶の上に置かせし、土器を取り上げて、文三郎の前に置く、文三郎は恭しく頂戴す。

『その盃、春也に取らさうぞ』と山城守は云ひ掛けて春也を見返り『春也も文三郎に酷似からうぞ』

『は』とお受けしたる春也の聲は慄ひたり、春也の雙眼よりはら〜と涙下る。

『卒爾ながら』と文三郎は優かに土器を元の三寶の上に置きて『春也どのへ』

春也は山城守御側より滑り降りて、文三郎の前に手を付きぬ。

『お流れ頂戴致しまする』

胸に燃ゆる無念の火は、今にも口を衝かんとす、春也は負けじ魂なりき、山城守御前ならずば刺し違へて死なん意氣込みありき。

『不禮は恕させ、何事も御詫ござる』

『これを御縁に、將來御目を掛けさせられ、私も驥尾に付きて……』

「その御挨拶、此方より申す處、恐縮ござり申す」と文三郎慌てず騒がず、大木の地より生えて、高く天を摩する様なり。

春也は我も人、彼も人との感頻りなりき、彼の講釋せる孝經の意義は、われも亦疾より知れる處なり、御前もし御耳を貸させ給は、我も亦彼如きに敗を取る事はせじ、彼もし劍を取り立たば、我も亦劍を取りて立たん、彼もし水ならば、我は火となりて闘はん、彼もし動かし難き大石ならば、我はそれに打突かりて微塵に碎けん。

今に見よ、われ必ず彼の上に立たん、行く／＼彼の上に立ちて「春也いかに」と宣はせし君侯の面を見返さん、さも無くば人と生れたる甲斐もなく武士と生れたる甲斐もなし、これ然しながら君を辱め奉るにあらず、君の思召に従ふなり。

春也は心の中に斯く覺悟しつ、文三郎は數々物を給はりて、面目四邊を拂ふ間に引き退りぬ。

「八」

それより十日餘りを経たる或日の朝なりき、楯取伊豆は紅梅の美しく咲きたるを一朶持ちて、玄庵を三十間堀の屋敷に問ひぬ、玄庵は朝の診察を終りたる時なり、茶の間へ延いて案内す。

「珍しい物下された事、お庭に咲いた花ござるか」

「日南は花が早い、利發な者は奉公口が早う出る」と伊豆は謎見るやうに云ひつ、「今日は好い事を齎らせ参つた、君の仰せを受けて参つた、春に魁て薫る紅梅の一朶、これやがて御子息の將來を祝ひの心ぢや」

「ほ、」と玄庵も笑つて「何事ござる喃」

「他ではない、文三郎殿を御所望ぢや、お上げ下されるまいか」

「はて、何れへ」

「お上へさ」

「堀尾殿お側へ喃」

「中々の事、さし當り二百石を下し置かるゝ氣、物頭格、追つては加判の列にもお取り立てあらうとある、出世の緒口、御納得あるまいか」

十一歳の小童に二百石の知行せられんと云ふ、一かど武道の達人にても、一かど發明人にて、最初より二百石を宛がはるゝは稀有に屬す、然も此の度お手渥き思召し、我子青雲の梯楷を得らるゝ事定めて歡び満足せんと思ひの外、玄庵は眉の間に皺を寄せて、

「文三郎を二百石——文三郎を二百石——」と口の中に吐きつ、「まづお断りぢや」

「え、お断りと」
「追ては棟梁の材ともなるべき者、小さき鉢植には致したくない、日頃御懇意の間柄、齒に衣被せず申し上ぐる、文三郎は小供でも、愚老は幸ひに大人でござる、一人子を賣物には致さぬ、二百石は莫大の御知行でも、子實に比べては、九牛の一毛にも當り申さぬ」

「意外お詞、すると二百石が御不足と仰せぢや喃」

「愚老望みはちと大きい、取り敢ず御辭退申す」と玄庵は事も無げに云ひ切りて、高麗焼の茶碗に茶の香り好きを立て、出し「二百石の御知行より茶の味に真がある、一服召させ」

「茶も戴くなれど、今日はお上御誂を受けて參つた、御知行が御不足か、それともお家柄不承知か、委細を云はせ、此方にも思案がある」

「お家柄に不の字は無い、強て云へば知行が不足ぢや」

「お、さらば貴老お望み何ほどでござるかな」と伊豆は思はず膝を進めぬ。

玄庵は笑ふのみなりき、南蠻の花瓶に挿したる伊豆齋せの紅梅を見遣りながら、

「好い色ぢやの」

「二百石御不足なりや、三百石——四百石——それとも大きく五百石とも仰せかの」

「服加減は何とござつた、今一服參らせやう」

「茶よりは今の御返答、お望みは何とござる」と伊豆はきつと問ひ掛けたり。

「千石が一斗切れても參らせ難ぬる」

「え」と流石の伊豆はびつくりして「十一歳の文三郎殿に千石と仰せかの」

「梅の枝に鷹は止まらぬ、此方よりは望み申さねど、御意に入らば召させられ」

玄庵は口に巾るさまもなく云ひき、伊豆は惘れてつくつく顔を見守るのみ。

第六章 昔 語

「一」

麒麟兒は恙なく成長しぬ、當時學問兵學に秀でたるを召し抱へて、家の誇とせる大小名は、皆文三郎の才名に聞き惚れて、二百石三百石、多きは四五百石を扶持しても、梅に配合好く、松に反映好く、竹にも芙蓉にも芽出度添ふべき麒麟兒を、我家の庭に移し飼はんと希ひ、通手をもて玄庵へ云ひ入れたれど、玄庵は耳をだに傾けざりき、十一二歳の子供に、三五百石の

知行は少きにあらざ、殊に乳の香も失せぬ身が、學問をもて高祿を頂戴する事、前代には聞きも及ばず、後の代にも亦あるまじ、御子息出世の首途、是が非にても聞かせられと、強て人の云ふ事あれば、玄庵は莞爾笑ひて、

『長男惣左衛門は百人組の御家人を勤め申した、御頭は町田長門守様、舊來の縁固もござるで、やがて出世の望みもござるが、死後は他家から養子して、文三郎には相續をさせてござつた、五百石も二百五十俵も大差はない、少くも千石以上で無うては、武士の面目保ち行かれぬ、まさか違へば町醫者の株を繼がせても、小身者には致させ申さぬ』と答うるが例なりき。

即ち玄庵は、秘藏子を千石以上の大名(當時千石以上は大名の資格をもて遇せられき、千石以上は當主を御前と呼び得たりき)にしたき望みなりき、學問の力をもて大名の資格を贏ち得ずば、一生を町醫者に終らせん心なり、小さき知行に縛られて、僅に武士の名目を戴き、徒に太刀佩きて世を渡らんより、藥を賣りて人の病を助けるが優なりと觀念しき、玄庵は體軀倭小くして膽大きかりき、年老いて望み深かりき。

『文三郎も早や十五歳でござります、十三神童、十五で學者、二十過ぎては普通のひとと、下世話に申すを聞きます、皆様御所望あらせられるを幸ひ、何れかへお遣はしなされては何うて

ござります』

お多具は屢次良人の袖を引きて云ひぬ、女は女の智慧、女の望み、繼子の惣左衛門が二百五十俵取の御家人にて果てたる後、實子の文三郎が三五百石に召し出さるゝは、此上もなき名譽と思へるなりき、おのれも又武士の母として、人々に羨ましがられたかりき。

『女の知つたことでない』と玄庵は一言に刎ね付けて『男の子は男が育つる』

『目の前に遺失た寶は、天からのお授けてござります、天のお授けを受けぬ者は、やがて神佛の御罰を蒙るでござります』

お多具はこの執着より脱すること能はざりき、玄庵はきつとして、

『お身は又しても左様なことを云ふ、遺失た物は他人の物ぢや、自分の物でないを私するは天道へ恐れ、正しい者の爲る事でない、控へて居らう』と頭ごなしにして、乾淨房に一寸の間

も空にせず、聖經の研究に従ひ居れる文三郎を呼び寄せぬ。

『文三郎、今日は患者も參らぬ、往診も早果てた久し振に昔語せう』

『有難うござります』

『今も今、母はそなたを早う武士にしたいと云ふ、叱つて居た所、兩刀佩すが武士でない、第

「胸の覺悟、覺えあらう」
「聊か存じござります」

「十三神童、二十過ぎては普通の人といふ、そなた神童とは思つてあるまい」
「普通の人にも及ばぬ、不束者と恥てのみ居ります」
文三郎は例も大人なりき。

二

「十三の幼い身に、神童と立てられながら、二十過ぎて普通の人となる、これを何故と存ずる喃」と玄庵は重ねて問ひぬ。

「心の嫩葉、途中に枯れるてござります」と文三郎は明瞭せし答へなりき。

「うむ」と玄庵は頷いて「智慧は芽生ぢや、その翠を高慢の心で摘む、十三の神童は芽生の翠茂つた處ぢや」

「一抱へあるも松、一寸に足らぬ芽生も松、要はこの育て方でござります」

「松と生えては、棟梁となる覺悟、人と生れては、日本の柱となる覺悟、芽生が大事ぢや、慢氣は風、油断は嵐、これを防ぐ用心を怠るな、そなた原より神童でない、神童の名を得た者さ

へ、油断の嵐に折られては、二十過ぎて普通の人となる、況て最初の目に付くまじき木の芽、培養が大切ぢや、培養に人手を借るな、鍛も鋤も皆一心の中にある」

「御教訓忘却致しませぬ」

「僅の知行に目を呉る、これが油断ぢや、僅の譽に安んずる、これが慢氣ぢや、女の聲は地を走る、耳を傾くるな」

「お多具は不顔なりき、玄庵どのお一人の子にてはあるまじきをと、不平はやがて涙となりて、しとくと襟に注ぐ、玄庵は見も返らず、

「昔語ぢや、智慧の芽生の肥料とも爲せ」

文三郎は膝の上に手を支いて、火の如く熱烈に、且つ巨鐘の如く高く響く、父の面白き昔語を謹み聞きぬ。

「可兒才藏、三河武士の龜鑑ぢや、長久手合戦の頃は、關白秀次公にお仕へ申した、處が如上の敗北で、東照宮御勢々と攻め寄する、關白殿打ち敗て、唐冠に緋絨の胃、金剛太夫一人を伴れさせて、小牧山へ立ち退かせた、その後踏み止つて、付き来る敵を追ひ拂ひ、死力を出して戦ふたは、關白殿のお側衆に、岡本加介、村橋善左衛門を始めとして、六人の武士で

あつた、其處へひよつくり駈け付けたが、今申した才藏ちや、難儀の處へ才藏が來合せたので、六人衆は遽に背後へ山が生きたほどの歡び、心強く待つて居ると、才藏はつか／＼と側へ寄つて、關白殿は何れへ御越しなされたかと尋ねた、岡本加介聲に應じて、只今彼方の方へ退かせられたと答へる、才藏それを聞いて、諾し／＼と云ひながら、關白殿の御後を慕ひ參らせた、六人のお側衆、この様に皆な驚いた、可兒才藏は音に聞こえた剛の者、難儀の戦に踏み止つて、六人が拒ぎ矢する様を見たら、義理にも助太刀すべき筈を、目の前の敵を見捨て、一言をも云はず通り抜けたは、聞きしに似ぬ卑怯者と、口々に批判した、處がその日はそれで終んで、程なく和睦、關白殿は都の館へ歸らせられた、或る日の事、岡本加介番所てこの事を云ひ出して、才藏の仕方を詰つた、此の時才藏、面の色をさつと變へ、さて／＼存じ寄りぬ事、我等何の心も付かず、殿の御後を慕ひ參らせたが、詮察すれば、各自の存じ入り至極ちや、今さら辯解の詞もない、これを今生の暇乞ひ、二度お目に掛らぬと云ひ捨て、その場から立ち退いた、武士道の本意はこゝちや、そなた此の話を何と聞くな』

『才藏のお志、感じ入る外ござりませぬ』

『武士は瑕なき玉の如ちや、聊かにても人の非難を受けず、眞直に研き立てた珠の如てなくて

はならぬ、可兒才藏心付きなく致した事でも、後々人の批判を受けるに至つて、一言の辯解せず、その場より立ち退き、二度武士の交りせぬ、まことに塵ひちの瑕だも許さぬ白玉ちや、乃公は才藏此時の情を察すること、此の胸が迫つて參る』と云つて目皮を屢叩きぬ。

【三】

玄庵の昔語は文三郎の心を鍛ふ鐵槌なりき、玄庵の面白き談義は文三郎の覺悟を、正しき道に案内する燈火なりき、玄庵は暇あるごとに昔語して、人知れず文三郎の心を鍛り、更に文三郎の心を明所に誘ひぬ、文三郎は歡び聞く、

『もう一つ話せう、これは關ヶ原御陣の前であつた、獨眼龍と云はれた仙臺の伊達政宗、風雲の機に乗ずべきがあれば、天下の政をも掌の中に握らるゝ器量人、東照君の仰せを受けて、六月大阪から岩城國相馬へ廻つた、これは遠く石田治部少輔に心を通じて、徳川殿へ弓引かう企が見えたからちや、政宗が仙臺へ着いたは七月二十二日、一日休息して、二十四日陸前田郡白石の城を攻め、續いて梁川の城へ押し掛けやうといふ時、治部少輔旗揚の注進が江戸に着いた、兼て謀叛の萌芽はあつたが、この時まで表面ての旗揚と云ふてもなかつたを、いよいよ逆心と聞こえたので、神君から政宗へ使者を遣はされた、その口上は上方落着致さぬ間、景

勝との取合ひ、きつと無用たるべしとの事であつた」
「すると、政宗殿より仕掛けた戦争を、止に爲との御誼意でござりまする喃」と文三郎は熱心なりき。

「要りが手前合戦の習ひ、萬々一政宗敗北致すことあらば、上方御一戦の障害とも爲るからちや」と玄庵は解るやうに説き明しつゝ、「次で政宗は、先年太閤殿下より下された、大崎岩手澤の城に引き籠り罷りあるべしとの御沙汰があつた、政宗は斜ならず不本意に思はれたが、御上意とあるからは是非に及ばぬ、直ちに岩手澤へ引き返す外はない、然も白石から岩手澤まで二日路の道程がある、上杉勢の追撃を食ふも無益、一たん手に入れた白石を捨て行くも無念、所詮はこゝに留守居の者を置き、一は上杉勢に備へ、一は武士の意地を示したいとの心、これに由つて一老職片倉備中を召してさまざまに談合せられた、その果は家中の大剛濱田治部右衛門を残り置くことに決定する、この留守居、命懸ちや」

「面白い役目でござりまする」

「お身の目から、此の役目面白いと見ゆるぢやのう」

玄庵は文三郎が意外の詞を聞き咎めて、不審し氣に問ひ返しぬ。

「面白うござりまするな、外に援助もあるまじき小城に残つて、上杉殿大軍に備へ、別しては主人退却の道を安うする、懸命の大役、命惜う思ふ者の爲し得まじき事、此の役目に見出さるるは武士の譽れ、此上ない儀と心得ます」と文三郎は息を機ませ「而て濱田殿御返答、何様ござりましたな」

「云ひ残した、上杉の家中に、さる者ありと知られた小栗平八の堅めてあつた白石の城を、只一息に攻め取たは、今云ふ濱田治部の手柄であつた、この治部に留守居申し付けさせやう御談合ぢや」

「餘儀もない事、濱田殿天晴れ御器量と見えまする」

「其處で治部を政宗の前へ召された、備中代つて口上する、その意は、當白石こと其方手柄を以て、首尾好く御手に入つたを、此ま、捨て置き、岩手澤へ御退去あらせられんこと、武士の意地にあるまじき儀とあつて、留守居の者召し置かるゝ事に極つた、この役目、強つて備中勤め奉るべき旨、申し上げたれど、備中儀は萬事御相談の事共多きに由つて、一刻も御側を離れ奉ること協はぬ、近頃大儀の仕合なれど、其方を召し置かるゝ事に決つた、此方より再三所望する者は召し置かれずお目利を以て其方を残し置かるゝ段、淺からぬ仕合、早々お受け申

し上げとの言であつた、治部はまだ御受けを申し上げぬ、所を政宗が口を添へ、近頃無理な仕合、只命を貰ふのぢや、云ひ難ぬるが他に残し置く者もない、肯き入れて呉れるようと云つた

【四】

「濱田殿、その時」と文三郎は深く奥に入つて、「何様の御口上ござりました」

「其處で治部は御詮辱くは存するが、まだ東西も辨へぬ弱輩僕はおはす間、外に功者衆を置かせられ、すれば治部右衛門その手に付いて犬馬の勞を盡し申すと返答した、政宗も備中も口を揃へ、有理の遠慮とは聞くが、只其方一人と決定した、外へは御沙汰無き間、眞直に留守居致すやうと押し返し云ふを聞き、御決定とあるを兎角申し上げる要ござらぬ、御意次第に承はり申すてござるが、御存じの若輩、景勝殿大軍にて押し掛けらるゝを、無人にて勝利を得んこと存じも掛けず、されば此方より打て出て、何れかにて討死するか、又は城中にて腹切るか、二つの中一に出まじく覺悟申す、これにて苦しからずば、留守居お役目何よりも易うござると云ふた」

「天晴れ御返答、勇しいこととござります」と文三郎は腕の鳴る詞なりき。

「すると政宗が手を振て、江戸からの御沙汰、此方から取出で合戦する事堅く無用、大軍に取圍まれ、矢種の數を射盡さば、城中にて腹切り候らへ、すればこれにて事終みちやと云ひ聞けた、治部は騒がず、夫しきにて事終めば、何よりもお易い御用、只一圖に仕ると言上する、政宗云ふには、さて、無理なことを申し付けた、暇乞ひの盃せうと近侍の者に吩咐け、銚子土器を取り寄する、この時政宗、長うと云はぬ、三日の間持ち堪へ、さればさと後巻致さずる、愛宕八幡も御照覽、見殺しには決してせぬと、云つて盃をさし出した、治部の武士道、此時に光りが見えた、文三郎よく聞け、治部の優れて善い膽は、此時にきつと光つた、恭しく盃を受けて、只今のお詞合點參らぬ、後巻を爲されるが眞實なりや、此儀餘人に仰せ付けさせ、治部は罷り爲りませぬ、御奉公の爲め一命捨つべく、堅く覺悟致したを御不便に思召して、御方より上杉殿と取合せらるゝには、神君との御約束反古となつて、治部の忠義立ちませぬ、御方御一分立ちませぬ、殊には只今治部に命をくれよと仰せられ、治部謹んで御受け申したが偽りになります、後巻爲されらるゝ思召しあらせられば、此の御盃、此のまゝ御返し申し上げる外ござりませぬときつと云つた」

文三郎は感極まつて、太息をほつと吐く、外には寒竹の葉末を傳ふ露、さらさら〜と走る音、

内には玄庵が力ある聲鐵と憂て、

『片倉備中聞きかねてずつと出て、治部の口上有理ぢや、天下落着の間、其方は其方、此方は此方、生死に拘らず、不通の了見致しある、と云ひ聞けた、治部はこれを聞いて莞爾と笑ひ、さらば忝く御盃を戴きますると、云ひも敢ず大盃の餘滴も残らず飲み乾た、治部の骨、憂と鳴るてないか』

『合戦の要、只この覺悟にござりまする喃』

『決死の一念、鋼鐵よりも堅い、治部の詰居る中、景勝殿出馬なく事終つた。白石は小城でも、治部の膽大きかつた、濠は淺くても、屏は低くても、決死の一念城の内外に蔓る、敵に對して千萬騎ぢや』

玄庵は語り終りて、お多具の侑むる抹茶に咽喉を濡しき。

文三郎は無言、心の中に父の物語を靜かに味ふ。

【五】

『序にもう一つ話して聞かす、これも關ヶ原御陣の時、美濃大垣の城は福原左衛門の持てあつた、敵勢鋭く攻め寄せて、二の丸の橋へさんくんに鐵砲を打ちかける、左衛門の足輕大將南部

助之丞これを見、橋の外へ駈け出して、寄手の者を打ち拂うた、此時本丸から南部を打たせてはなるまい、加勢の者を出さうとあつたを、助之丞は聞いて、さあらば此の役目餘人に仰せ付けられ、我等を不便と思召す爲め、本丸を危うするは本意にあらず、只打捨て置かせられと云つて、城門の門を内から堅く鎖めさせ、故意と橋の外へ出て、寄手を惱ましたといふ話がある、前の濱田治部右衛門に劣らぬ大剛ぢや、聞き置いて後々の手本にせうぞ』

玄庵の昔話は益の絲の絶え間もなく引き出さるゝが如く無際涯なりき、五十年來記憶に存する事を、つぎつぎに思ひ出して、文三郎の心を鍛ふ槌ともし、又文三郎の心を導く燈火ともし、文三郎鉛ならば鐵槌を下すとも、良き劍とはなるまじきも、鋼鐵なりき、文三郎もし盲目ならば、百目蠟燭を點ずるとも、見えまじきを胸の底明かりき、この戲言らしき昔話、やがて文三郎の杖となり、土臺となり、指南車となりて彼の心を研き行くなりき。

林大學の門人として、聖經を講ずる間には、父の口によりて武士道の極意を授けられぬ、學問の譽を以て諸大名に近づきつゝ、彼は學者として世に立つ望みを持たざりき、彼の心は幼きより武道にありき、學問を土臺とせる正しき武士の道によりて、雄名を成さん考へなりき、父の希望に添はん考へなりき、同時に父祖の名を揚げ、天下を益せん考へなりき。

彼が兵學に思を潜めたるは、玄庵の昔話を聞きて後なりき、聖學より出て兵法の奥を究め、更に兵法の上に聖學の心を應用せんと希望は、彼に新しき血と新しき生命とを與へたり、十五の儒者は斯くして時機の來るを待ちぬ。

第七章 教訓

『一』

玄庵もし學問をもて、文三郎の生命とし、天にも地にもあるまじき一人の秘藏子を、學者として世に立たす心ならば、諸大名よりの申納に應じて、三五百石の知行取にしたるかも知れず、當時學問の棟梁として、公儀に仕へ奉る林大學頭すら、文三郎の學才には舌を卷くほどなれば、或は此上の大成を期し得らるまじきにもあらず、文三郎の才能と精力とを以てせば、師たる大學頭の上に立つまで出世し、上達すまじきにも限らず。

されど玄庵は不幸にして武士の胤なりき、先祖より流る、正しき武士の氣象は、我子をして章句讀誦の間に老いしむるを好まざりき、若氣の至りとは云ひながら、誤りて人を傷つけて、父母の地と相恩の主とを捨て、更に名譽ある兩刀を捨て、町醫者に隠れたる我身に代り、家の

名を起す者は、文三郎の他あるまじ、太平の世、劍戟を取りて功名を争ふ餘地なき上は、切めて武士道の大本を樹つべき兵學を學ばせて、儒學以外に一家を成させんと心切なりき。小畑勘兵衛景憲は兵學の大家なり、天が下に并ぶ者なき名譽を持ちて、大小名多くを門弟とす、その生活向は大名の如く、その勢力は國持城持の大名を末座につけて、得意に軍學を講義する、人間武士と生れて、千石以上の知行を得る能はずば、天下第一の兵學者となりて、大小名の上に立たせん。

文三郎も同じ心なりき。

玄庵は患者診察の暇あるごとに、古武士古英雄の事共を物語りて、文三郎の心を鍛ふ外、忠孝節義を土臺とする武士處世の道を説きて、文三郎の心を照らす燈火としつ、文三郎は片時の油断もなく、書を読み又劍術を講ず。

『文三郎、ちつと參れ』

玄庵は折から秋の半、庭の砌に清く匂ふ菊の花を下物に、濁酒を傾けながら呼び立てぬ、文三郎は聲に應じて出る。

『此方、君に事ふる道を知るか』

頭から被せかけて問ふ、文三郎の返答、一言を誤らば、手に持つ盃は忽ち彼が廣き前髪に向つて飛ばん。

「聊か心得居りまする」

文三郎の詞は明白なりき、且響きの物に應ずる如く迅速なりき。

「は、」と玄庵は詞を柔げて『存じ居ると…君に事ふる道存じ居ると…』

「心得違ひあらば、御論しござりませ」と文三郎は沈着いて『君に事ふるの道、只一筋、其本を正大にするに在りまする』

「お、その心を正大に…」と玄庵は我意を得たりとやうに頷き『その次第は喃』

「それを究め盡す事、忠俊の二つに過ぎませぬ、忠を以て勤むる時は、其事極めて正大とござります、一時に快からずとも、日を逐うて明白に爲り行くは、火を賭るよりもまだ明かてござります、忠はやがて私を離れた心、真直に正しい道を參る、忠の字を切り放す時、中心の二つとなる、中心はやがて正大、私の無い心は取りも直さず微塵雲の掛らぬ日と同様ござります」

「あらば俊とは』

「忠の裏はやがて俊、俊を以て事を成す時、皆己の爲を謀るが故に、その心利害の間へ落ちまする、然もこゝに利といふは、永久の謀でなく目先の利潤を申すてござります、心に己の利欲を抱かば自然中心を失つて、一方に傾き參る、苟にも中心を失ふ者、これやがて俊てござります、苟にも正大の二字に遠ざかる者、これやがて俊てござります、故に私は君に事ふるの道、其本を正大にするに在りと申します、不調法ござりませうか」
一語千斤の重みありき、玄庵は年齒に似ぬ我子の健氣なる詞を聞きて、片頬に笑の含まるゝを禁じ得ざりき。

【二】

玄庵の文三郎に對する態度は、宛ら刀鍛冶が、烈々たる鐵火を持ちて、錐鐵に對ふ如なりき、少しの曲りにてもあらば、直に一槌を下さんとの用意、微にても曇りあらば、直に鍛鍊の手を下さんと心構へ、年は老いても衰へぬ目の光り焔々と、文三郎の額を射りて、一語は一語と進み行く。

「君に事ふるの道、忠俊の二つに過ぎぬといふた、議論まづ乃公の心に入つた、そこで其の忠の意義ちやが、お身は文字の似す通り、忠は中心、正大の二字を失はぬを則とするやうに解い

た、それも有らう、忠の意は昔から種々に解かれてある、孔子は君子の君に事うるや、進んで
は忠を盡さんことを思ひ、退いては過ちを補はんことを思ふと曰はせ、孟子は難を君に責むる、
之を忠と云ふと説いて居る、君臣を使ふる禮を以てし、臣君に事ふるに忠を以てすとは、孔
子が魯の定公に答へ給ふたお語りや、忠信と云ひ、忠恕といふ、これ皆忠を主として處ちや、
程伯子は己に發して自ら盡すを忠と爲すと説き、程叔子は己に盡す之を忠と謂ふと説き、朱子
は己の心に盡して隠す無し、所謂忠なりと説いてある、その外諸家の説も澤山あるが、詮する
處は、己に盡すを忠と謂ふに歸して居る、こゝに己と云ふのは、お身の今云ふた正大の心を云
ふのちや、微塵偽りのない己の心を基として、それに有る限りを盡すのちや、然し、これは遠
き唐土の教、日本とは建國の根本に相違もある、日本の生を享けて、天照大神を頭に戴く者、
この教へをそのまゝに奉じてよいであらうか、凡人の惑ふ處はこゝちや、智慧あり、分別あり、
遠慮才學ある者は、中心是忠、苟にも中心を失ふ處なく、真直に一筋の道を行く、これが忠
の本體と諦めもつくであらうが、智慧足らず、事に詳かならぬ者は、時に百姓を虐げて、苛
酷の年貢を取り立て、時に神佛に一心を捧げて、主君の幸福を祈禱する、然もその間に一點の
私さへ挟ねば、忠の道自然徹すと思ひ入る、斯様な輩も、尙且忠臣と申すこと爲らうか嗚

『私にもその惑ひ無いてござりませぬ、最も一事に一事の忠、一物に一物の忠あれば、一概
に申すこと協ひませぬと、大道の忠に中らぬものは、假令その間に偽り無くとも、眞の忠とは
云はれまじき哉に心得、竊に思ひを潜め居りまする』
『火に二つはない、手に取れば皆熱い、水に二つは無い、手に掬べば皆冷たい、天地の理は只
一つ、二つあるは眞の理と云ふに足らぬ、忠の心二あらうか、よく思案爲』
『由て小忠は忠の中に入りませぬ、忠には君を利する心伴はねばなりませぬ、一身を捨て、一
家を捨て、有らゆる物事を打ち捨て、只管正大の道へと參る、君の行爲に曲りあらば、命を
捨て、も矯め直し奉る、加藤清正神君の徳に服して、江戸將軍家に臣禮を取りながら、年々
の参覲交替には必ず大阪のお城を過つて、秀頼公の御機嫌を伺ひ奉つたと申す、この心に一
點の私ござりませぬ、もし其事公儀の表沙汰とならば、死を以て辨解せん健氣な覺悟、歴々
見えてござりまする、清正一身を徳川殿に捧げながら、その心は尙大阪お城の大黒柱でござり
ました、東照神君の御英智を持たせられて、清正公が公明正大の心を以て、一圖に豊臣家を掩
ひ護らせたまふ間は、最後の御軍もあられてあつたといふ、一人の忠、よく幾年の太平を持ち
續けた、曇りなき日の力と、私なき人の忠と、その光は千萬歳の後々に輝きまする、父上の仰

せられた聚斂の臣と、迷信の家來と、例へば子を愛して甘い物のみを興うる親の心と同じござります、忠に似た不忠は、假しその間に私無くとも、君を悪道に導きます、慈悲に似た不慈悲は、却つてその子を病身兒に致します、正宗の大刀は結構でも、殺人の用に使うては、出刃庖丁と選ぶ所ないでござりまする』

『さらば如何にして、忠の實を得やうか喃』

『己を盡し物を究めて。然る後天地の中に到る、此外はござりませぬ』

『まづ夫ぢや、誰ても己の爲めに謀る時は、よく盡し、よく詳かにす、これは其間に眞實があるからぢや、然もそれが他の爲めに謀るとなると、十分の物がよく行つて八九分までに終る、これはその實が足らぬからぢや、己の爲に謀つて利と思ふ事は、朋友の思はくにも頓着せぬ、世間の義理にも背いて見るけれど、他の爲めとなると、朋友の思はくを慮り、世間の義理に鑑みて、進む所まで進み行かぬ、これが普通の人情ぢや、けれど君に事へ主に奉ずる時は、己に盡す心をもて、他目も觸れず眞實を盡さねばならぬ、聖人が己を盡すをもて、忠の本義を説かせられたはこの爲めぢや、假へ己を盡す心あつても、理を究めた事薄ければ、知る事足らず、致す可き事を詳かにすること能はざるが爲め、邪路に迷ひ入ること無いに限らぬ、故に常に

心を錬り、知を究めて、事理一致の忠に適はんことを心掛くる、されど我心を以て是非を定むる時は、意見區々で自らその道も違ふものであるから、天地の中を規矩とし則として、それに相當るべき事理を盡す、これが忠の根本ぢや、朱子は忠は天下大公の道なりと説いて居る、天下に用ひて恥る處なく、これを公にして國家を利し、萬民を安んずる處あれば、人の道自然に正しく、忠の意義立ち所に行はるゝ、故に忠は、上君に事へ、下人に交つて、その間に公明正大の志を用ふるにある、お身の説もまづ好いが、乃公の詞も捨てはならぬ、よく心爲

次の間にはお多具が茶を煎く爐扇の音静かなりき。

【III】

『忠の道は略解つた』と玄庵は漸くして『佞とは如何様なものであらう喃』

『才あれども其本暗く、唯身を立て、己に利あらんことのみを謀る、これが佞の常でござります』と、文三郎は直に答へぬ。

『進んでその意を聞かう、それにて云へ』

『聖人のお話に、佞人を遠ざけよ、とござります、焉ぞ佞を用ひて、人を禦ぐに口給を以てす、とござります、卑諂辨巧の臣は、その形忠に似てその實に格段の相違ござります、佞人に

も品々ござりますが、巧言令色して人を欺ばせ、主の氣を取り、媚び諂ふ、これを諛臣と申し、誰の目にもすぐ其非行を見ることが能きますので、人君害を引くこと少うござりまするも、上に對して行ひを正しくし、言を巧に用ひずして、内に君の御親愛の厚からんことのみを希ふ輩、これを奸臣と申しまする、諛臣は小智短才にして、其慾足り易けれど、佞奸邪曲の姦臣は、謀を深く偽を巧に致しますので、内心が急に知れませぬ、昔公孫弘が、漢の武帝に仕へた時、只管佞姦を先にして諫めを奉らず、善きも悪きも帝の御意に従ひ奉り、おのれの祿を省いて、朋友賓客に分ち與へ、更に東閣を開いて、賢人を招き集めるなど、行跡皆美しく、表面から無二の忠臣と見えました故、武帝終に惑はされて時の丞相に引き上げました、公孫弘丞相の位に上りながら、身を遜り、用を節し、常に布の衣服を纏うて、宮中へ出入致しました、それで人皆徳を稱へぬは無かつたと申しますが、實は賢人を識り、忠臣を遠ざけて、己の政を専にしやうと謀りました、これ等が姦臣の手本、本暗くして忠の本體を知らぬ故と心得まする、又手近い例が、彼の王莽でござります、始めは學を鍊り、賢者を集め、妻の衣も地に曳くまで長うせず、漸く膝を蔽ふに止め、只管民の心を得るやうに勤めながら、遂に終りを全うし得なんだ、己の利を内に根とし、強て名を求むる處あつたからでござります、され

ば佞は言行とも忠に似て、根ざす所は甚しく異つて居ります、根ざす處淺く思ひ入ればかりにて致す奉公は、害もなく益も無けれど、忠と佞とは深い根あつて、その根に大きな相違ござります、故に人の世に處する道、忠佞の大本を心得るにござります、君に忠を爲さんとする輩は、才あるも才無きも、老たるも若きも、大身も、小身も、忠に至る道を尋ねて、一圖にそこを進み行く、これやがて其理を究むるのでござります」
文三郎の返答は良き杵をもて、良き鐘を打つが如く、打てば必ず劉々の音を發しき、玄庵は苦り切つたる口に、濁酒の香ひ烈しきを味ひて、
『今一つ尋ぬる、人間死より大切なるは無く、武士は節に死するより大事はない、お身に此の心得あるかのう』
文三郎の答へせぬ間に、お多具は間の襖を開けて、煎茶の香り好きを汲み出しつ、
『もう止しになされませ、文三郎にも疲勞見えまする、殊にはこの若い身を捉へ、死ぬ時のお尋ね、御無用でござりませうに……まづ澁茶でも召させませ』

【四】

『お身などの知つた事か』と玄庵は底光りのする眼にお多具を白眼みて『お身などの慈愛が、

今云ふ根ざしの浅い慈悲となるのぢや」

お多具は何事に由らず、一言云ふごと、玄庵より頭ごなしに叱り付けらるゝが不平なりき。

「さりとして死ぬるなど…若い身に死ぬるなど、聞くも忌しうござります」

玄庵はお多具の詞を耳に掛けず乗り出して、

「文三郎、什麼とぢや、人間に生が大切なれば、死も亦大切なは云ふまでない、殊に節に死する事、武士の第一に心掛けねばならぬ儀ぢや、返答聞かう」

文三郎は膝の上に両手を置きたるのみ沈と考へぬ、忠義奸佞兩つの道には、深き覺悟を持ちたる身も、死の一儀には考へ付かてありき、玄庵は促す様に、

「生ある者は必ず死がある、一日生くる者は、一日の死、一年活くる者は、一年の死、千百年活くる者は、千百年の死を覺悟するが人の道ぢや、思案付かぬか」

「主と頼む方に身を委ぬるは、やがて臣の道でござります、急に臨み節に中つては、身を棄て死を輕んずるが、臣の義でござります。常に死を守る事を勉むる時は、家を忘れ私を顧みざるを以て本と致す、武士の生はやがて死、武士の死はやがて生でござります」
「家を忘るゝとは、さて如何な場合ぢやの」

「常住坐臥、只君あつて私ないを申します、國あつて家無いを申します、家を出て外へ參るも、内に居て事を營むも、豫め覺悟する處あつて、今の身も一時後に死ぬべきを用意するにござります、されば衣食住を輕く致して、財祿を積まず、人事を重うせず、今日唯今君命に由つて千里の遠きに鞭ち、一期の難儀に迫るとも、事を盡して後、從容として死の道に就き、決して心の遺ることをせぬ、此の用意肝要でござります、假令節に死ぬるとも、衾々を檢べられて、恥がましき事あらば、武士末代の恥となる、況して家祿財實妻子愛情に心残つて、死ぬべき事に死に難ぬる事あらば、武士の命は忽ち廢る、家を忘るゝと忘れぬとの差別、只この利那の呼吸にあると心得ます」

「さらば節に死ななが爲め、常に家を忘るゝ、了簡を大事と申すな」

「これが武士の勤むべき處、將た武士の本意たるべき儀と存じます、生の至つて重きと共に、死も又至つて重き者なれば、常によく究理辯解して、最後を全うせねばなりません、死して全道を守ると云ふは、此の義理の外あるまいと存じます」

文三郎は顔の色も變へず、又身をも動かさず、泰然として返答す、お多具の煎る茶の煙は白く襖の間に棚引く、玄庵は垂頭くのみ。

『常に節を知る者は、いかな場合にも勇氣を落とすことござりませぬ、家を忘れて内外の戒めを固く致しまする、朝廷に出て位に坐し、席に付くとも、堅く禮儀作法を守つて、舉止言語に不禮を致しませぬ、急を慎み、難を計り、變に處して取り亂した事致しませぬ、これも亦武士の勤むべき所、家を忘れ、私を顧みざる者、初めてよく其境に至るのでござります』

『變とは喃』

『鬭争喧嘩、皆變てござります、地震、雷火事、仇討、皆變てござります、或は他國の變、或は郭外の變、不意の戦争、不意の風雨、これも亦變てござります、此時に中つて、常々の勤め方薄く、心膽の録足らずば、必ず面の色を變へ、舉止を亂し、遂には詞の調子調はぬに至ります、面貌言語の常ならぬは、日頃學ぶ處厚からず、心正しからぬ故、心の正しからぬは智慧暗き故、智慧暗き時は、言ふ事と行ふ事と一つにならずして、まさかの時平生の覺悟の十分の一も調ひ難ぬる者でござります、由て節に死なんことを心掛ける者は、常に心を正しく致します、學問して膽魂を鍊ります、聖人の教を土臺にした武士道は、いかな變にも動く處ござりませぬ』

『五』

玄庵は文三郎の答ふる處を、默然として聞き居たるが、半は獨語するやうに、

『死は一度あつて二度無い、死を全うするは極めて大切ぢや、捨つる命は一つでも、その品には高下がある、同じ戰場に討死するも、流れ矢、流れ彈丸に命を落すは、戦死と云ふばかりで名譽が添はぬ、微傷が原で死を遂ぐるは、節に死ぬる中でない、多くの味方に魁して、他目も觸らず敵に薄る、假し敵の手に死ぬるとも、夫に由つて士氣を鼓舞し、主の名を揚ぐるを得ば、これ先登の死節、武士の本意此上ない、且は戦ひ利あらず引き揚ぐる、敵兵後より追ひかかる、多勢の退却不便と見た時、殿して食ひ止め、死を一途に究むるは、多くの兵を全うして、退却を容易うする、これも又節に死ぬるの道、さらば殿と魁とは守節の大義として、武士道の花と呼ばれる、或は主に代つて死し、主の名を犯して進み、或は主に馬を捧げて、おのれ徒歩の間に斃る、これ皆節に死ぬるのぢや、お身が先刻より説く所、まづ大凡の義理に協ふ、此事はこれに止めて、次には例を引いて尋ぬる』と徐に盃を擧げながら『織田右大臣御生害の後、信雄卿と羽柴筑前守との間、鋒楯に相成つた、そこで織田羽柴兩家から、使を以て池田勝入齋を招かれた、勝入齋は心が決まらぬ、織田家は主、羽柴殿は朋輩、何れを捨てても爲らぬので家老の片桐半右衛門と、伊木清兵衛と側近く呼んだ、兩家何れへ付くべきかを談合す』

る爲であつた、すると半右衛門は聲に應じて、日頃の御氣質にも似合せられぬ、信長公の御寵愛大磐石よりも重い、信雄公を救はせたまふは、義の當に然るべき儀と心得る旨を披露した、處が清兵衛は存じが違ふ、片桐殿は物に變通あるを知らせられぬ、羽柴殿は當代にての弓取、やがて天下の器量、主と頼ませらるゝ方他にない、速かに御味方なさせられ、さらば御子孫御長久にあらせられう、されどもし織田殿に御隨身あらせられれば、御身の破れ、次で御子孫御亡をも招かせられう、假へ義には就かせられても、御家滅びては何の甲斐もござりませぬと、憚る色もなく云つた、勝入齋は遂に清兵衛の詞に従つて、羽柴殿に味方したと申す、去就大事の處、お身は何れを理と心得る』

云ひ切つて文三郎をきつと見る、文三郎は少しも遲疑せず、

『義理は武士の命でござります、一家存亡を思ふに由て、武士の身が義理を捨つる、これは沙汰に及ばぬ儀、なれど家を興すと、義を立つるとは、利害に付き、道義に由る、其論よく究理せねばなりません、池田勝入齋が義を捨て、羽柴殿にお味方申したは、その間に深い仔細もあるべき儀、詳かに批判せうとならば、池田家の始終をよく知つた後で無うては協ひませぬ、由つてこれを臣道より申す、凡そ臣たるの道、利害につき、興亡を楯に論じては、その意味悉

く一身出世の沙汰に止まつて、上へ忠を盡し、身に義を守る大道の廢れに相成る、殊に利害興亡は、半人にかゝり、半天の命にかゝりござりまするで、假令人よく謀るとも、天の命に悖つてはなりませぬ、天の命は義理にあり、忠節にあるがゆる、事を糺し、理を究め、いよゝ忠勇義節に極まらば、この時は利害興亡を外にして、末代の名を清うする、天命冥助、爲す所道に協ひて、身に利あり、家の幸あらば此上の本意なく、身に利あらず、家亡るとも、人道を盡す上は、悲しむ所絶えてござりませぬ、よしや又天道御目曇らせて、不義不忠を罰したまふことなく、子孫長く繁昌するとも、世を益する處なくば、何の甲斐もござりませぬ、されば臣の君に仕ふる道、よく義理の間を勘辨せねばなりません、忠義については、先祖を思ひ家を思ひ、先祖と家については、子孫を思ひ身を思ふ、これが武士たる身の當然でござります、萬一身を立て家を興すを本として、上に仕へ、君に奉公するものあらば、天下は暗闇でござります、勝入齋は何の理議に由て、清兵衛の服に従いたか分りませぬ、只今父上仰の如ならば、半右衛門の申し條、武士の道に協ひあると心得まする』

文三郎は物としてよく辨へざるもなかりき、その返答は鋭鎌をもて草を刈るが如く明瞭なり

「臣の道は略分つた、大要お身の説く處に同意ぢや」と玄庵は鋭き目を文三郎の上に浴せて「君につぐは親ぢや、出てゝは忠義の士となり、入つては孝行の兒となるが人間の道の極みぢや、父子の道を聞かう」

「父子の道は天性でござります、主従の名あつて忠義の道自然に現はるゝが如く、父子あれば蜜の如き愛情自らこの間に萌しまする、天性とは強てするにあらず、自然に此の如く爲り行くてござります、日月の照り耀くも、雨雪の降り注ぐも、人の強て致すでなく自然でござります、殊に父子骨肉の親愛は、體を分ち血氣を等しくし、毛髮皮膚の末に至るまで、悉く同體でござりまするで、父の子を思ふ心、子の父を思ふ心、その間に絶えて厚薄ござりませぬ、天を飛ぶ鳥、地を走る獸、又は草葉に集く昆蟲の情を知らぬ者、夷狄土民の教を辨へぬ者、苟にも月日の下に生を得た者、何の故と申すてはなく、又何の求むる所も無く、愛惠の心を深く持ち誰が教へ、何を見習ふと云ふ差別もなく、父子の情自然に罩もる、これ即て天性、殊に人は萬物の靈、これを以て恩愛の深き事譬る方もなく、深うして且つ重いでござります」

「父子の間、さほどに重い關係あり、さほどに深い恩愛あつて、この間に違亂の事を生じ、父

は愛に溺れて、長幼の序を違へ、子は悖つて不孝の罪を犯し、遂に胡越讐敵の思ひを爲すに至る、そも〜此れ何の故ぢや」

玄庵の問は又下る、次の間のお多具も、良人と我子との間に、父子の關係の語り合さるゝを聞き、焔爐煽ぐ手も怠り勝に、おのづと耳を敬てられる。

「本源は唯一つ、凡夫の悲しさ、情欲を制する事、能き難ぬるからでござります、情欲とは申すまでもなく、飲食、財寶、金錢、田畑、私欲に因て願ひを立て望みを起す故、この間に好悪の念萌すに原きます、好悪の念盛んに起り、私欲の心随つて燃え立つ時は、父子の情も隔り、恩愛こゝに絶えて、天性を損ふに至る、早い例が幼少の時に於て、父子の恩情絶え隔ることござりませぬ、父子骨肉の間に争ひ起るは、この子成人情欲を恣にしやうとして内に隔りの情を作るに因ります、禽獸の類も、小さい間は、父子の情雲の如く、互に慈み愛し合へど、情欲發し長ずる頃、子を忘れ、父を忘れて、遂に骨肉相食むに至る、もし人として情欲を制せずば、禽獸にも及ばず口惜しいことでござります、されば情欲をよく制し、天性の自然なるまゝ、父に慈悲あり、子に孝あること、是父子の道と心得まする、大學に、人君と爲つては仁に止り、人臣となつては敬に止り、人子となつては孝に止り、人父と爲つては慈に止り、國人と交つて

は信に止る、と出て居ります、仁敬孝信の四は、君臣父子朋友の必ず勉めて止る處とござります

『さらばその孝の意義を尋ぬる、孝とは何ぢや』

『孝とは人の子の父母に事ふるの原でござります、聖人の語に、善く父母に事ふるを孝と曰ふとござります、善く事ふるとある、善くの一語に最も深い用意を感じます、少しも父母の心に異はず、情欲を極めさするが、善く事へ得たかと云ふと、左様ではござりませぬ、父母の求むる好物を獻らせて、口體を養ふのも、又善く事へるとは申されませぬ、善く事へるのは孝に止る、この止るといふが肝要でござります、己の意見に任せて、これが眞の孝行といふを突き止め、人の毀譽を本として爲るのは止るのぢやござりませぬ、眞に止ると申すのは、天地の誠を以て其理を究め、父子の意氣融然と相合し、火の如く聖人の本意に通ずる、孝の至善これに止ります、居る處莊ならざれば孝に非ざる也、君に事へて忠ならざれば孝に非ざる也、官に淫んで敬ならざれば孝に非ざる也、朋友に信ならざれば孝に非ざる也、戰陣に勇ならざれば孝に非ざる也と曾子も説いて居ります、人の父たる者、誰か我子の出世を願はぬ者ござりませう、其志を體認して、父母の志の如く身を立て道を行ひ、いつとなく父母を大道に導き入る、こ

れ子の孝とする所でござります、されば、孝經の初めにも、身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり、身を立て道を行ひ、名を後世に揚げ以て父母を顯はす、孝の終りなり、夫孝は親に事ふるに始まつて、君に事ふるに中し、身を立つるに終る、と説いてござります、此の如く始終の思入を深うして、父母に事へ志を立て、遂には父母を道に導き、君に事へては忠義奉公の眞を盡す、これ決して容易の事ぢやござりませぬ、されば我身を謹んで、第一には行ひを善くし、第二には身と心とを鍛ひ、一日の油斷もなく道を守らねば、望みの協ふ時節到來ござりませぬ、斯くして孝と忠とを成し得ば、一身自ら立て、心に求むる處なくとも、譽は後の世に輝き、子の勤めを盡して、父母の名を人々に知らする事成きます、是やがて孝の始終する處、孝に止ると申すのぢやござりませぬか』

『孝の意義、爾うもあらう、孝を行ふ所の教へ、簡短に則あらうか』

『孝の要、身を修めるを以て本と致します、身を修めるは、身を願ふるにござります、身を省みるは、自分を知るにござります、我體は父母の身を分けられた物、曾子の所謂、身者父母之遺體也とある心を忘れず、父母の遺體たる我身は、我身の欲、我心を充たす爲めに用ふべき道理ないと心得、随分大切に養つて、入らざる我を立てん爲め、身を亡すこと無きやう、彼の

巖壁の危きを顧みずして、命を失ふ事無きやう、酒色にまどひ、口體に奪はれ、四肢の安佚を好んで、病を醸す事なきやう、絶えず心を注ぐ事、成長の後、一心の自由を得るに至つても、我身は悉く父母の慈愛奉養に由つて今日を得た事を思ひ、最も深く養生する、さうして身體を健康にして、國家忠義の爲めに盡す、孝行の道此外にあるまじく心得まする』

『孝は何れほど貴い物ぢや、物に譬へて説き示すことならぬか』
『大舜は天下國家の貴きをも、父母の爲めには敝れた履の如く思ひ給はんと、孟子も説かせられてござります、世に天下國家ほど、貴きは二つとない、この貴き天下國家も、孝の爲めには敝履同然と仰せられた、天地廣しと雖も、孝行に優る實ありとは存じませぬ』

『うむ〜』と玄庵は頷る、やうに笑ひ『酒にも飽いた、これよ』と快げにお多具を呼んで『香り好い茶を給らう』

お多具も文三郎が孝道を説いて、残る處なき詞を聞き、胸の雲一時に晴れて、日影うらゝかに照り添ふ思ひ、

『文三郎も口が渴かう、一煎進ぜう、さて好い耳を聞かせたもつた』

玄庵が時として文三郎の智慧學問才能を試すに、斯くの如き手段を以てする中、文三郎の心

は鐵と鍊られき、獅子が千尺の斷崖より子を突き落して、剛臆を試むる間、この兒の身體、この子の心、百獸の王として山野の中を横行すべき鍛鍊を積み行くと同じなりき。

第八章 武士の胤

『一』

機會は來りぬ、天はこの天才の手を借りて兵學の基礎を定めんとする心切なりき。

寛永十三年丙子の年今日立ちて、千代田の城の御濠の松、豊年の兆を彩どり、見付々々の柳の枝に淺翠霞を籠むる、太平の壽、東叡山の森を出る百八の鐘の音に傳ひて、江戸の八百八町の隅々に初霞立たぬ隈もなかりき。

『年頭の御祝儀を申し述べます』

前髪姿初々しく、麻上下に蠟色鞆の大小横たへ、熊夜叉と名に呼ばれて、去年の秋より山鹿の家に召し遣はる、骨逞しき若徒を供に伴れて、町野長門守上屋敷の玄關前に立ちたるは、玄庵秘藏兒文三郎なりき。

『御丁寧によく來らせ、まづお上り召さ、恰ど殿様も御在宿ぢや』

金屏風に稚松の愛らしきを描きたる六枚屏風建て列ねて、その前に座を占めたる禮者受の家人は挨拶す、町野家と玄庵とは、奥州以來格別の間柄、五千石の旗本と、見る影もなき町醫者とは、その身分に雲泥の懸隔あれど、眞をもて交はる武士の間に、上下貴賤はあらざりき、殊に文三郎が少くして老成の風あると、黄色き口口に聖人の道を説きて、大人の中に立ち交る惻愴さには、深く幸和夫婦の心を引きて、二無き者と寵愛するなり、幸和は長門守の名。

『父玄庵も勿々御祝儀に罷り出まする筈、去年よりの風邪、まだ全快致しませぬで、文三郎儀、父の名代を兼ね、一つの口に、二人の口上を申し述べまする、宜きなにお執成、幾重にも願ひ上げ奉りまする』

ちよとしたる口上にも、大人らしき響きありてまづ人を感させぬ。

『殿様、甚うお待ちかねぢや、御遠慮に及び申さぬ、ずつと奥へ通り召さ』と家人は愛嬌よく次の間に向ひ『山鹿文三郎殿御入來ぢや御前披露あらせられ』

『應』と答へて、詰め合せた執次役は奥の間へ駈け行き、一人の茶坊主は徐に玄關へ立ち出づる。

『山鹿若先生喃、久しう御意得ぬ、御挨拶は追ての事、まづ此方へ來らせられ』

文三郎は此處に簡短く年頭の祝儀を述べて、直に立ち去る心なりしも、人々の志空にはならず、茶道に伴かれて奥へ通る、前に長門守前へ披露すべく駈け行きたる執次役は、文三郎を出迎ふべく、再び此方へ出て來れる處なりき。

『すぐ彼方へとござります、御前奥方御列座貴殿御入來を待たせられござります』

『恐れ入るのう』

『斯うござりませ』と執次役は前に立つ。

長き廊下を通り過ぎて、錠口より縁側にさし掛る、松を主と栽る籠みたる庭の寂得も云はれず、花を尋ねて飛び交ふ鶯の小鳴く聲、宛然に突羽根の響きと交る、何處ともなく聞こゆる留木の薫り、それに和ぐ炭の香、奥深く進むほどに、酒の匂ひ紛々と袖を撲ち來る。

『山鹿文三郎殿でござり申す』

お錠口にて立ち替りたる客會釋の老女は三の間より披露しぬ、床の正面に熊の皮の温かきを敷き、家の紋を蒔繪したる高膳に對ひて、悠然と座を占めたるは長門守なり、肥えて齋切りたる顔、胡麻鹽の頭、次には奥方、床の間には蓬萊島臺、松竹梅の掛物、風は寒けれど此の間のみ花は咲きて、美しき侍女二人、御酌に參り合ふ、十五以上の男はならぬ奥向は、何日見ても

花の錦なりき。

『二』

「文三郎よく参つた」と長門守は機嫌克く「先刻より待ち難ねあつた、ずつと進め」

文三郎は其處に稽きて、長門守夫婦の爲めに、初春の慶びを伸ぶること感歎なりき。

「暫時見ぬ間に、甚う大きう爲つたのう」と奥方も聲掛けぬ、年紀は三十八九、四十にやあらん、されど薄化粧したる面に、何處となく匂りは残りて、ふくやかなる鬢の光澤、昔の夢を裏みて見えき。

「初春の御慶申し述べまする」

文三郎は三の間に手を支きて、まづ御慶を申し述べぬ。

「汝も障りない氣、何より重疊ちや、玄庵は舊臘以來、重い風邪に患みあるといふ、ちと快い方か」と長門守は我子に對する如く温き聲、やがて奥方を見返りて「いかな林道春も、文三郎の才學には、舌を巻いて驚いた氣喃、當代の麒麟兒ちや」

「堀尾城州公から、莫大の御知行でお召しあつたを、御辭退申し上げたと喃、その際、五斗米には折らぬと見えた」

「父の存じ寄りもござりまするで……」と文三郎は優和しく「それにまだ御知行を戴くほど、これと定まつた伎倆もござりませぬ」

「近頃は廣田擔齋の家塾へも参るさうぢや、神道にも心掛あると見ゆる」

廣田擔齋は忌部流の神學者として、その名江戸市中に隠れなかりき。

「眞の盲目の垣覗きでござりまする」

「學問は廣く渡り置くが肝要ぢや、神道の次には佛法にも入り見やうぞ、柳生飛騨守など旨と禪に参る氣ぢや」

「私事もその心掛ござりまするで、近々に傳言を求め、何れかの大徳へ入門致す心ござりまする」

「やはり夫に氣付きあるか、流石ぢや喃」と長門守は機嫌克く「そなた將來を祝うて、屠蘇一獻参る、芽出度く受け」

「有難うござりまする」

朱塗に松竹梅の詩繪したる三組盃は、美しき小姓の手して、文三郎の前へ運ばれぬ、文三郎は恭しく戴く。

「儒學、神道、禪學、和學、何れに優劣はないが、そなたも武士の子、玄庵只今は醫道に隠れて、道服の袖に、燃ゆるやうな覇氣は包みあるが、彼も前々は伊勢龜山の御家人、太刀取つては後れを取つた事のない身ぢや、惣左衛門死去、山鹿の血を傳へたはお身ばかり、ちと兵學を遣て見ぬか、武士の魂はこれから湧き出る、そなた左程の器量を持つて、一代を町醫に果す心もあるまい、玄庵望みも、お身を町醫者の後繼には致したう無いと云ひ居る」

文三郎の耳は自然に傾く。

「私にもその心ござります、當時軍法の達人と申すは、まづ北條安房守様でござりませうな」

「房州殿は當時の花方ぢや、なれど其上に小畑勘兵衛殿あるを忘れてはならぬ、甲州流の軍法を傳へて、武田家傳來の秘を探り、遂に一流を編み出したは小畑殿ぢや」

「小畑勘兵衛様一流の元祖、安房守様もその御門人と承ります、小畑様一流の長者として、私如き不束兒を、御門人に加へさせ給はりませうかな」

「そなた入門の心あるか」

「不肖ながら武士の胤、軍學兵法の端を伺ひ置かずば、武士の血享けた甲斐もないでござります」

「善くぞ云ひつる、さらば我等手引きせう、小畑殿も房州殿も、我等恰ど入懇ぢや」
「辱く心得まする」

【三】

長門守は益興に乗り來る。

「小畑勘兵衛は武田家の軍法を残りなく傳へて居る、甲斐武田家譜代の家來ぢや」

「台徳院様お側近く召させられた事ござりまする氣喃」

「いかにも喃、武田勝頼天目山の露と消えたは、勘兵衛四歳の時と云ふ、東照神君深く勘兵衛の身上を憐ませて、台徳院殿お小姓に爲させられたが、例の氣性、幼年ながら人の下風に付くを悦ばず、いかにしても志を立てんとして、佛門に歸依、天下の犬徳に爲らうともしたさうぢやが、胸に燃える功名の念を、墨染の法衣に裏む事は能きかねる、由つて更に兵法の奥義を探り、劍刀の術を傳へ、これなればと見込のついた時、お暇を願うて諸國修行に罷り出た、お身よりは一歳年長、年齢は十六歳であつたと云ふ、關ヶ原御陣の時は、第一の先鋒井伊掃部頭殿手に屬いて、拔群の功名、大阪冬御陣の時は、加賀宰相殿お先手を蒙つて、真田の城を攻め立てた、その後大阪方の招きに應じ、大野修理に抱へられたも、志を二にして、武士の本義を忘れた

ではない、板倉防州殿計ひ、松平隠岐守殿と牒合せ、敵方の内情を探らう爲めちや、されば見やれ、お上於かせられても、當時の軍功を思召せばこそ、知行千五百石を宛はせて、御使番に擧げさせられた、お役義はお使番でも、軍學指南の大家、只今の門人だけでも、三千餘人と申すでないか、上は歴々の大名衆より、下は御家人陪臣の輩まで、假にも武を以て世に立つもの、勘兵衛の門を潜らぬ者は、殆ど一人もあるまじいぞ、甲州流の軍法、勘兵衛に由つて傳へられ、安房守に由て大成せられた、この二人は御治世の寶、まさかの時は幾十門の大砲にも優つて、どれ程お味方の用を爲すかも知れぬ、お身もし兵學に心あらば、まづ勘兵衛の門を窺ひ、然る後、安房守の教を享け、お身の才能を以てすれば、忽ちにして道が得らるゝ』

文三郎は醉るが如くに聞く。

『勘兵衛門弟の者、年頭祝儀に參らうも知れぬ、序に話して置かうかの』

『父も異存あるまじう心得ます、御前お手引に由て、幸ひに小畑殿御門人とならば私本懐此上もござりませぬ』

文三郎はきつと云ふ、彼の功名に餘念なき心は、忽にして堅き綱に結び付きぬ。

『當時お身の才名を知らぬ者あるまいて、愈々入門と事極らば、勘兵衛もさぞ悦ばう』と長門

守は太き眉を動かして、『一獻進ぜう、登龍門の首途を祝はうて、快く受けうぞ』

文三郎は酒に於ても大人なりき、彼の生涯は總に於て小供の時代あらざりき。

『有難く頂戴致します』

奥方は前より黙して二人の話聞き居たるが、此時思ひ付いた様に、

『文三郎身上、お局様へお頼み申しては何うでござりませう喃、お局様はお世話好きでござりまするで、此々と理を語らば、きとお骨折下されませう、堀尾城州公二百石にてお召抱への御沙汰あらせられたを、立庵木で鼻括つた御挨拶申し上げた氣、立身出世、當時お局様のお袖に縫るが何よりの捷徑ござります』

女ながらも、文三郎の才を愛する心切なりき、文三郎の才の世に出てんことを願ふこと切なり。

『爾うちやのう』と長門守も頷き『お身の使手にて參らば、お局様も空に思召しあるまい、まだ前髪、お奥へも參らるゝ、此道を辿つて見ぬか』

四

奥方の口よりお局様と云ふは、當將軍お乳母殿とて勢力千代田の城内を壓する春日局をさす

なりき、春日局は明智日向守光秀の妹の子にて、齋藤内藏助利三の娘なれば、町田長門守の奥方には現在の叔母に當る、この奥方は實に内藏助の長子、齋藤伊豆守利光の娘なりき。利光父子は惟任將軍の末路を彩る、深き花なりき、殊に利光は弓矢取りて、古武士の風を傳へたる豪傑、主家没落の後はくらくと髮剃りこぼちて、名を立本と改めても、父を思ふ心大堰川の水底よりも深く、利三の屍を盗み出して、人知れず立派に葬りたる後、主家の縁を辿りて細川忠興の家を憑り、豊臣家の赦を受けて、加藤清正の手に屬し、朝鮮の役に大功を樹て、加藤家滅亡の後、春日局の縁に頼りて、知行五千石を給はり、旗下に召出されて、その子伊豆守利直、今も青山の屋敷に住む、長門守が主家を離れて、天下直參の旗下となりたるも、春日局の助力に由る、春日局は將軍家大奥に絶大の勢力あるのみならず、大名旗下に臨みて、又絶大の勢力あり、されば長門守が奥方の縁に由りて、局の息を掛けらるゝは、その地位の大磐石を似すなりき、奥方が兎もすれば局風を吹かせて、出入の人々に自慢の鼻を蠢かすは此の爲めなりき。

『下世話にも、立ち寄らば大樹の陰といふ、文三郎もお局様のお手に絶つては何うある情』と奥方は得意顔に再び云ひぬ。

『恐れながら文三郎は武士でござります、女人御手に引き上げられて、出世の道を得やうとは心得ませぬ』

春日局に手引きせんと云ひ出して、此れほど露骨に、此ほど忌々しき返事聞きたる事なき奥方は、美しき面上に唾せられたる如く驚き憤りて、險しき目を文三郎に向けたりき。

『何と云ふぞの』

『不束ながら文三郎は男、此の心、此の腕、此の魂をもて、己を知らざる御方のお手に屬き、奉公の忠を竭さうとは存じあれど、因縁を便り、高貴のお手に縋り、立身の道を得る心ござりませぬで、奥方様御芳心は、有難く御受け申し上げますも、只今のお詞には従ひませぬ、悪からず思召し下さりませ』

奥方は怪しからず口を歪めて、尙も何か云はんとするを、長門守は遮つて、

『さすがに玄庵の胤ほどある、好い心掛ぢや、お局様はこれ限りにして、勘兵衛を紹介せう、今の詞を忘れず、自力に由つて男にならうぞ』

『お情を仇に致しませぬ、小畑先生御門に入らば、懸命に修業、それを以て一身を立てます、平にお手引きござりませ』

奥方は再び何の挨拶もなかりき、掌の中の珠を砕かれたるが如く、蒼き顔して、他の一方を見詰め居たりき。

第九章 熊 夜 叉

『一』

文三郎の口より、去年よりの風邪、まだ全快せず、名代として年頭御祝儀申し上ぐる旨を觸れさせながら、玄庵は今日の元日を酒の香の間に送りぬ、風邪持つ病人としては餘りに顔の色好かりき、片手に薬湯を扱ふ身としては、餘りに酒の料多かりき。

前の膳には鹽鯛、昆布、さまざまの下物を置いて、おのれは朱塗の大盃を傾くるなりき、次の間には妻のお多具、精悍しく酒の爛する。

『もそつと熱くしやうぞ、微温うては酒の味が致さぬ』

『好い加減になされては何うでござります、左様に召上らせては、又お頭痛が致しませうぞ』

『酒は百薬の長ぢや、これさへ行れば萬病が忽ち癒ゆる』玄庵は朱を塗たほどに丹き顔を、烈たる火桶の上に置いて『文三郎甚う遅い』

『旦那様さほどの御容體でもござりませぬ、これなれば自身御祝儀にお越しあらせられれば好うござりまするを…』

『元日勿々、斯様な老人参るよりは、若い者遣はす方が、却て禮儀に懐ひある、文三郎年は行かぬが乃公よりは器用人ぢや』

玄庵は文三郎が自慢なりき、文三郎を家々を差し出して、童に似ぬその大器量が自慢したかりき。

『町野の御前、文三郎が御最負てござります』

『おい、奥方も大の御最負、何日参つても文三郎をお問ひなされぬ事がない』

『他に可愛がられる性質と見えます』

『才を愛られるのぢや、鳳凰の小さいのは誰も載せて見たいから喃』

『文三郎何になるでござりませう』

『大名さ』

玄庵の目はぎろりと輝く。

『おほ、お多具はあるまじき事を聞きたるやうに『夢にてござりまするか』』

「馬鹿を申せ、夢ではない眞實ぢや、文三郎を千石取にして、御先祖のお名を揚げ奉る、これが乃公の願ひぢや」

「美事に爲るでござりませうか」

「夫が爲らば、町醫者で生涯を送らせる、戦國の十萬石は難くも無いが、太平の世の千石は容易うも得られぬで喃」

「町野の御前は五千石でござります」

「それぢやもの、文三郎伎倆なら、千石は廉いものぢや」玄庵はいよく得意「斯う云た處、文三郎ほどの伎倆人他にない」

「私は幸福女でござります」

「今に大名の御母儀様と呼ばれうぞ」

「願はしい事でござります」

「その割にしてもう一銚子所望せう」

「又お酒でござりまするか」

「文三郎は千石、乃公は一斗、天地の差別ぢや、は、は、は、」家も動くほどに笑つて「一斗が十

日もあらうぞ」

「どうして五日持ちませぬ」

「まだ元氣が衰へぬ、この腕で……」と二の腕を丁と拍て「もう一度人が斬りたい」

「左様な事は仰せられぬ者でござります」

「お前は爾う云ふが、二胴土壇拂ひの業物で、怨みある奴を大袈裟に切り捨てたほど、心持の好いことはないぞ、本國で乃公の讒口云ふた奴を一刀に切つて捨てた、恰ど正月のことであつた、刃の冴えに野の梅が一輪散つて、遠くに見ゆる神路山から、凍るやうな月魄が皓々と照て来た、思うても腕が陰る」

玄庵は酒の酔に乗ずること、此の恐ろしき昔語を爲るが例なりき、お多具その度ごとに顔を盛めぬ。

『二』

「もし、大體になされませ、他が聞いてはなりません、その敵の血縁の者、何處に居まいに限りませぬ」

「誰が居ても協はぬ、眞實を申すのぢや」云ひかけて、けろりと眞面目になつて「熊夜又は在

らぬか」

「文三郎の供してござります」

「彼奴何れの出生であつたか喃」

「尾州者と聞いてござりました」

「尾州者：：は、深く考へて『尾州者と云うてあるか喃、乃公の耳には伊勢訛あるやうに聞こゆるが喃』

「文三郎の氣に入つてはござりまするが、油断ならぬ者、殊さら昔譚お謹みなされませ、壁に耳ござります、花に針ござります」

「お多具は良人の身を思ふこと切なりき、良人の手に掛りて、無惨の最後を遂げたる人の子孫、もし生き残りあらば何とかならん、良人の將來、我子の將來、當家の將來に就いて、不祥の事を醸し來る事あるまじきかと、只夫をのみ懸念するなりき。」

「壁に耳あらば、乃公の手に刃がある、年は老たが、骨は鐵ぢや、左様な事、氣に掛けること無いぞ」

「文三郎に出世させねばなりません、曇りのある鏡は、良い方の御料には爲りませぬ」

「文三郎は千石取ぢや、千石が一斗缺けても仕官させぬぞ」

「若先生お歸りてござります」

「玄關に人の言る聲類なり、お多具は耳を敬てながら、

「文三郎歸つたらしうござります、御酒をお止めなされませ、彼兒の前で餘りお過し遊ばすは、好い事ぢやござりませぬ」

「さらば一時切り上げ、惣左衛門は左程でも無かつたが、文三郎には氣が置ける、彼の眼は炯々と善く光るぞ」

「私も彼には遠慮致します、自分の育てた小供ながら、頭を壓へられる如に思ひます」

「文三郎は少年時代より、親を壓する重量を持ちき、親にも憚らるゝ眼の光りを持ちき、二人の談話半へ悠々と入り來る。」

「只今歸りました」

「玄庵は盃を納めたる時なりき。」

「お歸りか、案外早かつた、町野の御前、お漁りもあらせられぬか」

「御前奥方、御健祥で在らせられます」

「お目通り得て参つたか」

「結構な御年酒を戴いてござります」

「御機嫌で在らせと見ゆる、論語の御講釋でも致したか」

「今日は御所望あらせませぬ」

「何か變つたお物語でもあつたか」

「思はぬ益を得てござります、御前お蔭で小畑勘兵衛殿へお近付になつてござります」

「ほ、」と玄庵は満足氣に「小畑殿は甲州流軍學の泰斗ぢや」

「私も軍學に志さうと存じます」

「そりや良からう、而て入門の手續したか」

「お父様御意を伺つて後と存じ、今日は只お目見得を得たばかりござります」

「私に異存はない、學問と飯は詰め込めるだけ詰め込んで、徐々と消化すが要ぢや、思ひ付いた事は何でも致せ」と一も二もなく同意しつゝ、

「小畑殿、お屋敷へお越しあつたか」

「折好く年頭御祝儀に在らせ、思ひ掛けず御意を得たも、不思議御縁と存じます」

「真個のう」玄庵は酔を見せまじく真面目になつて「熊夜又は」

「召し伴れて歸りました」

「油断めさるな、彼の面構へ、普通の様には見え申さぬ」

「お多具は心付ける様に云ふ。」

『三』

文三郎は氣も付かず語り續ける。

「夫に奥方から、お局様へ御推舉のお噂もござりました、お局様お袖に絶れば、自然出世も早

いとやうの……」

「え」玄庵は聞き咎めぬ「お局様とは」

「二位のお局でござります、上様御乳母でござります」

「お局様は奥方肉身の叔母上で在らせられる、玄庵は熟柿臭き息を吐きぬ」町野御前、今日の

御身分で在らせられるも、必竟はお局様のお蔭ぢや」

「御意にござります」お多具も亦春日局の勢力を認めずには居られざりき。

「町野御前ばかりではない、お局様お息の下に身を置いて國土を安穩に持ち居る者、幾人とも

數知れぬ、何萬石、何十萬石の大名でも、お局の意に忤ると、靦面に祟りがある、されば便宜を求め、縁を便つて、お局のお袖に絶り、立身の道を得やうとする者、大名旗下皆なそれぢや、奥方よく、此方を御最負あらせられこそ、進んでお紹介下されうとある、そのお志を無にする馬鹿があるか、口に付いた飯粒を拂ひ落すとはお身の事ぢや」

「されど文三郎は武士でござります」

「如何な名鐘も海底、深く沈みあつては用を爲さぬ、引き上げる綱が無うては世に現はれぬ、お身は何か、海底深く沈みある鐘が、音を立て、鳴ると思ふか」

「文三郎、海底に沈みあるとは心得ませぬ」

「孔明も用ふる人無うては、藁葺屋根の下に老いる、正宗の名刀も、使ふ者なくてはやがて錆行く、町醫者の倅が、千石以上の知行を得るは容易でない、お身は海底深く沈みある鐘ぢや、取り上ぐる綱無うては世に出られぬ、それにはお局ほど屈竟な方ない、寶の山の入口にさし掛つて、急に道を轉たも同様、奥方左様の思召しあらば、何故お手に絶り付かぬ」

「文三郎は男、女人御手に絶つて、立身の道を得やうとは思ひませぬ」

「案内者ぢや、人は選まぬ」玄庵は釣り上げた大魚を取り逃したほどに悔みて、とろんとせる目に妻のお多具を見返りぬ「今聞く通りぢや、奥方切角の思召しを反古にするは恐れ多い、お身から一應願ひ参れ」

「文三郎にも似合はぬ事てござります、立ち寄らば大樹の陰と申すを、忘れたと見えませぬ」

「奥様はお慈悲深く在らせられる、文三郎罪科をお詫び、此方から願ひ上げたりや、お聞き届けなされるに相違ない、早々致せ」

玄庵は我子の出世を願ふに急なりき、文三郎を千石取の大名とする爲めには、如何なる手段をも厭はぬ心なりき、お多具も同意、慌てたるやうにして、

「只今より参ります、文三郎も同道しやう」

「いえ」文三郎は石の如く堅かりき「私は参りませぬ」

「何故ぢや」と玄庵は聞き咎めて「お身は出世を願はぬか」

「譽ある出世を願ひます、女人の手に抱かれて、高い階梯は昇りたくござりませぬ」

「女人と云ふな、お局様は男優りぢや、上様御母代までも勤めさせて、畏れ多くも後水尾天皇から春日局の御名さへ賜はらせた、その御袖に絶り奉るは、武士としての譽ぢや」

「假し夫にしても、文三郎は望みませぬ」

「否と云ふか」

「いかにも御意、文三郎は術をもて知行が得たうござります、槍頭の功に由て、千石の身上に爲りたく心得ます」

文三郎は總てに於て、父に優りたる器量ありき、自若として云ひ終る。

【四】

「お身のその術での」

文三郎が己の言葉を用ひぬに由りて、玄庵は満々たる不平なりき、不平の前には日頃の深き寵愛も光りなかりき。

「文三郎、人は頼みませぬ、只この心を頼みまする」

「お、お、玄庵はその聲を噛むやうに『美事その心で…』」

「平伏して憐れを乞ふは、乞巧の所業ござります、假にも武士の端にある文三郎は採りませぬ」

「さらば聞く、お局様御威勢よりも、お身の術が優れると云ふちや喃」

「人の威勢は借りませぬ、微な光りも、身から出たは清いものでござります」

お多具は一たん中腰になりたるをとんと落して、

「お屋敷へは参らぬの」

「お頼みには参りませぬ」

「あなた、何う致しませう喃」

玄庵はほつと息しぬ、我子ながら兎もすると、文三郎の爲に詢られる事多きを知りぬ、年齒の老いたる爲もあるべし、生命ある中に文三郎が千石取の大身になりたるを見たと急る故もあるべし、彼は餘りに事を急ぐこと急なりき、まだ前髪付けたる童を、千石取の身上にするは、太平の世枯木に華さかすより難しかるべきを思はず、只管に幸福の綱を手繰らんとて氣を揉みぬ、堀尾山城守が二三百石を知行せんと云ひしを、大きな口上に謝絶しながら、一方に春日局を假りて、立身の道を得んとするは、餘りに矛盾せる様なれど、玄庵の心中を知るものは怪しま。

「爾うさのう」

手綱を引き絞められたる彼は、漸く我に返つて斯く答へぬ、假し春日局が當時に於ける大勢方家としても、その袖の頭に縫らば、如何なる望みも遂げ得らるゝにしても、女の縁を頼りて、

立身の道に就くことの面白からぬは、文三郎の詞無くとも、早く心付くべき筈なり。

『好い便手ではござりますが、文三郎の申す言も、強ち無理ではござりませぬ喃』

お多具も二の足を踏み出しぬ。

『さればとて何日までも町醫師の倅では置きたくない、千石の知行を待て居ても、天から牡丹餅の降る事はあるまいぞ』

『私はまだ十五歳でござります』

『甘味い物は宵に食へちや、お局は大分のお年、何日が知れぬわ』

玄庵は尙ほ春日局を思ひ切り難ねき、この好い綱を手繰らずでは、これに代る好き便手あるまじきを懸念するなり。

『私は今日小畑先生へお約束をして参りました』文三郎は心憎きほど沈着き『明日より軍學兵法に志ます』

『それは好いが、お局様はよい綱ぢやでの』

『他の綱は借りませぬ、他の綱はいかに強うても、自分の綱つた綱ほどはござりませぬ』

『さらばお身、手づから好い綱を綱ふと云ふか喃』

『きと綱ひまする』

『兎角云ふ間に日が暮る、乃公は早や老年ぢや』

『心の日は暮れませぬ、お父様お望みを無駄にする事致しませぬ』

『お局様お袖に縫らず、一かどの武士になるか』

『御念に及びませぬ』

『奥方お情を反古にして、萬々一人に後れを取る事あると、男の一分地に落ちやうぞ』

『大丈夫に思召せ、星は落ちることあつても、月の落ちる事ござりませぬ』

『二度は云はぬ、お身の器量に任せる、父を慍悒漢にするな』玄庵は文三郎の膝に置いて居た手を取つて『千石ぢや、可いか、この手で千石ぢや』

『その下は掴みませぬ』

『お、』と玄庵は手を放して『夫にて安堵、多具も氣を揉むには及ばぬ』

【五】

縁の外に晝影美はしく照つて繪の如き、梅が枝に鶯の羽風ばつと立つ、お多具はそれに驚かされて、障子細く引き開け見れば、路次の樹陰に竹箒持ちて、立ち居れるは熊夜叉なりき。

「熊夜叉か」と思はず聲かけ「それに何してあつた喃」
「へ」と此方を振り向きたる目の光り、顔の色お多具の胸を刺す如くぞ見えし「お掃除して居りまする」

「誰ぢや、え」玄庵は腰を伸して、障子の間から庭を見遣る。

「熊夜叉でござります」お多具は白き眼にじろく見て「熊夜叉がお庭の掃除を致し居るのでござります」

「熊夜叉か、は、」玄庵の面は酒に温りて燃ゆるが如くなりき「例も仔細あり氣ぢや、近う來う」

熊夜叉は鏡の如くよく光る眼を伏せて、枝折戸の中に蹲まりぬ、肥えたる腕、節くれ立ちたる骨、額の刀疵、眉の間に蟠る殺氣、見るから普通の者にはあらざりき。

「今日は好い春でござります」

「今日に限らぬ、酒の香の續く間、いつの日も好い春ぢや」

文三郎は思ひ出したる如く手を支きぬ。

「御機嫌克くあらせられ、私は御本を讀んで參ります」

「好い様に致せ」玄庵は機嫌よく「その手に千石…可いか千石…」

「心得てござります、お局様お手に絶るを止めて、自分の心に絶る用意の學問致します」

文三郎はお多具にも挨拶、玄庵にも挨拶、好む書物に親しむべく、その身の居間へ入り去りき。

「羞明い日が入つた如ぢや」玄庵は後を見送つて「も少し飲まう、正月にはちと足りぬ」

「又御酒でござりまするか喃」

「左様に顔を盛めるな、一年一度の元日、今日は流石に患者も參らぬ、倒れるまで飲んでくれう、熊夜叉も相致せ」

「下郎は少しも下さりませぬ」

「秘すな、些は行けう」と玄庵ははきく「立たぬお多具を睨んで「早う持たぬか」

「只今差し上げます」と不性無性に杯盤を運び來る、熊夜叉は元の處に蹲りたる儘なりき。

「燗は熱う致せ、微温い酒を飲むは、白痴を相手に話すると同様ぢや」

「もう一銚子に爲されませ、餘り澤山召し喫るはお體の爲めになりませぬ」

「身體なんぞ何うでも好い、文三郎は千石、乃公は一斗、いや一斗が五日もある、のう熊夜

「又」玄庵はいよ／＼機嫌、青磁の盃にお多具の酌する熱い燗を浪々受けて、一口唇を湿ほしながら『よく話すが、熱い燗をぐつと一口、心のまゝに引きかけた處は、傳來の一刀をすらりと抜いて、恨みある奴を大袈裟に切り捨てたと同じ様な心持ちぢや』

「爾うござりまするか」熊夜又は額越に玄庵を瞥りと見て、すぐ元の伏目となりき。

「一度は聞かうと存じあつたが、お身の出生は何れぢや喃」
好物の豆腐汁にも飽いて、玄庵は六尺の大男を酒の下物に爲ん心なり。

「尾州でござります」
「尾州は何處ぢや」
「枇杷島でござります」
「枇杷島喃」玄庵は聞き咎めて『すると名古屋のお城下喃』

「名古屋の北一里ほど、八百屋の件でござります」
大地に支いた兩手の頭を、鈍き日はちり／＼照る。

『六』
「偽言ぢや／＼」玄庵は大聲に叫ぶ。

「神懸け眞實、主を偽る口持ちませぬ」熊夜又は眞面目なりき。

「いや」と玄庵は抑へるやうに『尾州であるまい、伊勢あらう』

「思ひ掛けぬ事、何とて左様の…」
「祕すな、争はれぬ訛がある、他國の事は存ぜぬが、伊勢と奥州とは、詞訛ですぐ知れる」

「すると旦那様も、やはり伊勢の御出生でござりまするか」
熊夜又は隙さず問ひぬ、玄庵の詞の切れるを待て、隙さず問ひ返したる間、髪一筋を容れる餘地もなく早急なりき。

「乃公か」と酒に纏れる舌の頭に唇を嘗めつ『さ、何處であらう』

「もし」とお多具ほ意注ける如に袖を引いて『要らぬ事を仰せなさるものぢやござりませぬ』
「乃公は奥州ぢやが、熊夜又は伊勢の生れぢや喃」

「旦那様にも伊勢訛がござります」熊夜又は當も知れぬ海の底を探る如き語調にて問ひ掛けぬ。
「果して爾うぢや、乃公の詞に伊勢訛あるを、氣注くから其方も伊勢に相違ない、龜山あたりか、それとも津か」と玄庵は疊みかけぬ。

「旦那様お目利き、生れは伊勢、成長たは尾張でござります」

「爾うあらう」と改りたる眼に睨んで『も一つ尋ぬる、其方は向ふ疵を持つて居るの』
「へえ」と熊夜叉は思はず額の疵を抑へて『お恥しうござります』
「何とて恥る事あらう、向ふ疵は武士の表看板ぢや、篤と見せ』
「お恕しなされませ、刀疵ぢやござりませぬ、名古屋の町を通行する折から、軒の瓦が落掛つたのでござります』

「其方は主を盲目にする喃、これ此の目が鏡、刀疵を見損じ致さぬ、どれく見せ」と春風冷たき縁端へ膝行り出て、熊夜叉を手招きしぬ、お多具は酔ふと縮なき口に、恐ろしき禍を引き起すことあるまじきかと、氣遣ひたれど甲斐なかりき。

「お恕しなされませ、假令刀疵に致しても、下郎の面には寶の持ち腐りてござります』

「玉は誰の手にあつても玉ぢや、町野長門守様、覚えある者をお召抱、推舉の道ないでもない、殊にお身は知るまいが、長州公奥方は當時飛ぶ鳥を落すお局様の御縁家ぢや、文三郎の代り、お身を紹介仔細ない、まづ見せ、疵の性來から見届ける』

玄庵は莞爾ともせず云ふ、熊夜叉はじりく寄る、爾うして額越に玄庵の顔を幾度も見て、心に何をか思案する體なりき。

「どれく」と玄庵は次第に近く膝行り寄る熊夜叉の額口を沈と見たるが「これが瓦の撲疵か、刀も刀も、業物で切た疵ぢや』

「お目利きに恐れ入る他ござりませぬ』

熊夜叉は大地に兩手を支き居たりき。

「此の疵には面白い來歴あらう、秘さず話せ』

「お恥しうござります、旦那様の前で、申し上げる様な話ござりませぬ』

「一かどの手錬者、恨みを置めて切つた疵ぢや、圖星であらう』

熊夜叉は故意と驚きたる如く顔を擡げぬ、玄庵はその目許を一目見て、反向る如に後へ寄りしが、詞は無く元の間へ入つて、障子をはたと閉め切りぬ、その時の目の色、その時の顔の光澤。

【七】

「良人何う遊ばした」お多具は玄庵の様の普通ならぬに驚きぬ、伴れ添うてより三十年近く起臥を共にすれど、今日の今ほど、玄庵の慌てたるを見たるはあらざりき。

「あなた、御氣分でも悪いのでござらぬか喃』

玄庵は勉めて心を沈着けんとする如く、詞なかりき。

「何かござつたか、はて」眉を擧めつゝ、玄庵の鎖したる障子に手を掛けぬ。

「そこ開けまい、外には鬼が居る」

「え、鬼が居ると喃」

「外には夜叉が居る」

「え、夜叉がおますると……」

「鬼よりも、夜叉よりも、もつと恐ろしいものが居る、破魔弓持て來、射て呉れう」

玄庵は漸く我に返つて、奥の方を見透しぬ。

「鬼よりも、夜叉よりも、……彼の夜叉よりも……」お多具は思ひ當る事あるが如く、細目に

障子を引き開けて、梅薫る庭面を見透しぬ、庭には鈍き曇影照りて、春とは云へど凍る如き風

吹き滿ちる間、熊夜叉は默然と大地に兩手を支き居たりき「お、熊夜叉か」

「旦那様、急病にても……」

「いや、爾うは無い」とお多具は何氣なく「そなた其處に居たちやまで……」

「旦那様お召し、御用待て居りまする」

「甚う寒い、御用あらば呼ぶ、彼方へ去らう」

「寒いを厭ひませぬ、下郎の骨は鐵よりも硬うござりまする」

玄庵は恐い物見る如き眼に、お多具の背後からさし覗いて、今更の様に熊夜叉を視入りたり

「さりとて 旦那様、屠蘇機嫌、何事を仰せ遊ばすかも知れぬ、早御用とでもあるまい、其

處退らう」

「は」と熊夜叉は起ち上る、その袂の頭に、梅が香は溢れ掛りぬ。

「酒の下物には、ちと骨が硬過ぎた」玄庵は獨語つやうに「熊夜叉待たう」

「まだ御用でも」一たん起ちたるが又躊躇りて元の如く手を支きぬ。

「も一度、顔を擡げて見やう」

「は」熊夜叉は又顔を擡げぬ、膏切つた半面に夕陽照つて、眼の色物凄きまでに輝く。

玄庵は膝立てたま、沈と見る、お多具の肩は心の驚きを支ふる杖なりき。

「あなた、熊夜叉にまだ御用ござりまするか」

お多具は振返つて問ふ。

「用は無いが……」と又獨語「爾うも見えぬ、氣の迷ひであつたか喃」

「向疵と申すばかりで、旦那様お目に止まった、古疵もこれで浮びます」

「何處やら見覚えある氣ぢや、其方腹からの下郎ぢやあるまい」

「親は枇杷島の青物商人ござります」

「眞實か」

「二度お草履探らぬ法もござります、父の名は齋屋三左衛門、その伴は下郎の事でござります」

「齋屋三十郎、腹からの商人か」

「舌は紅うござります」

「なれど今、伊勢の生れと云ふた、その時の身は喃」

「伊勢にも青草商ふ町人はござります、町人にも足あれば、尾張へ移轉らぬに限りませぬ、伊勢と尾張は海一重を距つばかりでござります」

「玄庵は思はず安堵の胸を撫でぬ。」

「下郎に似ぬ、面白い返答、盃呉れうに、縁端へ腰掛けう」

「土色になりたる顔へ、血の色次第に復り来る。」

「八」

熊夜又は泰山の動く如く身を起して、その縁端に腰掛けぬ、玄庵は何が爲めに、この圓く臉

厚き目を斯くまでに恐ろしく見たるか、我ながら不審に堪へざりき、例の青磁の盃を取り上

げて、

「一盃遣れ、酌して取らさう」

「勿體無うござります」熊夜又は割合に沈着きて「それに下郎、少しも酒を戴きませぬ」

「平生は兎も角、今日は元日、一獻參れ、好い爛ぢや」

「旦那様お手づからお酌下さる、勿體ない事、冥加恐ろしうござります」

熊夜又は盃を押戴く、玄庵はすり寄つて酌しつ、又しても恐ろしき物見るやうに、熊夜

又をさし覗きて、人には云はれぬ深き思ひに耽り居たり。

「やはり爾うぢや、やはり何處かに似た處がある、氣の迷ひばかりではない、そなた眞實町人

か」

「お武家様にお氣の迷ひなどある理はござりませぬ、人々申すを承はるに、旦那様以前は歴

熊夜叉は盃の滴を切つて、玄庵に酬しながら云ふ。
玄庵は軽く頷き、

「今は匙持つ手に、二胴土壇拂ひの太刀持つたことあるわさ」

「爾うござりまする氣、然も町野様は眞のお主様でも在らせられぬと、これも人の噂に聞いた事ござります」

「主は一人、町野公は恩人ぢや」

「すると旦那のお主様は、何れにお越してござります」

玄庵の目は電の如く光りぬ。

「そなた不思議なことを聞くのう、乃公の主が何人であらうと、そなたの存じた事ない筈ぢや」

「へえ」熊夜叉は頭を掻いて「只承はつたばかりでござります」

「重ねて聞くな、そなたが向疵の來歴を語らぬと同じ意、昔譚は時に由る、又相手にも由る」

「さらば下郎、向疵の來歴申し上げたりや、旦那様も三昔前を語らせられるでござりまする喃」

「時に由る、又相手に由る」玄庵は同じ言を繰返す他詞なかりき。

「今日の時はなりませぬか」

「まづ爲らぬ喃」

「下郎のお相手では協ひませぬか」

「ちと不足ぢや、は、と笑つて「今一獻參らうぞ」

「もう下さりませぬ、胸の底に焰燃えて、心を焼くかと疑はれまする」

「酒の爲めに 一盃の酒の爲めに」

「宥させられ、此の苦しみを、お庭の風に吹き拂うて參ります」

「早や喃」

「堪へられませぬ、此の胸が、嗚呼此の胸が」熊夜叉は我と我胸のあたりを掻きむしり、我と我腕を叩いて、草履の底の憂る如く足踏み鳴らし「お暇戴きまする」云ふ間に姿は枝折戸の陰へ去りぬ。

玄庵は片手に盃を持ちたるまゝ、瞬きもせずその背後姿を見送りぬ。

「あなた、良人」お多具は良人の袖を引きたれど答へなきに「あなたと申すを、何う遊ばしました」

「恐ろしい者ぢや、恐ろしい熊ぢや」

「氣味悪うござります、斯様の者召し使はずとももの事、お暇遣はされませ」

「争はれぬは血筋の縁ぢや、彼の目許…疵の痕見せと云ふた時、額越しに此方を見た彼の鋭

い眼の色が、さて…」

お多具はちつと寄り添ひぬ。

「果いて良人の…」

「酷く似てある」

「常々お噂なさせられる、二胴土壇拂ひの…その尖頭の錆となつた…」

「仔細あり氣ぢや」

「恐ろしうござります」お多具は身を慄はせぬ「左様な者、氣味悪うござります」

「氣味悪いとて、高の知れた…」

「油斷大敵、お暇出させられ」

「いや」玄庵は大きく宇宙を呑むやうに「暇出すまい」

「何故でござります」

「虎は放つものぢやない、熊の首には鐵鎖が肝要ぢや」

「なれど時には飼犬も手を噛みます」

「手は噛んでも鐵は噛まぬ、此の腕」と丁々打つて「鐵ぢや、鋼鐵ぢや」

「只懸念ござります」

「思ひ掛けぬ事にかゝつて、切角飲んだ酒が覺めた、熱いを所望ぢや」

「まだ喫りまするか」

「此の口の動く限りは…」と云ひ切つて「熊夜叉め、二三升の酒を水にした、憎い奴、此のま

ま置かうか」

お多具は銚子持つて次に立つ、庭に鶯の小鳴き絶えて、文三郎の居間に、横笛の音嚙々起

りぬ、讀書に倦みて、日頃好めるを玩ぶにやあらん。

玄庵は聞くともなく聞く、襖越しに酒の香、それに和りて早咲の水仙の薫り。

元日も早や暮れんとす。

第十章 元 服

『一』

鶯は梅に宿りぬ、虎は嶋を負ひぬ、十五の神童は兵學家の泰斗小畑勘兵衛景憲に知られて、その門弟子となりぬ、勘兵衛の學統を繼いで、出藍の譽れを得たる北條安房守氏長は、彼の指導者として將た後見なりき。

— 一元 —

九歳の時、林大學兄弟の門に入り、十三歳の時、堀尾城州より、二百石の知行を宛はれんとしたるまで、學問の上達を見たる文三郎は、一面に於て兵學に刻苦すべき運命に際會したり、子供にして大人、町醫者の子にして天下の志を抱ける彼は、兵學書生としても拔群の出精を見たりき、當時學問の風、大名旗本の間に吹き満ち、我一にその奥を極めて、一世に卓越せんと望むものは、星の如く林家の門に集まり、又雲の如く小畑北條兩家の講堂に馳せたりき、武をもて出世すべき時代は過ぎ、刀は鞘に、弓は袋に納まる太平の御世に遭ひたる人々は、身分の高下なく、皆な學問をもて地歩を占めんと志しき、小畑家の門人、三千餘人と註さる。三千餘人の門人中には、大々名の主もあるべく、小名旗本の子弟もあるべく、年齢三十を過ぎて、尙學問に志を捨てぬもあり、幾年間の刻苦、漸くにこの堂を窺ふもあり、同じ門弟子の中にも、事情は千差萬別なりき、身分に高下の品々ありき。然も文三郎はこの多くの門人中に於て、忽ち頭角を顯はしき、年齢はまだ十五、身分は町醫

者の子、日ごと若黨の熊夜叉を伴れて、兀々と通學す、されど旂檀は嫩葉より香りあり、半年を経て、早く人々の目を牽き、一年を経て、師たる景憲を驚かすこと屢次ありき。彼が元服の儀式を終りたるはその年(寛永十三年)十二月の中旬なりき、名を高祐(一に義矩)、字を子敬と命け、通稱を甚五左衛門と改めぬ、素行の號は此時より用ひたり、亦の號因(又は隱に作る)山は程經て選みたる者なり。

元服はたゞその儀式のみ、姿を男にしたるのみ、前髪を剃りこぼちたるのみ、文三郎より甚五左衛門になりたるのみ、今まで無かりし高祐の名に、子敬の字とを命けたるのみ、彼は數年前より一人前の男なりき、あらず一人前の男をも凌ぐべき智慧才覺勇氣學問を持ちたりき。

兄總左衛門の跡目を相續せる者、その妻、兄の後家、町野長門守及びその用人よりは、文三郎の元服を壽きて、祝ひの品々を贈りたれど、文三郎には無意味なりき。

「一人前の男となつては、今までよりも學問を勵まねばならぬぞ、他に背後指さ、れぬ用心をせねばならぬぞ、剃り落した前髪の跡から、光りを見せる覺悟せねばならぬぞ」

玄庵は見返すほど立派になりし我兒の顔を見ながら云ひぬ、彼の心に小供の時代なかりし如く、彼の體軀にも又童と見るべき時代なかりき、年は漸く十五歳なれど、身長は五尺二三寸

— 一元 —

もありき、骨逞しく筋肉太りて、二十歳前後の大人見る程偉大かりき。

『酒を持って、酒を持って、倅の成人した姿見て 盃傾けるは、月花の美しいを見て、玉の觴舉ぐるよりも優つて居る、芽出度い折柄、熱燭にして持ち参れ』

『二』

玄庵は亦酒なりき。今日は玄關も休みなりき、如何な急病人ありても、代脈にて取り計ひ置くべき旨は、前の日より命じ置きぬ、玄庵は如何に酔ふとも管ひなかりき、如何に酔ふとも、肱枕して眠れば濟むべし。

下男下女へは祝儀の酒代と、午時過ぎて後の休息とを與へられぬ、山鹿の一家へは早く正月元日の來りたる如くなりき、逢ふ人、觸るゝ人、莞爾に笑を含みて、

『お芽出度いこととござります、真に〜お芽出度いこととござります』と口々に云ふ。

されど熊夜叉のみは、苦味を嘗めたる如き面地なりき、家内の人悉く『お芽出度し〜』と芽出度される間に、熊夜叉は苦り切て物も云はざりき、梅櫻咲き満てる下、松一樹拗ねて立てるが如くなりき。

『芽出度い人は芽出度からうも、芽出度からぬ人は芽出度うない、今日の風は正月の風見るや

うに萬遍なく吹き渡らぬ、只一所ちや、一所のみを撫で、吹く』

休息を云ひ渡されし日、殊更家の用に骨を折るも、人々の思はく如何あらん、面白からぬ祝ひ酒は咽喉へ通らず、さればとて部屋に籠りて、世に亡き父母の位牌に仕ふるも、面當がましく好んで爲すべき事にはあらず。

熊夜叉は日南好き縁側に、膝を抱きて蹲踞り居たり、疎に結はれたる垣に添ひ、一もと椿咲き誇る、その間を美しき小禽飛び交ひて、彼方此方小鳴き渡る愛らしさ、繪にも書かれず、歌にも讀まれず、曇りある胸の底に、一筋の光りの見する如く思はれて、恍惚と見入る時。

『其時さ、武士の魂、白刃の匂ひを渡るのは其時さ』

彼方の一間に、玄庵の酔ひしれたる聲は聞こえぬ、熊夜叉は耳を敬てぬ。

『お静かになされませ、誰が聞くか分りませぬ』お多具が心付けるをよくも聞かず。

『何がさ、遠慮は要らぬさ、倅も芽出度う男になる、前髪の昨日さへ、二百石の旦那が付いた、それに比べたりや、男になつて千石、今に買手付かうぞ、乃公も寄る年、何日まで匙の柄搦んで、浮世の波に漾うても居られぬ、倅が千石の身上極れば、樂隠居の生涯、酒と打死、生きて用のない身、望み人あらば使はして問へない、望み人あらばは、』と大笑ひして『何日に

ても遣はすさ』

『良人、酔うて在らせられる、ちとお考へなされませ、何日かも壁に耳のあるを見させられたでござりませぬか』

『その壁の耳よう聞け、倅も元服、一人前の男になつた、山鹿の家名は惣左衛門の後がつぎ、玄庵の魂は甚五左衛門芽出度う繼ぐ、今は要らぬ命、何日にも遣はす』故意と聲を張り上げて云ひたりき。

『お父様御所用あらせられずとも、私の爲には大切な此命、誰へも遣られませぬ』父の酒の座に坐りて、幾度も銚子の替へ乾さるゝを見て居たる甚五左衛門は、此時詞重く云ひぬ。

『は、』玄庵は又笑ひぬ『お主、其處に居たか氣づかつてあつた、この命、大切といふたの』何よりも大切な寶、御壽命千萬年と祈る處、無用の物など、思ひ設けぬお詞、私、迷惑に心得まする』

『ぢやが此命、父の物ではない、又お主の物でも無い、他に持主が極つてある』御口上呑み込みませぬ、御主意は』

甚五左衛門はきつと問ふ。

【III】

『今も云ふた、魂が音立て、白刃の上を渡る時、乃公の初陣は十一の時であつた、彼の關ヶ原の御陣、天下分目の戦争、見せたくもあつた、敵は名に負ふ大阪の精兵ぢや、お主の爲めには祖父上、乃公の爲めには父、山鹿左近次郎高政公、その時四十三の男盛りで在らせられた、黒革絨の鎧、革毛の駒、大身の槍を提げさせられて、群る敵の真中央へ…想うても身が慄立つ、世を隔つる様には思ふが、勇しいお姿、歴々と眼に映る、お、彼の時、あ、彼の時…』さも感慨に堪へぬ如く、雙の腕を擦りて云ふ、甚五左衛門は沈と聞く、お多具は他に聞かる事もやと心を揉みて、良人の口に蓋したくは思へど詮を無き、一たび得意の境に入りては、滾滾と玉走り出る泉の如く、盡くる事なきが玄庵の物語なり。

『乃公も父上のお供して、花々しい合戦をした、十一の小腕に、敵の首一個を得て、殿様御感に預つた時の嬉しさ、彼の時の嬉しさ、今の子供は夢にだも知るまい、喃、今の子供は…』と甚五左衛門を見返りしが『詩作り、歌詠んで師匠から御褒美の詞を戴く、その時も嬉しからう、ぢやが初陣の合戦に、敵の首級を手を提げて、殿様實験に供へた時の心持、さながら此の』

身に廻生えて、天高く飛ぶ様ぢや、お主は小畑殿御門下、軍學兵法を研究めあるが、不憫や與義を實際に試むる時あるまい、眞に寶の持腐り、太平の御代も結構ぢやが、英氣の捨て所ないに困る喃、は、大口開いて笑ふ唇へ、冷めた酒を滾々注ぐ。

『お父様左様に仰せられますが、兵學の妙用自ら其道がござります、亂世には亂世の法、太平の御代には太平の用に供ふべき手術ござります』甚五左衛門は只一句、玄庵自慢の口上に點を打ちぬ。

『そりや有らうさ、太平の代にも劍はある、太平の代にも武士の道は廢れぬ、軍學兵法の用ひ所自然に立ちてもあらうさ、ぢやが鐵をも切るべき名刀の鞘を拂つて、憎しと思ふ大奸物の首を刎ねる、男の魂音立て、白刃の上を走るはこの時ぢや、白蛇忽ち電光に觸れて、腕の牙えに眞雙となる、血煙さつと立つ間に、恨ある六尺の體は枯木の如く倒れて、その上を秋風吹く、亡骸の側に立ち、一刀の血を拭ふ時、東の天白く照つて、名月煌々と昇り來る、世界は水の如く清く、天は一面の碧、この時の心お主は知るまい』

『知る理ござりませぬ、知りたくも心得ませぬ』甚五左衛門は果して大人なり『太平に生れた幸福は、それよりもまだ深うござります』

『お主達で、人の世の深い味知られうか、商人は千萬金を一攫にする樂み、武士と生れては、一刀に君側の奸を切て、義の爲に身を捨て、家を捨つる、祖先墳墓の地は去るとも、一心を捧げて忠義の誠を遂げ終る、此に越した樂み無い、何日も話すが、寛永二年の事であつた、殿様御側に大奸物蔓つて…』

玄庵は又此事に話し及ぶなりき、お多具は曾て熊夜叉の異き素振を見たるより、彼のぎろ／＼と善く光る眼を恐るゝこと深かりき、酔に乗じて昔譚する良人の口輕きを恐るゝ事殊に深かりき、熊夜叉の眼光尋常ならず、熊夜叉の舉動尋常ならず、表面に忠義を見せかけて、裏面に刃を裏む仕方、自然に現はる。良人が二胴土壇拂ひの名刀を閃かして、口癖の如に仰せらるゝ君側の奸を拂はせられた、その君側の奸物の…彼は骨肉…骨肉の子…孫…もしや、しや…と平生心配の胸を抱くなりき。

【四】

『あなた、お話は好い加減に爲されませ、お銚子が程好い様に温つてござります』お多具は良人の心を酒の上に引き付けて、その口を塞がんとしたりき。

『さらば…』と盃を突き出して、黄金色好きを浪々注がせ『もう一獻致すかな』

「私はお舌の頭の廻らぬまで、御酒をさし上げたいと思ひます」

「平生にないこと云ふの、甚五左衛門は男になり、お身の心は佛になつた、は、は、は」と受けたる酒をぐつと飲んで「呀、甘露、この滑りて又話せる、今の續き物語らう」

「お父様そのお話は從來に幾度も承り、よく存じごさります」

「夫れにしてからが聞け、梅の花は何日見ても香り、武邊物語りは何日聞いても爲になる」玄庵は又語り續けぬ「その奸物がさ、舌の頭に毒を持つて、一家中の讒言を致すわさ、乃公の刃は前後十數人の敵を切て、お上お役にも立つて居るが、奸物の舌頭は、忠義の御家來五六人を殺して、御家中に毒を流す、怒し難い奴、それに又乃公の事まで……」

「御酒召されませ、續いて二三杯、熱いのを召されませ」

「まあさ、焦々云ふな、それでは酒の味が失せるわさ、今日は甚五左衛門男になつた祝儀、以後の心得となる昔譚して聞かせる、これを傳へる知行もなく、相續さする寶もない家、此の魂傳來ちや、眞直に承繼がば、やがて幾千石の種、やがて天下の器となる、止めるな」

「その祝儀の日ちやに由つて、私はお止め申します、二胴の名刀も、初陣のお手柄も、申さば血腥いお話、御祝儀の席には面白うござりませぬ、又の事になされませ」

「甚う止める喃、は、は、は」玄庵は又しても笑顔なりき「甚五左衛門は何ぞ思ふな」

「お父様御機嫌に任せられませ、私お下物になるを厭ひませぬ」

「ほ、下物になる、お主が下物になる、その心で聞くか」

「鯛の御馳走も、三五度は飽きます」

「それがお主が下物になるか、は、は、は」といよ／＼機嫌「大事の件を酒の下物にするは望まぬ、將來は千石取りの大身になる件、下物にしてやぶりたくない、さらば止さう」

「他のお話を爲されませ、大阪御陣のお手柄話し爲されませ」

「もう云はぬ、手柄と云うて、高々十二三の首取つたばかりちや」

「亂世には敵の首、太平には武士の魂、お父様は二胴のお手柄、私は學問の筋合、聊か思ひ付いた事ござります、長い目に御覽じませ」

甚五左衛門は得意なりき。

「何れほど長い目も持たう、然し例の千石を忘れるな、五斗米に腰を折るは、餓死するよりもまだ耻辱ちや」

「お父様お望みは千石、私の望みは日本國、ちと大さうござります」

「え、日本國、日本國と云ふた、そりや何といふ口上、將軍家お膝元、氣を付けぬと首が飛ばうぞ」玄庵は惘れ顔なり。

【五】

「お氣遣ひなされますな、私の申すは、六十餘州の津々浦々に、私の精神を廣めるのでござります、武士の道を弘通して、幾十萬の大名家に、私の學問を打ち込むのでござります」まことに甚五左衛門の心は、宇宙の大を呑む概あり、今日男になりたる口に、天が下の大名武家をして悉く我が門下たらしめんと廣言しぬ。

「お主には協はぬ、お主の膽魂には敵はぬ、これまでちや〜」

玄庵は遂に降服しぬ、降服して其處に横たはりぬ。

日は暮れかけて、庭の樹々に雀の啼く音騒がしかりき。南の縁に腰かけて、熱心に耳を澄ましたる熊夜叉は、此の時又みたる手を解きて、徐かに縁を離れたり。

「果いて…果いて…ちやが彼の方よりは、若先生の…少しでも深い苦痛見するが、恨みを散らす極意とあるとき、寢刃、寢刃、」

第十一章 戀か劍か

【一】

甚五左衛門の學問は日と共に進みぬ、他の諸門人は師に依りて傳へらる、だけの進みなれど、甚五左衛門は一寸の教へを受けて、一尺の進歩を見たり、彼の他に卓絶せる精力は、日と云はず夜と云はず、大河の低きに從く如く、滔々として學問の上に注ぎぬ、勘兵衛の塾に入つてより、未だ漸く三歳を過ぎたるのみなれど、五年、八年、十年を修業せる兄弟子を越えて、第一番の地位に坐りぬ、北條安房守教場にては、甚五左衛門實に代稽古の頭目たりき、安房守出座なくとも、甚五左衛門名代の席に着きて、軍書、兵學を講義する時、一道の光輝は血を流したるやうに紅き口唇より漏れぬ、甚五左衛門の出座ある時、安房守の教場は殊に勝れて光明を認めたりき。

甚五左衛門が外出する時、熊夜叉は必ず其の供に立つ、甚五左衛門は熊夜叉の無口にして氣骨あるを愛したりき、熊夜叉はむくつけき頬髯多くある男なれど、その骨には一種の氣高き香りを裹む如く見えたりき、眼の光り鋭く、時には人の心を射貫くやうに輝けど、時には虎をも

馴付くべき優しき影を喜ぶか。

其の年の秋も早暮れんとし、廣くもなき庭に一本二本錦を織し紅葉も、夜半の嵐に吹き散らされて、宇宙に迷ふ人の魂、礫となつて落ち来るが如く窓を打つ、夜は更けたれど月は未だ出でず、雲間に燦く星の幾許か、如何なる秘密を看破らば置くまじとやうに輝く、静かな天地と寂しき空との間を、西風颯々と吹きて汚れたる氣を掃はんとす、この時其の身の居間に端坐して、一穗の燈火を掻き立て、軍書に眼を曝し居れるは年も心も、大人となり行く甚五左衛門なり。

彼れは興の續く限り書を読み倦まざりき、幾夜にても、何日にても、心と身體の續く間は、軍書の上に目を放たず、其の文字の底に潜める故人の魂を究めずば止むまじき態度を以て、一心に向上の心を養ひぬ、彼れの學問の勝て進歩せるは、その天稟にも由るべけれど、又彼れの類似なき精力これを助け成すにてありき、夜なく晝なき彼れは、時間の上に於ても他の人の幾層倍を勉學し、他の人が一年にて成し得ることは、甚五左衛門、半年、三月、一月の間に成し遂げぬ、甚五左衛門三年の修業は深き軍學の堂奥を窺ふことを得べき。

同じ小畑勘兵衛の門人に近藤三郎右衛門ありき、甚五左衛門より八九歳の年長にして、屈指の高弟なりき、甚五左衛門代稽古の地位を得るに及び、此の二人門下の雙壁と稱へられぬ、甚五左衛門も玉、三郎右衛門も玉、同じく美しき玉なれど、三郎右衛門は殊に圓き玉なりき、甚五左衛門はそれに向つて其の光りを争はんとしぬ。上野東叡山の鐘の音、冷たく水を渡り来る、甚五左衛門は漸く一巻の讀み終つて、静かに巻を閉ぢながら、火鉢にかけたる鐵瓶の白湯を、手許にありし黒樂の茶碗に注がんとする時、庭の外に落葉を踏む足音、蛩然として聞えたり、甚五左衛門は片手に茶碗を持ちたるまゝ、きつと耳を聳てぬ、而も其の足音は、忍び〜に其の身の居間の縁端近く寄りんとす。油断なるまじく、白湯を飲み終つて、一刀を引寄せぬ、夜盗か、意趣あるものか、何れにて一討と身を構へぬ、お父様平生仰せらるゝ、白刃の上に魂の渡る快さ、この一太刀に試し見ん好奇心火の如く燃え立ちぬ。

『誰ぢや』

戸外には落葉一し切して、其の間を静かなる足音は縫ひ来る。

甚五左衛門は堪へかねて一聲叫びぬ、されど答へなかりき、落葉の音のみ頻りに續いて、足音はピタリと止まりぬ。

愈よ曲者と、甚五左衛門は息を詰めて、一刀の目釘を濕す、暫くすると再び、

「誰ぢや、それへ参つたは何者ぢや」と聲かけぬ、足音は高く響き、竹縁先へ兩手を支へたる氣配、續いて、

「下郎でござります、若先生まだお目覺めてござりまするか」

言ふ聲は熊夜叉なりき、甚五左衛門は沈着いて、

「熊夜叉か」

「御意」

「何用あつて参つた、早や丑満を過ぎてあらう」

「お願いあつて参上、無禮の罪を免させられ」

「願ひとは……」

甚五左衛門は一刀を掲げたまゝ、端近く立ち出で、兩戸一枚くり開ける、闇深く風寒き庭の内蕭然として、目に遮るものぞなき、屋内より照る燈火の前に、兩手を縁端にかけながら見上

げたる目の中、ぎろ／＼光りぬ、甚五左衛門は嚴として、

「委細を云へ、聞かう」

「免させられ、生命にかけて願ひ奉ることとござります」

熊夜叉は踏石の上に蹲踞りぬ。

「唯譯を聞かう、眞直に言へ」

嚴かなる聲、溪水の岩に衝つて碎くるが如く響きたりき。

「お叱りござりまするな、今宵これへ忍び参るまでに、幾許心を苦しめたか分りませぬ」

「無用のこと聞くに及ばぬ、眞直に願ひの筋を申せ」

熊夜叉は暫く言葉なく垂頭れたるが、思ひ切つて、

「戀でござります」

「戀とな」

「道ならぬ戀でござります、この胸の闇に一點の光りを投げさせられ」

甚五左衛門は片手に刀の鞘を握つて、片手を膝に身を構へぬ、而も無言、熊夜叉は語を繼ぐ。

「この胸の闇、品川の海より深うござります、この深い闇に光明を投げさせらるゝは、若先生

のお情に待つ外ござりませぬ、下郎は迷うてござります、及ばぬ戀に迷うて、千仞の谷深く陥つてござります、月を見ても其の光りが心を照らしませぬ、花を見ても其の香りが身に染みませぬ、下郎の月は若先生お胸にござります、下郎の花は若先生お手にござります、この願ひお協へ下さりませ」

思ひがけぬことを聞きながら、甚五左衛門は端然と坐りたるまゝなりき。

『萬一下郎の願ひ協はずば、そのお手に持たせらるゝお刀で、この胸を刺貫し下さりませ、深き闇に裏まれて、阿容々々生きてあるよりは、若先生お手にかゝつて殺さるゝが優てござります』言ひ切つて又續けて『思ひ出せば五歳も前のことござります、御縁あつて御當家へ御奉公に上がつてから、この思ひ片時も絶えたことござりませぬ、斯う申しては如何なれど、先生にも奥様にも、心合はぬこと度々あつたてござります、若し若先生在しませぬは、下郎は一年の辛抱も成り難ね、外様へ御奉公致したか知れませぬ、いえ御奉公致して居るに違ひござりませぬ、なれど成り難い堪忍、出来難い辛棒、五年の間骨身を削らるゝ思ひして、御當家にお勤め申したは、唯若先生在らせらるゝからてござります、若先生御爲には、この髪の毛一本宛抜き取られても厭ひませぬ、この五本の指、十本の指、兩足の指の爪を一ツ宛剝がさせられても厭

ひませぬ、八萬四千の毛孔から總身の血を絞られても辛いとは思ひませぬ、身分は低うござります、なれど志はお歴々衆に負けませぬ、唯一言お情あるお言葉戴けば、このまゝ死んでも厭ひませぬ、斯程に思ふ心を不憚とも思召しませ」
熊夜叉は言ひかけて涙を拭ひぬ、鏡をかけたるが如き目からは、熱湯の涙潜々と下る、甚五左衛門は未だ無言なりき。

【三】

折柄片割月は黒き千斷れ雲の間より現はれて、森々と吹く秋風の間を照らしぬ、天地は寂たり、垣根の下に蟋蟀の聲弱り行く。

『若先生、下郎憐れと思召し下さりませぬか、下郎のこの胸に光りをお投げ下さりませぬか、下郎の渴き切つた口に、一言お情の露をお與へ下さりませぬか』

縁端より延び上るやうにして、鋭き目を甚五左衛門に浴せかけぬ、其の目の光り、甚五左衛門の胸元を射貫く時、一文字に結びたる口を初めて開きぬ。

『此方戀ではあるまい』

唯一言、而も其の一言に鐵も碎くべき力籠りぬ。

『何とござります、下郎の願ひ戀ではござりませぬと……』

『おうさ、戀でなくて刃であらう』

流石の熊夜叉も二の句を繼ぐ勇氣なく後方に挫と倒れんとして、危くも身を支えぬ。

『存じかけぬこと、さりとては存じかけませぬ……』

『二度言ふな、甚五左衛門には眼がある、尠くも其方胸の底を見る眼がある、戀ではない、刃ちや』言つて起ち上つて、一枚繰り開けた雨戸を閉ぢぬ、戸外には熊夜叉が竹縁端をひたくと叩く音して、

『御無體でござります、若先生は下郎の心を御存じて在らせられます、戀ではない、刃なんと思ひかけぬお言葉、望みの協はぬは是非もない成行、深く諦めます、なれどこの言葉に偽りあるやう思召しては、將來立瀬ござりませぬ、今一應下郎の申すことお聞取りござりませ』
甚五左衛門は遂に耳を貸さざりき、以前の座へ復つて、次の巻を静かに緋く、鐵瓶の湯は沸々煮つて、松風の音床しく、微の行燈明く照つて書物の上を照らし來る。

『若先生々々』

熊夜叉は聲の啜るゝまで呼びたれど、甚五左衛門は耳を持たぬ如く寂寞たりき。

『若先生々々』

熊夜叉は幾度呼びても、甚五左衛門の答へせぬに氣を焦ちたるらしく、竹縁より爬ひ上つて、外より雨戸を捻ぢ開けぬ、されど甚五左衛門は知らざる如く書見しぬ。

『若先生、御免遣はされませ』

繰り開けたる雨戸の間より半身を差入れて、横さまに甚五左衛門をきつと見つゝ、
『無禮をお免し下さりませ、斯程思ひ詰めたる願ひ協はぬは是非ござりませぬ、固より身に應ぜぬ願ひ、家來の分際として、お主様のお世嗣に戀をしかける、これ程恐ろしい罪はござりませぬ、望みの協はぬは當然、情ないお心をお恨み申しませぬ、切ない思ひを胸に抱いて、淵川へ身を沈めても、若先生に御迷惑はかけませぬ、お身の障りになるやうなこと致しませぬ、なれど下郎の申上げた口上に偽りあるやう思はれては、身を投げる水もござりませぬ、骨を焼く火もござりませぬ、死んでも浮かばれませぬ、生きても身を置く所ござりませぬ、早い話がこの胸の思ひ、それを目にかくれば事足りませぬ、一思ひに刺し貫し下りませ、さうして血の色赤いか白いかを御覽遣はされませ、下郎の真心は總身の血に籠めてござります、真心は赤うござります、下郎の血潮も必と赤いでござります、論より證據、この場に於てお刀の錆に

なさせられ下さりませ』

甚五左衛門は振り向いても見ざりき。

【四】

『もし若先生、下郎が斯程に申上ぐるをお聞入れござりませぬか』

熊夜又は遂に座敷の中へ膝入り入る。

『若先生、さりとてはお情なきお心、お恨みに心得まする、下郎の戀は劍など、存じがけぬ御口上、その意を得ませぬ、一應御趣意を仰せられ』

一言毎に一膝進め、又一言毎に一膝進む、甚五左衛門と熊夜又との間は僅に二尺を隔つるばかりとなりぬ、而も甚五左衛門は蚊の吁鳴る程にも感ぜず、一心に書物を繕く、熊夜又は其處に膝を立て、じろくんと四邊を見廻す、夜更けたれば家内は悉く寝静まりて、次の間の天井に鼠の走る音のみ騒がしかりき。

『若先生々々』

口癖のやうに呼びかけながら、熊夜又は左の懐中へ手を差入れぬ、彼れは其處に一刀を隠し居たりき、襟の間に柄を見せて、右の手に強く握りつ、甚五左衛門の横腹を一突に貫くべく、

『若先生々々』

身構して、又一尺ばかり膝行り寄る、甚五左衛門今一息してあらば、彼の懐中より閃き出る白蛇の光りは、直に其の身の肩先に向つて走らん、風の前の燈火、今にも空しく滅せんとする時、甚五左衛門は満身の力を籠めて、

『退れ』と大喝しぬ。

百千の雷一時に落つるとも斯程にてはよもあらじ、大海嘯襲ひ來つて山嶽を覆へすとも斯程にてはあらじ、熊夜又は片手を刀にかけたるま、三尺ばかり座を退りて、平蜘蛛の如く俯伏しぬ、甚五左衛門は確と睨みて、その目を直に書物の上に注ぐ、熊夜又は大磐石に頭を壓せられたる如く、暫らくは身も動かさず、平伏したるま、硬うなりき。

此時甚五左衛門は孫子兵勢第五を読み居たり。

『凡そ衆を治むる寡を治むるが如し、分數是也、衆と闘ふ、寡と闘ふが如し、形名是也、三軍の衆使ふべし、必ず敵を受けて而して敗る、無き者、奇正是也、兵の加ふる所、石を以て卵に投ずる如き者、虚實是也、凡そ戦ふ者、正を以て合し、奇を以て勝つ……正を以て合し、奇を以て勝つ……』

燈火は白日の如く照つて、繕きたる巻の上に、甚五左衛門の機敏き魂、風の如く往來す。

大鐵槌に頭を打たれたる如く眼眩めきて、片手を懐中の一刀に掛けたるまゝ、次の間に平太張りたる熊夜叉は、暫く生氣も付かざりき、一圖に心を書冊の上に奪られたる如く見えし甚五左衛門は、寂寞たる中に身を守る心満ちて、あはや白及横腹に臨まんとする刹那「退れ」と一喝したる聲、大砲の彈丸の如く敵の胸を打つ力ありき、甚五左衛門は十八の少年なれど、熊夜叉の敵としては餘り大きかりき。

繰り開けたる雨戸の隙より、夜風淋しく吹き入る、それに額を撫でられて、やうやくに正氣付きつゝ、再び甚五左衛門を仰ぎ見る勇氣はなかりき、其處に兩手を支きたるまゝ、聲を掛けぬ。

『御用捨なされませ、思はぬ不調法をしてござります』

『甚五左衛門は見も返らず、同じ章を讀みつけぬ。』

『木石の性、安き則は静に、危き則は動き、方なる則は止り、圓なる則は行く、故に善く人と戦ふの勢は、圓石を千仞の山に轉ずる如き勢也』

『これに懲ぬことござりませぬ、二度不調法仕りませぬ、御免なされませ』

『甚五左衛門一言の寛容を受けぬ間は、熊夜叉そこを立ち去ることすら爲し得ざりき。』

『戀でない、劍ぢや』

暫くして思ひ出したるやうに云ひぬ。

『只管御寛容を願ひまする、それでなくば此の處に於て、只一刀にこの命を奪らせませ』

『退れ』と沈着きたる聲。

『有難うござります、この御恩仇には報いませぬ』

初めて手を緩められて、熊夜叉はおつゝと爬ひ出しぬ、縛の繩より放たれたる囚人が、獄舎を出るやうにぞ見えし。

戀は果して劍なりき、熊夜叉は其の夜の中に姿を隠しぬ、玄庵もお多具も、彼が突然姿を隠したる事情を知らねど、一面には目の上の瘤を除かれたる歡びなりき。

第十二章 小供自慢

「一」

熊夜叉が姿を隠したるに就いて、最も心配の胸を懐きたるはお多具なりき、甚五左衛門は固く口を噤みて當夜の事を物語らざれば、何が爲に突然姿を隠したるかを知る由なきに由り、平生彼に對して抱き居たる疑懼の念が、更に深く胸の底に萌せるなりき、玄庵も多少心を惱ま

さゝるにあらねど、流石口へ出しては言はず、最初の間は今日や歸る明日や戻り來ると、心待ちに待ちたれど、遂に便りだもせざりき、甚五左衛門外出の供には、宗作と云ふ心利きたる下僕従へば、些も事を缺くことなけれど、お多具は熊夜叉の所爲に、深き疑ひと深き恐れとを懐くが故、若しや良人と我が子の上とに禍害の及ぶことあるまじきか、と只管懸念するなりき。
『熊夜叉は遂に歸りませぬ、一言の斷りもなく、當然取る筈のお給金も戴かず、突然に姿を隠したは深い仔細あると思はれ、何とも苦勞に堪へませぬ、あなた思召しどうござりまするな』
玄庵はこの日珍らしくも酒の氣を帶はず、病家廻りより歸りて、疲勞を番茶の煮花に休め居たりき。

『又してもそれを言ふ、熊夜叉とて足ある身、氣の向いた方へ參らう、高の知れた三文奴、何程のことかしやう、假令又彼奴が我等を仇と狙ふ曲者であるに致せ、甚五左衛門成長、山鹿の家は惣左衛門に依つて立つ、すれば明日目を瞑つても、思ひ置くこと絶えてない、武士の意地とは云へ、家中の者を手につけて、其の場から逐電した昔思へば、其の遺子の刃にかゝつて、生命捨つるも後悔せぬ、唯捨て、置け』
言葉のみは氣に止めぬ様子なりき。

『さうはなりませぬ、甚五左衛門人並に成長致し居れど、まだ親が、りの身、申さば子供、あなただ様御身に萬一のことあらば、甚五左衛門も私も暗の夜に燈火を失ふたと同様、路頭に迷はねばなりませぬ、御油斷なされますな、油斷なき心に魔はさしませぬ、油斷なき心に弓鐵砲は的中りませぬ』

『強う氣にかけるの、年こそ老つたれ、熊夜叉如きに生命取らるゝ我等でない、安堵せ』と事もなげに言ひ終り『甚五左衛門千石取る身分になるまで、乃公は死なぬぞ、どうあつても死なぬぞ』

お多具は暫く考へに耽り居たりき、良人は斯く心易く氣に止めぬ如く云へど、油斷なり難き熊夜叉の眼光、或は中途に待伏せして、欺し討にせぬとも限らぬ、さもある時は老體の旦那様不覺の最期を遂げさせらるゝかも知れぬ、惣左衛門に頼み、腕利きの若黨を召抱へて、病家廻りの供させうか、それとも甚五左衛門に命令け、見え隠れに跡を跟けさせうか、若し亦熊夜叉親の仇と恨む心から、玄庵殿ばかりでは納得せず、甚五左衛門まで附け狙ふことあるまいか、斯うと知らば町奉行へ訴へても、彼を安穩には放ち遣らぬ所、残念なこととした、取返しのかぬこととした、と心の中に繰返し思ひ煩ふ。

『二』

折柄甚五左衛門は北條安房守道場へ稽古に行きて、家には在らざりき、玄庵は口にごそ事もなげに言ひ居れど、心の底には熊夜叉を恐れ思ふこと深かりき、酔に乗じては昔語に興湧き、及の上に魂の走る音、世にこれ程快きはあるまじきなど、明らかさまに高言吐きたるが、今となりては臍を噛む悔なりき。

『酒を持って、今日は何となう心の鬱陶しさを感ずるに依つて、旨い酒を飲まうと存ずる、早う持て』

『又御酒でござりまするか、それよりも熊夜叉の在所尋ねて、此方から御成敗なされませ、月の側に叢雲の漂ふは興のないものでござります』

『さればとて廣い江戸の町、手懸りもないもの、探し當てることならうか、此方から探さずとも、熊夜叉果して玄庵に恨みあらば、彼方から現はれ出やう、熊夜叉よりも酒の香ちや、早う用意せ、肴は要らぬ、唯早いを賞玩とござるのちや』

折柄次の間に足音、執次の門人が「來客」と披露する暇もなく、連立ち入り來りしは、惣左衛門と、町野長門守の家老草村主膳の二人なりき、思ひかけぬことなれば、玄庵は驚き、

『惣左衛門か、先觸なく急用でもあつてか、草村殿も絶えて久しい、何は然れ御健勝で目出度く存ずる』

草村主膳は玄庵より五ツあまりの年下、奥城にては同家中、親しく往復もした間とて、隔意なく語り合ふ、おたぐは手早く茶を入れて侷めつ、義理ある間とて、惣左衛門のみに見する親切げは、しう見え透きたり。

『相變らず御健勝、御玄關も目を逐うて繁昌と傳へ聞き、陰ながらお慶び申し居る』
主膳は懇慫に口上す、それに續いて惣左衛門は一膝前め、

『お父様へ申上げる、今日これへ參つたは、沁々お願ひ申したきことあつての儀、委細は草村殿からお物語りあらせられう、お心には濟むまじきも、他ならぬ町野様お聲掛り、枉げてもお聞入れを願はねばなりませぬ』

『先づ聞かう、御用の次第は……』

玄庵は居坐正しく主膳の方へ膝を向けぬ、主膳は暫くして、

『外ではない、御息甚五左衛門殿、次第に御出世、學問にては林道春門人中に、屈指の達者、軍學にては小畑勘兵衛道場中、肩を比ぶるものもないと聞いた、天晴れ名譽の若者、評判は

御家中に隠れない、左程の器量人を町醫者になさる思召しもござるまい、町醫者にて山鹿玄庵の跡目相續なさせらるゝ心もあるまい、どうてござる」

「は、」と玄庵は得意氣に笑つて「何かと思へば乳の香も失せぬ甚五左衛門お噂か、世間にては如何やうに申すとも、僅かに西東を知つただけの事、大人の仲間入をしたゞけのこと、物の役にも立ち申さぬ」

「さうでない、山鹿甚五左衛門今の代の雛鳳麟兒と大名衆まで聞き及ばれ、柳營のお詰所でも専ら噂あると云ふ、それにつき稻葉佐渡守殿強つての御所望、是非若殿御指南番に召抱へたい思召しぢや」

主膳は言ひ断つて玄庵の返答如何にと待ちぬ、惣左衛門は足らぬ所を補ふやうに、

「お父様、お聞及びござりませぬか、稻葉佐渡守様、當時大奥の守本尊と尊まれ、公方様お乳人と冊かれ、恐れ多くも都御所から、春日局の御名まで賜つたお方の御縁邊、下野真岡二萬石を下されて、大名の列に入らせられた、その御奉公初めに、天下第一の軍學者を召抱へ、お家の重寶になされうとある、草村殿今日これへ参らせられたは、この儀親しう願はせらるゝお心でござり申す」

「はてな、作甚五左衛門を左程まで御所望とある、高が町醫者伴、まだ二十に満たぬ若者、左様な者を召抱へ、何の用になさせらるゝ、愚老つやゝ合點參らぬ」

【三】

「そのお言葉謙讓に過ぎ申さう」と主膳は遮るやうに言ひ「改めて申上げるまでもなく、主人長門守様奥方は、只今惣左衛門殿申された、お局さまの姪御前に渡らせられる、稻葉侯の事を聞召され、町野長門守は甚五左衛門父玄庵に一方ならぬ關係もある氣、他所より申し參るより、長門守傳手を以て、玄庵を御説得なさせられ下されうと、沁々お頼みあらせられたに依つて、態々拙者を遣はされた、新規お取立のお大名とは申せ、お局さま御縁邊、將來御加増、御出世は云ふに及ばぬ、すれば甚五左衛門一身もお幸福ぢや、御納得なさせられ」

玄庵は無言なりき、鐵瓶の中に沸く松風の音を餘念もなく聞きながら、言葉もなく思案に暮れぬ。

「それとも甚五左衛門を町醫の跡取になさせらるゝ御所存か」

主膳は改まりたる聲にて問ひぬ。

「憚りながら拙者も以前は武士でござる」と玄庵は不平の聲。